文明八年十二月二十七日

七條（嵯、大下結種袈裟、新大納言（季春、淨衣、重袈裟、布、以下同之、）廣橋大納言（綱光、按察使、親長、民部卿、忠富、不懸念珠、彼家輩、就神職不受衣、仍今度猶略之云々、）下官等著座しをはりて、みな塗香三反して、名香茂光、抹香をもる、此間調聲ありてうちあらし、開白のおとはを走しむ、これ則善道大師の法事讃序の文を、到彼無□齊同不退なりといふまでひきうつして、奥よ勅願乃むきをのふ、方今爲我君無二之叡願、開般舟三昧之道場、資先皇尊儀之覺路、修旋繞念佛之淨業あとよゝあけさる、いとたうとし、かくて又磬をうち、廣懺悔の文をとおへ、八句念佛をいさゝ、其後行道、異口同音に高聲念佛千反して、又著座小念佛をとおふ、此念佛ハ、西山上人唱ハしめ給よし、かさりにさへさり、甲乙のうつり、八句念佛を摸して、いとありかさくおこへ侍る、其後五悔をハりて、行道をハしめ、悲喜交流深自慶、不因尺迦佛開悟、彌陀名願何時聞、荷佛慈因實難報とうちいてまる、聲乃ほゝきも、文の心も、いとおものひかさくゐうまくて、さてもかくあむりさおこ御法の聲をも、物隔てきゝ侍らんハ、きにもたちその中此世界にまさひらきはらん心ちもおき侍らんを、吾君此ゐうきおそんあれゝにはゐられて、かうやうの砌まるいりあひぬるかさしきおさ、先朝の聖恩をもうけ報謝し奉

八句念佛
小念佛
五悔
開白

諸宮及ビ大炊御門信子等聽聞

第二日後夜作法照提調聲

日中善空調聲尊敎親王聽聞セラル

初夜吟崇調聲

りぬる心ちし、彌卽便往生のうさゝひおき身とも成ぬる心ちして、隨喜のおもひれさへかさく、江州司馬の袂よひとしくそ侍し、けて廻向の讃あとゝ、又著座して、尺迦、彌陀、觀音、勢至等を、茂のゝ〳〵三禮し奉り、けらよ立東洞院殿おとをわしめまいらをて、舊院上臈局、大納言典侍以下あまさけふらも給ふとゝや、簾中の事ゐしゝふも侍らそ、冷泉大納言（爲富）、右大將（信量）おと、外よも聽聞のゐめ、まいりをつゝも侍らそ、わしめおきおわれぬる、めてさおよし、勾當內侍よ文さてまつりく、奏聞をけせ侍りき、

三日、後夜の調聲照提これをつゝふ事おし、（但表白を略も、これらるちそる事おりとおむ、）程ちゝき寺の鐘のひゝきも、念佛の聲にうちそひて、おゝき夜の袮ふりもさめぬる心ちおむし侍し、

日中午のそくほおとより、僧衆おいりをりまほ調聲長老おり、々ふハ二宮此御ゝさ、うち〳〵おらを給て、聽聞をけせおハしまに、

初夜、調聲吟崇これをはとむ、霧わさりさる西の山きを、三日月の影不のゝ

堯胤法親王聽聞セラル

第三日後夜統蓮調聲

日中中康調聲

善空八齋戒ヲ諸人ニ授ク

初夜宗純調聲

よ去りこぬる程、砌の松風ひゝきあひて、御法のこゑもことよあれありきんゝし、抑北座その所をえたれよりも、東北僧衆北座をひきかへて、大納言入道の座を、東北ゝさようつし、新大納言北の一座よりゝる、今夜ハ梶井（尭胤法親王）宮聽聞をさせ給ふ、

四日、後夜調聲統蓮あり、梨本宮さねの夜れまゝ、此寺よりさらせ給ふ、聽聞ちをおハしまして、

日中ハ中康調聲を、聲いとよくて、有かさくきこえ侍りき、々ふハ彼岸のをハりよ侍まハよや、貴賤ゆをつみちて、庭上尺地もをき間なくうみえし、念佛事をハりゝ、長老まのて給ふをとゝめて、をのゝ〳〵八齋戒をゑもち侍りぬ、うしてこの度ハ、おほやきにさへあさゝらぬ御ちうしんよて侍しゝハ、みおもとはらよ戒律をまもりて、淨名のむゝーをまれひゑる、優婆塞乃ほとめよなん侍し、

初夜宗純調聲なり、武家の女房おともまいりて、聽聞をられゝるとゝや、晝よりも猶聽衆群集して、念佛の聲も數そふ心ちして、一入あれれよきおえ侍り、

第四日後夜定意調聲

日中統惠調聲

初夜中康調聲

第五日後夜統蓮調聲

日中穎芳調聲

第一皇子尊敦親王　邦高親王　堯胤法親王等聽聞シ給フ

初夜四辻季春調聲

第六日後夜宗純調聲

日中善空調聲

五日、後夜調聲定意なり、右大將（雅康）、右兵衞督、右の宰相中將（正親町公兼）おと、よへのまゝさふらひて聽聞を、

日中ハ、統惠調聲をゝとむ、

初夜中康調聲あり、

六日、後夜調聲統蓮あり、

日中調聲穎芳これをつとむ、〻ふハ若宮御方、二宮御方、式部卿宮、梶井宮なと、うち〳〵聽聞させおをしまして、かゑうよみおゑさらを給へハ、なき御ゝけよも、ちうハとあれよ見それをしましはをらむとおもひたまへて、稱名のうちよも、涙もよほし侍りぬ、

初夜新大納言調聲をゝとめらほゝいとめつらゝある風情よて、ゑうとはこととさらに、道俗男女にとひまいりぬ、伏見殿、梶井殿なとも、ひるのまゝとゝほらを給て、聽聞させをハしまして、

七日、後夜宗純調聲なり、

日中長老調聲せらほゝつゑよりも有ゝさは、誠よ涙おとにハゝりなり、ちまハ黃老の彈をる時、嬰兒ゑちて舞ゑめし有て、ゑゝかしこにおミゆさるあ

初夜　統惠調聲
第七日後夜　吟崇調聲
日中　穎芳調聲
日野氏廳聞

やしのおきれ、去年冬るひ八の、おまのあやめも去らぬまて、自然の感まゐへもや有々ん、我のまのかほのおるらんさゑも去らも、すゝろまに聲うちたてまてよりほそせりゝ、念佛のこゑくいへゐるりらつきいと見くるしく、つゐゐゝえゝぬへき心ちせしも、おもひとけい、一聲十聲猶來迎にあつかる、御本誓むおしからも、これもみお一えちも乃露のちきりあさえならぬ事に侍まい、いるまうけやしきすゝさありとも、いつまも無有好醜の悲願ま乘し、悉皆金色の妙相まこそ侍らめと、中々みまくきすゝさともう、あれゐおもひ給へりし、

初夜、統惠調聲も、いとまうとくうきおえ侍し、今夜も武家の女中衆あと、聽聞きられゐるとゐや、

八日、後夜調聲吟崇なり、

日中穎芳調聲我りとむ、々ふいお御臺をいしめまいらせ、三時知恩院以下、これゐまあまさはふらひ給ふ、よるをり降出し雨猶あまに、ねおふくもまなりし空ま引ゐへて、去めやゐよかきくらも程、道場も奥ふゐく物さひて、いとゝ懷舊の淚もふりそひぬるま、軒の去りくもはくゝと、稱名の聲を

初夜　吟崇調聲
結願後夜　定意調聲
日中　中康調聲
供養唱導　師善空　唱師穎芳　散花統惠　俗衆散花　表白

ゐもくほ心ちをし、念佛のそてりおとろゝくしくきこえしゐ、らぬひゝきもいとめつらゐゐる事ま、天龍八部の法味を隨喜しきむ去るしまやと、かへりくゐへゐる一ゐしま、世の人も申侍りけるとゐん、初夜調聲吟崇なり、こよひハゐねま、たゝなし侍りぬ、

九日、後夜調聲定意これをりとむ、

日中調聲中康なり、曉より雨やみて、々ふいおまと更天氣もこゝろよく侍まハ、勅願の成就も、いよゝくうさゐぬ、結願をハにをよりも早速まこゐひ侍るへきよし、かほてよりうゐひけさめて、巳のくさりまおまをハしむ、念佛の作法をハりく後各著座、長老供養の唱導師としく、佛前ますゝみにゐる、唄師穎芳、散花統惠なり、（俗衆亦起立散花、是依長老之命也）二箇をハりく表白をよむ、凡おと葉の林まおひおほくして、御法の花の色をそへ、心のいりまく底深して、ゐゐら此池のおゐれよりもきよくやと、ゐくひおきをうとけまよ、尺提桓因切利之月、千歲之影終有限、達多龍

六種廻向　中康伽陀ヲ唱フ
諸宮焼香セラル　眞乗寺曇花院宮等聽聞セラル

王無熱之水、一劫之波非無期、天上天下皆如爾、有輪有情豈可常也あといふ
ことわり、いとせきあへぬを、そこや乃山の、七とせ此雪ふりまし跡のうるしさ
も、とりへの野への、一夜此煙消まし空此あれさも、いまハさけらまし立う
へる心ちして、さにゐへをや有けん、みそのうちまも、ばゐをあのひやうま
かミさに程、宓以今上皇帝者、威恭於風雲、徳重於丘山、政在于清直、盍復延
喜天暦之無爲、道契于天心、須歸于文王武王之有道、況又禀上聖之姿、訪中道
之戒聞尺迦之遺教、位彌陀之本誓、可崇可尊、愼終追遠者、仲尼之古善言也、本
立道生者、明王之今孝行也、然如法如説之念佛者、希有之叡願也、奇異之佛事
也、熟視道儀、抛絹綿之衣、擬道場於四明之杉洞、列紙布之袂、契生所於九品之
花臺あと、いとおもしろくよミおきて、ハてのりうさ、観夫白露結秋葉、恰似摸
白毫之粧、黄菊(菊)迎重陽、□如拜黄金之膚、景趣自然也、御願成辨そらん、啓白、詞
短本尊知見ましまへなとよミて、六種廻向等つゐのことくまて、中康伽陀
をとおふ、所謂其佛本願力、聖靈也、きよ廻向を誦し、無言の行道例のまとく
して、道場をいり堂荘嚴等少々これを撤をしめて後、宮々おと燒香をけせ
おハしまに、々ふも眞乗寺、曇花院梶井宮、東洞院(大炊御門信子)殿、舊院上臈ををしめて、ミ

勤仕公卿諸臣ノ姓名注進

嚴重ノ儀朝廷ノ御講ニ劣ラズ

如法念佛聽衆

初夜

おまいりにとひ給へり、そうして此程よるひる内の女房達、女官以下、局ま
ちの女ともまいさるまゝ、のまりおく聽聞しゝるとおん、いとゝりうさた
結縁にこそ、くハしくまるをにをよハを、上達部、殿上人をハ、ゐいりぬる輩
おとゝ〳〵をまるゝ〳〵、ゐてまつるへきよしおほせたまひしゝハ、結願の後、
參内のにゐて、勾當内侍よつきて、うち〳〵ゐてまつり侍き、
加奥抑この度ひ此御法、叡位の他まとあるよりも、公庭の御講あとよ
もおとらぬさゐに、よろり嚴重此儀式よ侍しゝハ、いとめつらゝにおもひ
ゐまへて、ほをる事しも侍らねと、なよとおくまゝゝうしこれにきめハゝり、
う浅ゐにのち此と、ゐにまゝうさけのまゝ、節去蜂愁ありした、秋闌虫怨ころ、ゝ
つハ蕉紗此まゝりゝある興にひゝれく、聊草書此おろそゝるすけひをの
まにま南侍りける、ほさゐてそれぬるまとも、ひゝ事も數おく侍らん、いと
ゝさハらいせ此事まこそ、

如法念佛聽衆

開白

初夜

文明八年十二月二十七日

冷泉大納言(爲富)、右大將、源大納言(雅行)、滋野井前宰相中將(教國)、右兵衞督(雅康)、左大辨宰相(廣光)、季經朝臣、兼顯朝臣、言國朝臣、實興朝臣、元長、

第二日

第二日日中

勸修寺大納言(教秀)、元長、

初夜

右大將(信量)、源大納言、元長、

第三日

第三日後夜

元長、

日中

勸修寺大納言、世尊寺前宰相(行康)、滋野井前宰相中將、右兵衞督、左大辨宰相(正親町)、公兼朝臣、季經朝臣(冷泉)、爲廣朝臣、元長、

第四日

初夜

右大將、源大納言、右兵衞督、左大辨宰相、公兼朝臣、兼顯朝臣、元長、以量、

第四日後夜

右大將、右兵衞督(雅康)、公兼朝臣、元長、

日中

元長、

初夜

冷泉大納言(爲富)、右大將(信量)、花山院大納言(政長)、勸解由小路前中納言(高清)、公兼朝臣、季經朝臣、

第五日

第五日後夜

元長、

日中

冷泉大納言、源大納言(雅行)、滋野井前宰相中將(教國)、左大辨宰相(廣光)、季經朝臣、爲廣朝臣、元長、

第五日

初夜

日野大納言(安繩)、冷泉大納言、右大將、源大納言、滋野井前宰相中將、右兵衞督、左大辨宰相(柳原)、量光朝臣、爲廣朝臣、

第六日

第六日後夜

元長、

第七日

日中
勸修寺大納言(教秀)、右大將(信量)、世尊寺前宰相(行康)、左大辨宰相(廣光)、改顯(觀修寺)、元長、以量、

初夜
中院前大納言(通秀)、冷泉大納言(爲富)、
元長、重治(田向)、賢房(萬里小路)、阿古丸(唐橋)、菅原在數、

第七日後夜
左大辨宰相、元長、

日中
勸修寺大納言(教秀)、源大納言(雅行)、左大辨宰相(廣光)、

初夜
冷泉大納言(爲富)、源大納言(雅行)、左大辨宰相(廣光)、
結願後夜
冷泉大納言

日中
勸修寺大納言(教秀)、右大將(信量)、量光朝臣、季經朝臣、兼顯朝臣、爲廣朝臣、

法中衆
地下人

法中衆

第三日日中
蓮光院

第四日日中
廬山寺

第五日日中
蓮光院雲龍院、安樂光院、
正益、

初夜
顯豪僧都

第六日日中
昭慶法印

初夜
守鍛(眞光院)僧正

第七日日中

地下輩

開白初夜
明茂(半井)卿、師富(中原)朝臣、

第二日日中
師富朝臣

初夜
師富朝臣

第三日日中
師富朝臣、重長(丹對)朝臣、
景益、

初夜
明茂卿、師富朝臣、

第四日初夜
種直(富小路)朝臣

第五日日中

昭慶法印
結願日中
廬山寺

如法念佛衆
外護衆
五種行ヲ安禪寺ニ行フ
聲明懺法
曼荼羅供
義政燒香

如法念佛衆
（廬山寺衆同）
長老、顯芳、照提、吟、（以下二尊院衆）崇統、惠、中康、統遵、
宗純、定意、
外護衆
玄般、善隆、

〈實隆公記〉三　十月廿一日、辛卯、天顏快晴、自今日、於安禪寺宮爲敕願、（舊院七回）
（御追善、）有五種行、（惠忍上人沙汰、）
廿三日、癸巳、雨降、今日於安禪寺聲明懺法、有付物樂等云々、
廿六日、丙申、晴、早旦退出、向內府亭、晩頭參聖壽寺、例時聽聞之、今夜候彼寺、
廿七日、丁酉、晴、今日於聖壽寺有曼陀羅供云々、武家□（爲カ）燒香御參、一獻及五更云々、爲參會少々被祗候、予依故障事不參、早旦退出了、晩頭（向カ）同東庵二尊院等、

師富朝臣、種直朝臣、
初夜
重長朝臣
第六日日中
師富朝臣
初夜
明茂卿（土御門）、泰清朝臣、師富朝臣、重長朝臣、
結願日中
明茂卿、師富朝臣、

惠忍老年ノ故ヲ以テ期ヲ早ムル
甘露寺親長傳奏ヲ命ゼラル
義政夫人日野氏ト云ヒ諧聽聞
義政義尚燒香

結願
義政夫人日野氏ト云ヒ諧聽聞

入□（夜カ）雨降、

〈親長卿記〉七　十月廿一日、晴、自今日七ヶ日、於安禪寺殿被行五種行、元應寺僧衆也、舊院七回御追修也、十二月當月雖然長老上人爲老躰（體）現塞時分難治、今月來月可被行之由申請之故也、予傳奏事先日被仰下畢、依爲黑衣方事無催之儀、仍不及奉行、職事行事辨等用脚方事、如形申付之故、被定傳奏也、其儀有別記、○（別記ハ見エズ、）

〈長興宿禰記〉上　十月廿一日、辛卯、今日於聖壽寺（白雲、）方丈被始行五種妙行、後花園院七回忌來十二月廿七日也、仍爲彼追善、一七ヶ日被修之、元應寺長老惠忍房以下、同寺僧侶參役之、
廿七日、結願也、今日於同所被行曼陀羅供、導師惠忍房（號攝取院、）參役之、室町殿准后、同御臺御方爲御聽聞渡御也、法會之後、於方（北脇カ）暫有一獻、安禪寺殿御座（彼カ）後寺之間、有御用意云々、

〈歷代殘闕日記〉八十七（言國卿記）　十月廿七日、天晴、今日安禪寺殿（今年ハ舊院御七年也、ソノ御佛事共也、）へ室町殿御燒香ニ御ナリアリ、予御供也、五時分ニ安禪寺殿へ參、武家五過時分ニ御ナリアリ、參會之衆、勸修寺大納言（教秀）、廣橋大納言（兼光）、源大納言（庭田雅行）、按察（甘露寺伺長）藤宰相（白川忠富）、民部卿、遲參、

日野侍從也、各直垂也、（廣橋筆脚）頭辨御供也、御クツノヤク也、同御カウハコ予御劔也、
〳〵聽而万陀羅勺（供）ハシマル也、ケンヲウシノサタ也、此間七日五集（種行）經ナリ
ト云々、〳〵頭辨狩衣、予衣冠也、四過時分ニクワンキヨ也、雨降間、予手カサ
ヲ取也、頭辨同之、各參會也、

〔實隆公記〕三　十月五日、乙亥、晴、抑舊院七回御忌御作善、此間未定□僧法
會一日十座八講等兩端之間、如何之由會議之處、法花懺法一ケ日於禁中可
被行歟之趣、今日被定了、傳奏廣橋大納言、奉行元長也、
十日、庚辰、晴、○略中歸家之後、向中院、御懺法講記等借請之、○略中歸宅後、御講記
於灯下一覽、
十五日、乙酉、天晴、御懺法講事、奉行職事相催之、一通到來、
自來月廿六日、兩日可被行御懺法、可令早參給、仍執啓如件、
十月十五日　左少辨元長
謹上　頭中將殿
追啓、日々散花役事、同可令存知給也、
請文等遣之、雖然可存知之由、內々返答了、

（禁中ニテ法華懺法ヲ修セシメントス）
（廣橋綱光傳奏）
（甘露寺元長奉行）
（大原ニテ法花懺法職事催促）
（文安寬正御懺法注進）
（應永十九年ノ例）

廿一日、辛卯、天顏快晴、自今日爲菅原在數代小番祗候、早旦行水遙拜如例、午
下剋參內、晝間參御前種々御雜談、今度御懺法講奉行之事、且者任度々之例、
雖當申沙汰之仁、傳奏之事、兼日都護卿望申、於傳奏之事者、就惣傳奏綱光卿
存知可爲勿論然者奉行可爲元長之由、勅定之趣被仰下、誠尤雖可存知事、當
時每事未陳□頗可爲難澁、都護卿如此事練磨、公私之儀可然歟之由言上了、
十一月廿七日、今日於大原法花懺法、爲勅願□地下伶倫等罷向云々、
〔親長卿記〕七　九月廿六日、晴、早旦自廣橋大納言許、寬正御懺法惣用可注
進云々、文安、寬正予傳奏、注進畢、
十月十一日、晴、參內、番也、自今日五ケ日予番也、每日御懺法沙汰之外無他事、
元長奉行也、其儀有別紙、
十一月四日、晴、朝間有召參內（下姿）、御懺法事被仰談事等在之、注別記、○別記見エズ、
〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記　十月十一日、京都ヨリ掃部助下也、來月御懺法
講アルヘキ由被仰下也、
十一月十九日、天晴、御懺法大原ニテ可被行也、應永十九年ノ御レイナリ、
廿七日、天晴、今日大原ニテ御懺法在之、僧衆十八也、地下樂緣秋、慶秋、眞秋、景

兼、景益豊原統秋、季繼等昨日下云々、

〔魚山乃御ねと〕

文明八 後花園 おほせし舊院御七廻忌りて、大ある御追善とも、月々をこおひ分給ふ、せり
えす、八々乃いとなミ、道々乃せしおミはゝそ、ぬるきにかへる心地してそ
へるふ、はゝらはる外り、おの十一月十三日亥剋はゝりに、皇居流火ねせそ
に回祿して、俄り先小川亭へ臨幸あるしかハ、其後ハかゝ乃御法の御あらはゝ
しをむおしくすてをかるゐきに、御懇志乃あまり、勅願乃儀式を此山り宇
つはれ、寺務公意法印うゑ給りて、勝林院の御堂ゐして、かさねおせく兩日
せりをこおハる、應永十九年、毘沙門堂乃室りてほとをらましせめしを侍
るうへ、御陵ねりき事ゐれハ、彼是ゐよりをよ沙しくや邂逅乃御願、當寺ね
面目りて侍きハ、本尊彌陀乃佛意よりはしをて、後記を存する寺僧おせハ、
公庭ゑ所作りゑさかひ侍らぬゐきの中にを、かゝりハよ逸おひあふ輩も
侍るゐし、期日りいさりて、道場を見給ふよ、内陣をいせうむろきれハ、本佛
乃脇より屏風を立めくらして、かゐほきくしう出へゐつ、正面乃中間

大原勝林院ニ於テ法花懺法ヲ修セシム
皇居焼失ニ依リ禁中ニテ行ハレズ
公意ヲシテ勅願ノ式ヲ行ハシム
道場ノ裝飾

尭胤法親王

初日
朝座
夕座
樂人參加

りゐ佛臺ををへて、普賢像をかき、前机二脚をせてゝ、閼伽已下をおらぬ、幡花
鬘ゐせをはやかりけして、莊嚴乃ねをむきハ、御殿ゐて侍らんよをおハる
せおろ侍らし、西乃障子りせゐゑて、僧衆乃座をしき、其方ね便處をゑりらむ
て、地下伶倫ね局せす、内々ね事にて侍れハ、簾中ゐはうくるにや、東乃一ね
間りをみをねせれて、予ゝ聽聞所とゝまふ、廿六日午乃下剋り、先集會乃鐘
をおらして、衆僧參堂を、鈍色甲袈裟うるハしう、きに御願ねをかさを見え
をへ足、ねろ〳〵中の妻戸より入ゐ、前座主公承僧正ハ、絕席して北れもて
りつき、公意法印以下ハ南上東面ゐ次第り著座す、已上十人おり、堂童子を
なをれハ、花筥ハ承仕是を役をせ、せゝし公承僧正師資前ハ慶憲律師さらに
座を立て置侍る、朝座乃懺法をハりて、供花をゐむらねあらせめ、せろはゝ
夕座をハーせ、切音錫杖、早懺法、ゐゝそ例時をはゝく、處からおるう、いせゐ
うとくて、きゝゐれ侍る梵音を、身ゐしむ心地せし給ふ、そちゐしき雨さへ
せゝれて、六根懺悔乃庭りら、をねりりら三毒煩惱の焰滅をを祂侍足、入逢乃
四せゐ事はてゝ、みゐ座をせ例、あすハむせきハとりねく沙ハる間きにて、
地下乃樂人はゝり、少々おをひ登山するゐきおゆ、道乃執心をゐしくこ

第二日

樂人參加

早懺法

廿七日、御月忌をかきく當日あり、天顏快くなれ共、衆罪乃霜露も、消ふ者恵日乃光りきえぬへう、陰晴自然此理り叶侍るゐを、叡心あさゝらぬ程乃、空りあられて、先皇をけ者納受をさ勢給らん者、有かさく覺侍し、昨日よりをそやく鐘をもよほしき、已乃一點ゐ連衆參堂す、伶倫ハえほし淨衣ゐて、大庭をゑて西乃りの不絲よ入ぬ、衆乃著座此ゝち、盤渉調乃調子を吹いさ者、此間花筥をくハるけきろあ者し、何の色ぬしをなきれハ、やかてうし波ぬきをめて、いと無念りおう、次ゐ惣禮乃樂、同伽陀、又昇樂あゑて、調聲禮盤りありる、一心敬禮者いひいて者るあゐ乃ゐほひを、まなうあのむろさし、段々此物乃絲者を、山此鳥をおとあゝして、りき物あ者いとおもしあく、俗樂法樂ゑさて引きをを、まりと思あらる、軒乃五葉此松風、此絲よりも猶をおう、あろ引ゝ水りひゝきあい、物してかきあらさぬ波此うあらへゐ、兩絃をを補ふかとうさかそれ侍し、身意二段了、臨期所望によりて、朱博士をゐんよむ、かうやうりわさハ、心あらん都人乃多りおきと、あさらしうほてきゝあを、上下いまさこゝちれさめぬ程よや、誰をよたり侍らに、きふハ例時ハあくて、早懺法りて、晡時よ事終ゑぬりま者あ此聽衆を、むきかハりて、あやしき此村乃翁、けを此ゑもめ乃者ゝひまりぬさりこ波ほひて、あかにくちれゝ者、涙おとしあへゐも、きぬゝつき此ゆまりみち侍らんより

ハ、中々のそれよみえし、所作乃次第あと、おつかり思ひ出侍るり、

公承僧正を、兩日呪願乃ことあり、　公意法印を當日此錫杖、
賴憲法印を、前日乃錫杖、　宗藝法印ハ當日を調聲、
良秀法印ハ、前日の調聲、　宏藝法印ハ、前日乃早懺法、
存運律師ハ、當日此早懺法、　慶藝法印を、前日乃伽陀、
慶憲律師を、當日を伽陀、　重榮律師を、前日乃例時波りとを、
承仕二人、金順法橋、金春法橋あり、
地下乃伶人ハ、
笙　緣秋朝臣、直秋、　篳篥　安倍季繼、　笛　景兼、景益、大神景俊、
羯皷　慶秋、　大皷　豐原統秋等八人也、
樂ハ惣禮　宗明樂、　昇樂　採桑老、樂拍子、　供養文後　万秋樂破、
敬禮段後　蘇香三帖、　眼耳後　同急、　鼻舌後　白柱、　向悔後　輪臺青海波、　下樂　竹林樂、　廻向了　千秋樂、已上九者あ此

勅使參向セズ

實隆ノ勸ニ依リ堯胤法親王見聞スル所ヲ書ス

し、

兩日事ありてり行まぬるりハ、猶勅使乃著座りをよハせ、堂上北方々乃所はを侍らぬまと北ニ、ほいおう心乃うちにも思ひハらほ禁闕りてあらはしかハ、いつおもへて世き御ませさはりて、はるゝ結緣乃望を侍らんりし、よ浴りかハりはてゐるおそ、さゝめおきうた世乃、いくせしれみされ乃中りを、いま更おあさはしう、尺魔のいさに大變、おそ浴しともいへハをろうにや、れはよ堪此度乃御講りゐきてゝ、彼寺しハかせ、うちく、北御をいおりゝ參內して、かゝる山乃(堯胤法親王)ゐさへ、おもひ出れはう侍しりおと、後代おもひまをしをくゐき筋、せかくをまさり侍るに、勞ゐて一筆をゐきまらせて、雲井乃御法のとゝはりぬる念おはを、そおしをはるまで侍らんせ、頭中將(三條西實隆)あなかちり申送て侍れハ、二日をりきて見聞し給ふるりひをれく、いなせハきまえかさう、そや月もへさゝ更ぬる事成、りさはしおもひれこして、ふうほさおれ物のら、いさゝか硯凍を堪ゝき、筆露をおさゝ侍る也、僧名おせ、家記りむきう乃されて侍らん日ハ、則返さるへきをや、時り文明八乃せ一おハを北十日比り、漁山おしまおれをあるし乃きぬ、

百萬反念佛

法名常茂

船ノ公事ニテ上分米ヲ抑留ス

返納セザレバ神木ヲ向ケントス

〔實隆公記〕　三十一月十日、庚戌晴、沐浴、自今日百万反念佛始□奉爲舊院追善也入夜向東庵、

從二位半井明茂出家ス、

〔公卿補任〕(四十二)　非參議從二位和明茂　十二月廿七日出家、法名常茂、

〔公卿補任〕　非參議從三位和明茂、五一、十寶德三年正月五日敍前典藥頭、前治部卿、父故從三位明成卿、母、○以上四十、○以上享德三年正月五日敍正三位、○以上四十一、文正二年正月十一日敍從二位、於家初例歟、○以上四十二、

○明茂薨ズルコト、十五年七月六日ノ條ニ見ユ、

荒木田氏經、書ヲ相差能景ニ遣リ、伊勢內外宮上分米ヲ抑留セルヲ返付センコトヲ求ム、

〔外宮引付〕

一太神宮御饌米之上分等被召置候之條驚入候、舟之公事候へハとて、上分を被召候事、併御神敵之儀候哉、速返給候ハヽ可喜入候、不然者御饌令闕如、天下御祈禱之神事可退轉候之條、無勿躰候、仍任神宮之法、可奉向御榊候へ共、先爲得御意令申候、無相違候者、目出可喜入候、且又可爲御祈禱候、

文明八年十二月二十七日

小濱北村
儲船相差
方ニ役錢
ヲ納メザ
ルヲ以テ
押留ス

文明八年十二月二十七日

神宮一同此由令申候、委細者使僧可申候、恐々謹言、

十二月廿七日　　氏經（源木下）判

相差殿

畏御書拜見申候、依小濱之北村方儲船、此方役等無沙汰候之間、致其罪科候之處、彼人物之内御上分候之由承候、驚入存候、左樣之御代官候者、則可承候之處、をかせ物共取亂候之間、不及力候、以此旨御面（免）候者、可畏存候、恐々謹言、

極月廿八日　　能景判

進上　御長官樣　御返報　　相差

文明九丁酉年

畏申上候、仍こんとおもまきさむらをうの舟やとい候間、一もとりせんとうはゝまつり候ところに、あふさすをうへとられ申て候、さ候間、荷物九十五石つゝ申て候と、舟に米卅石そへられ候て給候を、やまさの上荷ぬしと、ふあゝさ共らうまいに二石五斗はゝまつり候、七石五斗舟方十

上分米進入

聽宣ヲ下シ返辨ヲ促ス

五人のふんにひきて候、これハくるいせんの御をうまて候、又三貫文同あゝまてつゝい申て候ハ、これハせんとうのたいふにつゝまつり申て候、以上十石のき申て候、いま廿石のこり申て候を、内宮御上分四十二石五斗、げくうの御上分四十二石五斗、以上八十五石まて御入候を、内宮へ、十石、山田へ十石進上申候、さらにをさくしのこまうおく候、もしふしんにおほしめし候ハゝ、あふさ方へまても候へ、きさむらをうへまても候へ、御たつねあるへく候、恐々謹言、

正月六日　　うちをま大夫判

内宮　又四郎殿　參人々御中　　みなとより

聽宣

可早任員數致辨沙汰太神宮御饌米上分事

右件上分者、爲太神宮御饌米、自諸御厨令徵納、奉送本宮之處、號有過彼船、無故抑留上分之條、神鑑在恐者哉、因茲御饌令懈怠、御祈禱神事令退轉之條、天下御愼神宮重事也、速被返渡彼上分米、備御饌遂行神事、可致天下御

文明八年十二月二十七日

文明八年十二月二十七日

祈禱、若猶不被返備者、任神宮法、奉向兩宮御神木、可令蒔神灰之狀、所宣如件、以宣、

文明九年四月日　神主　判

禰宜荒木田神主　判

十人判同前、〇内宮引付同文、ナルニ依リ畧ス、

舊冬令申候御饌米上分事、兎角承依不被辨返、御饌退轉候之條、無勿體候、神宮一同憤候、就其十人禰宜成連署、廳宣進候、巨細載廳宣候、不日返給、令供進御饌遂神事候者、可目出候、無其儀候者、立御神木、可令蒔神灰候、恐々謹言、

五月十日　　氏經判

相差殿　　内宮一神主

御長膳(宣)畏拜見申候、抑舊冬蒙仰候小濱北村船、此方舟役不沙汰仕候間、致其罪科候之處、此人物之内御上分有由申候間、少事舟そへ候てさしおき候、相殘候内、猶々御上分有由承候、則侍共ヲけちらし候間、了簡不及候、此方之事、何樣罪舟いつも罪科仕法候之間、其沙汰致候、以此旨御免候者、可畏入候、恐々謹言、

五月十五日　　相差千代鶴判

謹上　御長官樣　御返報人々御中

二十九日、記、關白九條政基ニ牛車ヲ聽ス、〔宮内省圖書寮所藏文書〕（關白宣下一會）

文明八年十二月廿九日　宣旨

關白從一位藤原朝臣（九條政基）

宣聽牛車

藏人右中辨藤原政顯奉

跪請

宣旨

關白從一位藤原朝臣

文明八年十二月二十九日

宜聽牛車事

右宣旨跪所請如件、

十二月廿九日　　大外記中原師富 請文

關白從一位藤原朝臣

正二位行權大納言藤原朝臣敎秀宣、奉勅件人宜令聽乘牛車出入宮中者、

文明八年十二月廿九日　掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

大内記西坊城長胤ヲ罷メ、唐橋在數ヲ以テ之ニ代フ、

〈親長卿記〉七　十二月廿七日、雨降、未剋許晴、早旦參內（下姿○中略）中六位藏人事、長胤（烏丸）未出京云々、大藏卿種々申子細之故也、仰云、慥聞定可申、今日令不參者、可被替內記、就內記武家御加給之時、有得分、仍令執心之故也云々、仰奉行畢、

廿九日、晴、入夜參內、○中略次仰云、菅原長胤一昨日不參之間、內記事可被改替、四位五位拜任歟之由有御尋、勿論之由申入、次敍位事、爲臨時宣下之上者、不可爲明年正月五日歟、予申云、就御佳例、可爲五日之由有其沙汰、但五日爲御衰日、可爲六日歟由申入、然者無餘日之間、菅原在數難存知歟、予申云、裝束等無用意歟、仰山科殿得織裝束云々、在數在坂本之間、三ヶ日之事者、河原通路難叶歟、先裝束事、山科可申付之由可被仰歟、其由可仰之由有仰、仰言國朝臣畢、卽以御文、勾當內侍奉、大內記事止菅原長胤、可還任菅原在數之由、可仰之由、被仰勸修寺大納言、次退出、

〈御湯殿上日記〉一　文明九年正月六日、ゐりゐす大内記おほせつかるゝ、

〈唐橋家譜〉在數從二位前權中納言在治男、　文明八年十二月廿九日還任大內記、

在數近江坂本ニ在リ
裝束ヲ山科言國ニ命ズ
內侍宣

大內記ニハ幕府ノ加給アリ
長胤御法會ニ勤仕セザルヲ以テ罷ム

明星閣院ヲ造ル

明育肥後ヨリ京都ニ來ル

隈部忠直送別ノ詩ヲ贈ル

龍澤和韻ノ詩

景三菊池重朝ノ明育ヲ送ルノ詩ニ次ス

是歲、畠山政長、北野社ニ法樂千句ヲ興行ス、

〈園塵〉一發句　文明八年、畠山左金吾（政長）、法樂とて、北野の社にて千句侍しに、春雨、

春雨をしらする露の草木哉

出雲杵築社ヲ修造ス、

〈杵築大社遷宮次第〉杵築大社御遷宮幷御顚倒次第事

一文明八年、丙申、大社御造營、明星閣院始之、

肥後清源寺明育（季材）ヲ東福寺住持トナス、

〈默雲稿〉丙申（文明八）之歲、清源老師、發肥之後州、館于帝城、旬月之間、蒙承天、（筑前博多ニ）アリ、惠日兩刹鈞帖、可謂榮遇矣、竊聞肥之爲國也、有文有武、民知禮節、實邦君仁化所覃也、隈部（忠直）公習武之暇、尤嗜文雅、作詩一章、祖餞老師東遊、於是輦下能賦之士、賡而歌之、余亦攀其韻、以奉賀老師榮歸云、

榮遷一日翥鵬程、歲暮何心赴石城、只恨高蹤攀不得、歸雲千里影英英、

〈補菴京華集〉依肥后州太守菊池藤公（重朝）送新惠日季材老人赴京師詩韻

方外論交行化餘、參寥玉局不曾如、西州風俗聽人說、戶々民村夜誦書、

靈彥重朝ノ明育ヲ送ルノ詩ニ次ス

重朝ノ詩

景三忠直ノ明育ヲ送ルノ詩ニ次ス

〈村菴稿〉中　次菊池藤重朝送季材赴京師詩韻

衲僧行李不求餘、一葦江湖縱所如、却是有詩携手袖、使君臨別手親書、

〈村菴稿〉下　致菊池藤重朝送育季材赴京師偶和詩後

清源季材師適自紫陽而到皇都之日、與故友舊朋出迎者相誇云、我自遠方所齎至寶、富可埒國、豈不快諸輩之先覩乎、手採其袖中得焉、乃肥州太守菊池藤公送季材之詩一篇而已、詩云、驛路迢々萬里餘、長安到日定何如、天顏咫尺五雲上、著紫伽梨拜詔書、傾席相賀云、美哉此詩、誠有微意、所謂天顏五雲者、其處諸藩而戀闕之心乎、大節如藤公、於今所罕見也、所謂伽梨詔書者、其領巨刹而承命之讖乎、顯榮如季材、在古所叵遇也、然則爲至寶亦不虛矣、繇是公之詩與公之名盛傳輦轂之下、以聳於鹿苑大僧錄、辱賜其和、以稱揚焉、及一時諸賢各雷例而賡載焉、既復裝潢成軸、而季材持來請予識其所由、予輒展其軸而從頭屈指、則凡和者某々若干人、然季材之和未之有也、蓋藤公之詩所以送於其行也、寧其可無和乎、乃督季材俾之和、而後予題其末云、

〈補菴京華集〉丙申之載、惠日主盟季材老人、自紫陽而入洛、總州源公忠直有餞詩、老人出示求和、就審公之爲人曰、公奉菊池府君、助亘藩政、西人化之、

公務有暇、從方外士、參詩參禪、可謂勤矣、余在數千里聞之、吐氣孰弗歆艷耶、及老人歸、義不可默、謾依嚴韻、以寓遐想云、

海國回頭幾日程、風傳佳句到京城、知君迎奉垂髫佛、玉璽錦袍天下英、

〈村菴稿〉中　次隈部送清源季材詩韻

隈部源忠直、乃肥州刺史菊池公幕下之賢佐也、最以武略稱、兼有文雅、清源師北上時、作詩贐焉、師在京師、索和於諸公、以爲使歸之獻、予雖老、亦竊次其數云、

長安北望幾行程、八說鶯花春滿城、何似君家秋圃菊、黃金鑄就傲霜英、

〈補菴京華集〉惟徵字說

惟徵圓鷹外史、乃清源季材老人之寵弟也、丙申之載、老人適自紫陽而入洛、惟徵從之以東、留滯者數月矣、〇下略

〈禿尾長柄帚〉六十三　復季弘書

〇上略　予不次之迂非予榮、亦非宗門之榮、恐僭越之爲辱、然鈞命不可逭、且聊爾耳、世有以祿位爲輕重者、予豈欲之乎、不知公以爲如何、清源老人所求惠山山門疏、老人寄以見示、開闔數四、翫味累日、筆力老成、如古畾洗、在今罕見者、固可

龍統江湖疏ヲ作ル　季弘山門疏ヲ作ル　江戸城西ニ建ツ　舜德上堂ノ語

尙矣、如予製江湖揔語、實市盈盎也、徒倍愧赧爾、不足汚高覽、絮抄一卷、予謂嘗就足下所借者、既奉還、今又見還、以是知予病且耄矣、和議未成、道路之開、定何時哉、瞻語無期、臨書惘然、歲晏、伏乞爲宗門而自厚、某恐懼頓首、

〈蔗庵遺稿〉季材住東福山門

八勝天、天勝人、知斯言之有驗、鳥擇木、木擇鳥、喜其能之不諼、幸使魯殿猶存、庶覩漢儀爰復、任固當矣、來何暮耶、某嗣咸韶音、發雅騷祕、一代風流人物、暗中亦識曹劉、當時全盛叢林、眼底不著姚魏、探勝地遊脩竹寺、挹清流漱黃華芳、邦君欽風、或效借圓照之故事、佛法何劫、僉曰、得妙喜以中興、入台閣稱上賓、館鴻臚待優詔、宗門出二甘露、兄弟盛化同時、聲價貴百事渠、山林增重此日力、持末運、陰翊丕圖、

太田道灌、武藏江戸ニ靑松寺ヲ建テ、舜德〔雲岡〕ヲ住持ト爲ス、

〈萬年志〉上列祖　靑松第一世雲岡舜德禪師、勢州人、姓源氏、十三入濃州、投補陀月江和尙爲僧童、〇中略文明丙申、江城府主左金吾源持資、大田氏、號道灌、擇城西創梵刹、聘師爲第一代、號曰萬年山靑松寺、上堂、不用思而知、不用慮而解、知解俱泯、合談何事、良久曰、凍鷄未報家林路、隱々行人過雪山、上堂、古人曰、依經解義、

三世佛冤、離經一字、同魔說、依與離既不可得、畢竟如何、良久曰、鶯遷喬木頻頻語、蝶戀芳叢對對飛、道灌請上堂、擧鼓山珪禪師頌、楊岐栗棘蓬曰、楊岐老人鎖口訣、萬里長城一條鐵、斫牌禪客若到來、不動金鎚腦門裂、師曰、檀越嘗築此金城湯池、以備大平治業、敢問諸人、五蘊山中有一條鐵、道得家國安寧、道不得禍出蕭牆、畢竟如何、截斷佛祖、吹毛常磨、住十餘年、延德己酉（元年）、繼天菴席移龍穩、○下

龍穩寺ニ遷ル

鐘銘

〈日本洞上聯燈錄〉八永平下第十一世　龍穩天庵玄彭禪師法嗣

武州萬年山青松寺雲岡舜德禪師、○中略文明丙申、江城府主左金吾源持資、大田氏、號道灌、擇城西創梵刹、聘師爲第一代、號曰萬年山青松寺、受請日、僧問、師唱誰家曲、宗風嗣阿誰、師曰、蝦蟆蚯蚓泥猪疥狗、云、便請洪音和一聲、師曰、徧界沒聾人、云、恁麼則斷絃、續不得歷劫響冷冷、師曰、非公境界、問、如何是不動尊、師曰、急水灘頭石烏龜、○下略、萬年志ニ同ジキヲ以テ略ス、

〈萬年志〉下雜著　萬年山青松禪寺鐘銘

武州豐嶋郡江戶莊貝塚鄉萬年山青松禪寺者、文明八年丙申、當府之城主左衞門大夫大田道灌、布金而請德侍者之地也、灌者文武之良將、而兼有得于禪

者也、德公者洞門鄧匠、世所共知也、自後雖世異人不同、衆常不下千指、四傳而至泰翁（德陽）陽主此山、源朝臣越州太守大田眞清、及大石道俊、造寶鐘一口助禪誦、寬永己巳（六）歲、罹祝融氏之厄、寶鐘亦成烏有、及十世牛道之時、磯崎等再造而尋毀也、至寬永癸未（二十）、木原氏義久爲亡祖母妙薰大姉、捨財而重造、○下略

太田眞清大石道俊ヲ鐘ヲ寄進ス

〈萬年志〉下　萬年山開闢考證

萬年山青松寺者、文明八年丙申、江戶城主太田左右（衍）衞門大夫法名道灌、爲請雲岡和尙、於城西貝塚鄉所創之精藍也、岡祖住此十餘年、延德元年己酉、擧喜州付衣法、補後、席遷龍穩、永正十三丙子示寂、喜州住山後、開鳳生寺爲末山、付寺節菴、復還青松、永正九年壬申、繼雲岡席遷龍穩、命普山嗣青松席、普山住山後、永正十年癸酉、輪番最乘、事畢復還青松、大永元年示化、是年節菴由鳳生移青松、享祿三年庚寅、繼喜州席移龍穩、次創長榮萬年金剛三刹爲開祖、向者住綱所圍城壞、寺亦燼兵燹、泰翁受節菴囑住當山、兵火以後廢趾索然、因傍卓菴日行乞三年、營構終得復舊觀、故推稱中興、大田越前守眞清、由井城主大石道俊、問法歸依、厚施田莊、自是歷代住持相續、山門鼎盛、直至于今如是者、豈有佗

鳳生寺ヲ末寺ト爲ス

兵燹ニ罹ル德陽再興ス　太田眞清大石道俊ヲ地ヲ寄進ス

秀恕舜德ノ開山タルヲ列擧ス

乎、其源起於檀越灌公篤信敦請岡祖創業矣、

或問、青松寺節菴開之、勸請雲岡爲開山、或曰、泰翁開之、今直曰雲岡開山者何耶、寧有明證也、予謂何無證焉、先是檀越道灌築江城成、因就岡祖請示誨、祖示曰、萬里長城一條鐵、截斷佛祖吹毛常磨、此語載在雲岡和尙代語錄、其證一也、岡祖付喜州之法衣作寺鎭、今尙在焉、因足徵當山爲岡祖初開也、其證二也、當山古鐘銘其序曰、武州豐島郡江戶莊貝塚鄉萬年山青松禪寺者、文明八年丙申、城主左衞門大夫大田道灌、布金而請德侍者之地也、四傳而至泰翁陽主此山、越州太守大田眞清、由井城主大石道俊、造寶鐘一口助禪誦、其證三也、喜州繼岡祖席住當山、爲第二世焉、次開鳳生寺爲末山、鳳生至今屬當山、不屬龍穩、則明知當寺開山雲岡、而第二世爲喜州也、其證四也、普山嗣喜州後住當山、翌年永正十年癸酉、輪番最乘寺、入牌于報恩院、今尙在焉、最乘輪住記曰、癸酉五十四世普山彭濡和尙、武州貝塚青松寺、按節菴以大永元年辛巳住當山、相後乎永正癸酉九年也、九年以前既有貝塚青松之名、九年已後住山焉者豈有號稱開山乎哉、況相後乎雲岡和尙文明八年開當山、四十六年也、明知青松開山雲岡、而非節菴、其證五也、泰翁以享祿二年己丑住當山、相後乎雲岡和尙文明

八年開闢時、五十四年也、明知青松開山雲岡、而非泰翁、其證六也、右六件之驗證明白無疑、而世人未察之、譌言紛紛者是無佗、彼未識吾堂奧中之事宜也、不足責焉、當家兒孫、必莫陷誤錯堆中可也、

享保二年五月望日當山二十世嶺南秀恕識、

現位置

舊位置

大永四年火ク

〔萬年志〕下 靈蹟

萬年山、距江城之南數里、屹立海西、其高可一百丈、其延袤不可窮、北則界愛宕山、南則接三緣山、西背於天德、東面於櫻川、實是城南一鎭嶺也、山俗曰含海、臨溟渤故得名、卽主山也、地曰貝塚、昔在城西、今平川天神南有坂、名貝坂、乃其所也、

寺宇

青松禪寺、文明丙申、大田持資爲請雲岡和尙、就城西始建焉、大永四年、城主上杉朝興、爲北條氏綱被圍、城壞、寺亦燼兵燹、當艮筠時、

〔御府內備考〕六 御曲輪內之四 貝坂 麴町四丁目南の方貝塚にある所の坂なり、貝塚はもと芝青松寺の舊地にて、此寺青松甲斐といへる人草創なるへし、此所今玉虫氏屋布にその蹟あり、ゆへにかくいふ、南向茶話、

琉球王尙圓卒ス、

〔島津國志〕十二圓室公　文明八年丙申、是歲、琉球王尙圓卒、據琉球國王世譜、

〔中山世譜〕六　尙圓王　童名思德金、神號金丸、按司添末續之王仁子、明（廢永樂十三年）永樂十三年乙未降誕、王生得德、威儼然、有龍鳳之姿、天日之表、幷足下有痣色如黃金、未卽位時、有泊村人大安里者、一見曰、此人可居億兆之上矣、

事蹟

父尙穆、

母瑞雲、

妃世添大美御前加那志、童名宇喜也、嘉號月光、父名不傳、始稱世添御殿、大按司加那志、正統十年乙丑生、弘治十八年乙丑三月一日薨、壽六十一、葬于王陵、

月光

王有一男一女、世子曰尙眞、後登王位、女子曰聞得大君加那志、童名音智殿茂金、號月清、無後、皆月光所生也、

尙眞

加那志

月清

附紀

尙圓王金丸生而有賢德、輔父爲耕、宣德（永樂六年）九年甲寅、金丸年二十歲、父母俱喪、時弟宣威五歲、金丸憂苦、以農爲業、每遇天旱、民田皆涸、金丸之田獨有水漫漫、人皆疑爲盜水、常與金丸不睦、或將害之、金丸無言可辨、正統（永樂十年）三年戊午、歲二十四、

竟棄田園、自携妻弟、涉海至于國頭、旣居數年亦如此、金丸盡心待之、終不見容、正統六年辛酉、歲二十七、又携妻弟、始至首里、托身於王叔尙泰久、時泰久爲越來王子、尙泰久見其居動大異常人、薦之子王、尙思達王之世、始爲家來赤頭、勤職數年、同僚敬信、景泰（享德三年）三年壬申、尙金福王之世、歲三十八、陞黃冠、後尙泰久卽位、景泰五年甲戌、任內間領主、僅歷一年、百姓大服、名聞于世、天順（長祿三年）三年己卯、歲四十五、陞御物城御鎖側官、敬以事君、信以使人、賞罰當理、言行足法、那覇四邑受其敎化、及海外諸嶋莫不感服、王素信之、凡有政事、必召金丸相議、天順四年庚辰、王薨、世子尙德立、資質敏捷、才力過人、知謀自用、不納賢諫、巧言飾非、擅殺良民、金丸進諫曰、臣聞君王之道、持己以德、養民以仁、務在于爲民父母、今王廢朝綱、壞典法、妄防忠諫、擅殺無辜、恐非爲父母之道、伏願廣納忠諫、痛革前非、舉賢士退不肖、興政施仁、視民如子、則民怨可弭、社稷可安矣、王怒曰、順我者賞、逆我者罰、汝焉敢妄諫我耶、拂袖而起、厥後王幸于久高、遵例致祭還至與那原、時隨駕者皆有饑色、王急捉駕不給酒食、金丸諫曰、先王例幸于久高、深念臣士饑勞、必于此處賜給酒食、然後起駕、著爲典例、乞暫停駕給之、王勃然有怒色、群臣畏懼不言、金丸曳衣哭諫不敢退、而後王從之、嗣是而王暴虐日甚、金丸屢諫不聽、成化（藤仁二年）四年戊子八月初

諸人ノ猜忌ヲ避ケ國頭ニ移ル

首里ニ移ル

尙泰久ニ仕フ

家來赤頭トナル

內間領主

御物城御鎖側官

尙泰久卒ス

尙德立ツ

無道ナリ

尙德ヲ苦諫ス

尙圓致仕ス
尙德祖ス
群臣尙圓ヲ擁立ス
脫衣岩
內間御殿

九日、金丸歲五十四、仰天嘆息、致仕以隱于內間、明年己丑四月王薨、當時法司欲立世子、仍遵典例、集群臣于闕庭、說知此事、群臣皆畏法司權勢、默而不言、忽有一人老臣、鶴髮如雪、挺身出班、高聲言曰、國家乃萬姓之國家、非一人之國家也、吾觀先王尙德之所爲、暴虐無道、不念祖宗之功德、不顧臣民之艱苦、廢朝綱壞典法、妄殺良民、擅誅賢臣、國人胥怨、天變累加、自招滅亡、此天之所救萬民也、幸今御鎖側官金丸、寬仁大度、更兼恩德布於四境、足爲民父母、此亦天之所生我君也、宜乘此時、廢世子立金丸、以順天人之望、何不可之有、言未畢、滿朝臣士齊聲允諾、其響若雷、貴族近臣見其有變、爭先逃走、王妃乳母擁著世子、隱于眞玉城丘、追殺之、旣而群臣捧鳳輦龍衣、前至內間迎接、金丸大驚曰、以臣奪君忠耶、以下叛上義耶、爾等宜歸首里、而擇貴族賢德之人爲君、言畢淚流如雨、固辭不起、又避隱于海岸、群臣追從、極言力請、金丸不得已、仰天大嘆、竟脫野服著龍衣、至首里踐大位、而中山開萬世王統之基、後名其岸曰脫衣岩、（俗呼其岩曰脫御衣瀨、）且附、尙圓王未卽位之前、屢有奇事、王年二十歲、一時失父母、孤窮甚極、是一奇事也、民田旱涸、王田水盈、是一奇事也、島民嫉忌、屢欲殺之、王雖孤窮、終不能

天王寺ヲ建ツ
國王ノ廟ヲ建ツ
崇元寺ヲ建ツ
龍福寺ヲ建ツ

加害、是一奇事也、至國頭亦如此、是一奇事也、受仕于尙德之朝者、多被殺戮、王獨屢諫不見殺、是一奇事也、嗚呼非天命之主、烏能如是也哉、

（文明二年）明成化六年庚寅卽位、

國相不傳、

法司武實、（其餘不傳、）

尙圓王踐大位、（次月有神出見進號曰、金丸、按司添末續王仁子、）除其虐政、改定善法、以寬治民、以仁施政、于是先朝遺隱之士、歡欣願仕、君子進小人退、風俗雍變、百姓樂業、且遵巴志王之制、遣大臣監守山北、以致昇平之盛、（中略、明ト交通ノコトニカヽル、）

附、成化年間、王命輔臣、建寺名天王、而爲家廟之備、（弘治七年、尙眞王建宗廟于圓覺寺、故以天王寺爲王妃廟、卽今尙稷以下諸皆奉于此寺、節節致祭、）著爲典例、王又卜地於泊村東南之間、創建中山國王廟、而廟側建寺、名崇元、（其餘妃神主、下諸祭、）其制與家廟大異、每會冊封之時、則諭祭之禮有行于此廟、實非私廟之所較也、故是廟也、自舜天而下、惟卽位者、必奉安此廟、而春秋二仲、以中華之禮祭之、著爲定規、（略ス、注ス、）又建寺於浦添村、名龍福、而爲曆朝（歷下同ジ）王廟、（先是宋咸淳年間、英祖王始建寺于浦添城西、名極樂、疑是英祖之家廟也歟、曆年既久、至于荒壞、乃移建于浦添城南、又爲火災所滅、由是尙圓王移建浦添村、改名龍福、竝遵舊制、以爲歷朝王廟、）以上三寺皆成化年間、尙圓王所建也、惟年紀不詳、

故合祀焉、

十三年丙申七月二十八日薨、在位七年、壽六十二、葬于見上森陵、此日百官庶人如喪考妣、（文龜元年）弘治十四年辛酉、尚眞王始築王陵、而移葬焉、

尚宣威王　神號西之世主、童名不傳、明宣德（永享元年）五年庚戌降誕、

父尚穆、宣威第二子、係名號妃不傳、

母瑞雲、

附紀

尚宣威五歲失父母、被兄養育、十二歲隨兄至首里、（享德二年）景泰四年癸酉、尚金福世、歲二十四、陞家來赤頭、天順七年癸未、尚德之世、歲三十四、陞黃冠、成化六年庚寅、歲四十一、因尚圓登王位、乃以王弟之貴、領越來間切、而稱越來王子、成化十二年丙申、尚圓王薨、世子尚眞（時稱久米中城王子、）年甚幼冲、群臣奉王弟尚宣威而就大位、

〈球陽〉三　尚圓王（○中略、事蹟ノ中山世譜ニ同ジキモノハ之ヲ略ス、）

附

一往昔之世有諸國船到來本國、又球船到諸國、以便貿易、此時創築御物城、建公倉于其中、以貯貨物、而有御鎖側官掌管其事、屬官有御物城大屋子、（鎖大屋子也、至于近世、無有外國往來、而倉屋已廢、遺址猶存、）

一伊平屋首見邑之北、有一第宅、坐北向午、其地甚狹、縱橫不過二十間、宅內築一坐土壇、（闊五歩、前高一尺七寸、左右一尺、後地漸々而高、）壇中有有（衍カ）黑石三塊、栽植樹木、築石爲環、將金丸王膺奉安于其中、且結構神軒一坐、首比（見脫カ）屋嘗居于此地、其家火神、自古至今公朝並居民有求祈者、必到于此而禱焉、故首見比屋子孫世居于此、看守此宅也、俗說、一日金丸王日暮自田歸時、忽有一位老人、形容怪異、白髮如雪、進至于金丸王前曰、今農民欲謀殺主君者甚多矣、不可久留于此地、須早逃其難、以至國頭、金丸王曰、吾到家宅早備餱糧、以便避去、老人曰、若恨遲時刻、其害不可逃去也、急請金丸到海濱、卽駕小舟、裝載茅包赤飯三旦米數斗、以爲奉送、忽化清風而不見其所之、金丸王大怪、遂至國頭群宜名眞地、結草庵（宅者坐卯辰向酉戌、長十丈五尺、闊六丈、離村半里許、今結庵、長一丈二尺五寸、壞則修葺、而未敢少廢焉、）而栖居焉、金丸王移居于此、亦無事不稱心者也、故居民亦深惜之、欲殺害于他、（ヤ、）此時馬思良、（俗呼泊（樑カ）大比屋、）深知其事、密告金丸王、由是金丸王急往首里、以避其危云爾、

一成化年間、泊村有大安里大親者、原稱大城掟、姓毛、名與文名、乘清信、其爲人也、性質篤厚、才智出衆、一日之晚、自首里歸來、歷過安里橋東、偶遇一老人、婆

尚圓腑塚

尚圓難ヲ國頭ニ避ク

首里ニ去ル

家來赤頭トナル

越來間切ヲ領ス

尚宣威立ツ

御物城

貌軒昂、白髮如雪、安里慌忙、向前施禮、老人乃感其禮讓、延入林中、安里入其內裏、高閣危樓、光輝輪奐、恍似蓬萊、只有二老圍碁、一童烹茶、安里甚奇怪之、拜辭將出、特遺一條馬鞭爲記而退去、明日復往彼處、尋其跡深入林中、山壑寂寥、四顧無人、只見一條馬鞭依舊猶在、安里心愈崇信之、轉步而去、後當風清明月之夜、乘興閒遊、徘徊此地、亦逢老人如前、臨分袂時、老人把黃金一塊、與安里曰、吾與汝夙有奇緣、不期邂逅相會、汝當闢此地爲第宅焉、言畢忽化清風而不見、其所逝之處、安里熟看此地、前帶綠江、後倚青山、眞此鐘靈之處也、遂構草庵于其中、栽竹爲垣、而栖居焉、每逢花晨月夕、必設酒席、以邀知己、獨娛山水、以樂天年矣、此時內閒里主、嘗以御鎖側官、往來那覇、一日安里見內閒公、遇于門外、乃跪于前曰、吾看公相、有天日之表龍鳳之姿、他日必坐億兆之上矣、其後內閒公自那覇歸時、安里設宴請延、乃欲設君位而請坐、禮待優厚、內閒固辭之、安里曰、公非凡人也明矣哉、何敢推辭焉、內閒聞之、愕然驚起、拂袖而去、安里亦不得强留、而拜送于門外、內閒將騎馬、安里見其足下有痣、其色如金、亦跪曰、前日屢言公之貴相、公未信其言也、今見此痣、豈非一徵耶、已歷數十年、內閒果登大位、是爲尙圓王、王踐祚後、乃感于安里之言、遂擢

安里尙圓ヲ相ス

安里ヲ拔擢シテ地頭職トナス

他爲官、幷授地頭職、又以其地靈異、創建宗廟、側構寺院、名之曰崇元、而廟庭左右築石爲圍、以植竹樹、卽安里遺鞭之地也、至于今、世人皆崇信之、以爲神社焉、且復安里大親住居崇元地時、恒出浮繩嶽之傍浮繩水面釣魚爲樂、大親棄世之後、人皆追慕之、築石圍、栽植諸樹、以爲神嶽、名之曰浮繩嶽、至于今一本部間切上間村（今爲具志堅邑、）上間大親（號亨翁宗親、）素葉璧山首見邑之人、尙圓王涉來國頭、大親移居上間村、故稱上間大親、生產三男、長稱孟揚清（大里親方宗森、）二稱孟元勳（中城親雲上宗愛、）三稱上間子、後至眞王、巡狩國頭、行至上間津外、陡遭暴風、畫船甚危、大親令三兒行救御舫、三兒卽坐小舟、不顧身命、凌破風濤、救生上岸、聖顏大悅、令大親父子召入御前、深蒙褒奬、且賜大親今歸仁總地頭職、搬居首里、大親固辭不敢拜授焉、恭蒙勅諭再三强勤（勤力）、大親跪奏、孟揚清、元勳扈從聖駕、移居首里、且大親賜上間地頭職及比與喜屋之地、幸蒙愈允、大親住居上間、後至身体已老、血氣甚衰、將其三男侍坐膝下、以便使令、而終天年焉、至于後年、崇尊其宅以爲拜祈之處、今子孫繁茂、多異凡人、簪纓世繼、聲名大振、

今歸仁總地頭職ヲ亨翁宗親尙眞ヲ救フ

上間地頭職

浮繩嶽

〈琉球國中山世鑑〉四　成化十二年丙申七月二十八日、尙圓公御在位七年、壽六十九ニシテ薨給、世子久米中城王子嗣テ立給ヘカリシニ、群臣僉議有テ、世子久米中城王子ハ今幼少ニ御坐ケル間、成長シ給程ハ、御舍弟越來王子ヲ主君トシ奉ントテ、越來王子ヲソ卽位成奉ル、是爲尙宣威、

越來王子

〈琉球國志略〉二　尙圓宇思德金、伊平人、其先不可知、父尙稷、爲伊平里主、生有異瑞、長爲內間里主、累轉御鎭側、德盛民歸、尙德卒子幼、國人廢而弒之、迎圓爲王、成化十二年薨、在位七年、壽六十二、世子尙眞年十二、王弟尙宣威攝位、有傳、

〈中山世譜〉一大琉球國中山萬世王統之圖

尙圓王
- 尙宣威王
  - 翁主　閨得大君加那後、
  - 志、號月清、無後、
- 尙眞王

墳墓

〈琉球國志略〉八勝蹟　尙圓王祖塋在葉壁山中、有一山、宛轉如游龍、

宗貞國、宗國次ヲ朝鮮ニ遣シ、三浦刷還ノコトヲ掌ラシメ、且綿紬一萬匹ヲ求ム、尋テ、朝鮮モ亦、宣慰使金自貞ヲ對馬ニ送リ、我國情ヲ聽ク、

〈成宗大王實錄〉六十三　丙申（文明八年）七年十一大明成化十二年、正月朔、丙午、（二十一日）丙寅、對馬州大守宗貞國、特遣助國次、來獻土宜、其書契曰、三浦刷還之事、數回已聞尊命、雖然以軍旅

宗國忠朝鮮ニ仕官ス

李妥國次ニ面ス

李妥眞國ニ綿紬千匹綿布三千疋ヲ贈ル

無暇日、因循到今、怠慢之罪不寡、今遣宗兵庫助國次、令案行其事、兩浦代官接事者也、且又被加恩意於其間多幸、又薺浦船軍黃善命之事、因尊書之諭以知之、島中已雖推訪無有、一岐五島邊于海諸島、豈不搜索之乎、獲之者還送者也、上護軍平國忠、以爲貴國之仕官、副以遣之、臣承乏、稱島主者有年、蒙聖恩於朝夕者不可枚舉、慚汗不小、忸怩惟多、今有大故、而數遣使船、以有告訴于洛、雖然無幣帛之以可解嚴毅之顏、俯以綿紬一萬匹賜資助、前已無此求、自今以往亦寧有如此之大故乎、仰望尊恕、不腆土宜、繻子二端、大刀三把、伏冀照領、庚午（二十五日）御宣政殿、引見宗貞國特送助國次等、月山大君婷院相鄭昌孫、韓明澮、尹子雲、尹士昕、兵曹判書李克培、禮曹判書李承召、及承旨等入侍、命承召傳于助國次等曰、路阻爾等艱苦而來、島主向我國素厚、今亦刷還三浦倭深喜、助國次等叩頭謝曰、島主果盡心焉、上（李瑈）曰、國王頃年累使人、予欲報聘、然聞有兵禍、今熄否、對曰、兵時未戢、我島亦未通、今欲遣人方治船、上曰、汝島累使人、予亦欲遣人、對曰、然則島主必喜謝、命上副官進爵賜物有差、甲戌（二十九日）戶曹禮曹同議啓、對馬島主宗貞國、請綿紬綿布一萬匹、今若盡從其請、則非徒後弊難防、亦無前例、只給綿紬二（六）千匹、綿布三千匹、命給綿紬一千匹、綿布三千匹、

金自貞貞國ニ齎ス書翰

對馬ノ民朝鮮邊鄙ヲ抄掠ス

三浦刷還ヲ求ム

貞國三十戶ヲ刷還ス

貞國ヘノ音物

〔成宗大王實錄〕 六十 四

二月朔、乙亥、(十二日)丙戌、安東府使安迢、安陰縣監崔哲山、對馬島宣慰使金自貞辭、上引見、謂自貞曰、日本國兵禍可細問而來、且倭使久留浦所、未便其諭島主、餘事具在事目、金自貞賫去禮曹書契曰、海途迥隔、奉晤無期時、承惠書聊慰勤企之懷、就中歲在甲午、貴島人伺間作耗我邊鄙、邊將追捕七人、以獻有司請置於法、殿下憫其無知、卽付來使、蓋欲足下究問情狀、量加責罰耳、足下聞命、卽令尸諸境上、以警于衆、且貴島之人來居三浦者、其始約留六十戶、積歲旣久、生息漸繁、投寓亦多、地狹人稠、未獲奠居、本曹累奉王旨、致書宣諭、以俟足下依約刷還之日久矣、今遣人閱視三浦、拔其三十餘戶悉還舊土、雖未能盡如前約、想足下亦憐遷徙之勞、不忍一朝盡刷、將欲漸次發還耳、此二事措置得宜、可見足下捐私奉公、除姦靜邊、以藩衞我國之忠也、本曹具由以啓、殿下深用嘉之、玆特遣承文院判校金自貞、賫書幣往布慰悅之意、足下仰體殿下至懷、益恢遠圖、悉遵舊約、禁戢姦細、肅淸海徼、共享昇平之福幸甚、不腆土宜、具在別幅、冀領、留別幅、白細綿紬一十匹、白細綿布一十匹、白細苧布五匹、黑細麻布五匹、豹皮二張、豹皮心獺皮邊鹿皮裏坐子一事、油席二事、彩花席五張、糙米一百碩、黃豆五十碩、燒酒三十瓶、淸酒一百瓶、桂二角、茶食二角、燒餅二角、乾

宗貞秀ヘノ音物

宗盛俊ヘノ音物

自貞ノ貞國ニ示セル事書

貞國ノ刷還ノ功ヲ褒ス

貞國ノ請ヲ許シ物ヲ與フ

貞國ノ朝鮮ニ害ヲナス者ヲ誅スルヲ褒ス

通信使ヲ

大口魚二百尾、海松子五碩、乾柿子五十貼、淸蜜一十斗、又宗貞秀、宗盛俊、宗出羽守貞秀處皆有書契賜物、宗貞秀處、黑細麻布二匹、白細綿紬二匹、桂一角、茶食一角、燒酒一十瓶、海松子一十斗、彩花席三張、糙米一十五碩、宗盛俊處、黑細麻布二匹、白細綿紬二匹、桂一角、茶食一角、燒酒一十瓶、海松子一十斗、彩花席三張、糙米五十碩、黃豆五十碩、宗出羽守貞秀處、黑細麻布二匹、白細綿布二匹、桂一角、茶食一角、燒酒一十瓶、海松子一十斗、寢席三張、金自貞賫去事目、一見島主語之曰、貴島自先世以來、藩衞我國效誠甚至、今足下亦繼先志、凡關我國事、盡心爲之、今者三浦居倭專使刷還、賊倭三甫羅等誅斬不貸、足下效誠益著、我殿下深用嘉賞、遣某勞慰以答誠款、一足下請綿紬綿布一萬匹、且言自祖先以來未有之請、後日亦無如此大故、辭語懇至、若非出於不得已、何至如是、適今朝廷使臣到國、費用不貲、似不得從請、然爲足下至誠效順、特賜若干、一當初把海邊將擒獲賊倭、請置於法、殿下尙慮良民或罹詿誤、拿致京師、命大臣鞫之、具服得實、然猶不卽置法、付之來使、令足下知悉、足下卽令誅諸境上、此雖乖殿下憐恤之意、然足下防微杜漸、藩衞我國之誠、殿下亦甚嘉悅、一日本國王屢遣使通信、故我國亦欲遣使報聘、今

我國ニ送ラントシ兵禍ノ狀ヲ察セシム

對馬ノ民船軍黃善明ヲ捕ヘ去ル

三浦刷還ニツトメシム

便船定約ニ超エザラシム

足下諭以兵亂不可使人之意、然則兵亂何時而止、因此細聞本國兵亂根因、及如今事勢勝敗曲直、一前者薺浦來居貴島人吾羅而羅等五名、率船軍黃善明、稱釣魚受萬戶文引、前往海洋迄今不還、令邊將廣行尋訪、未知去向、今足下編(通)行搜訪、書示禮曹、殿下已知足下誠意、宜加尋訪期於必得、彼此逃民不宜容許、一當初貴島人因商販來寓三浦、我先王與先島主約留六十戶、其後日益繁滋、潛投者亦多、今則薺浦三百八戶、釜山浦六十七戶、鹽浦三十六戶、地窄人衆、非但生計甚艱、一或失火、連燒殆盡、且逋逃姦細之徒、間或來居、時時行詐、他日必生邊釁、不可不預爲之防、今足下專使刷還、深足嘉賞、但留存之數遠過初約、是必不忍一時遽還耳、足下宜思彼此利害、須漸次刷還、期於如約、一諸酋每歲使船各有定約、而違約疊送者有之、貴島年例使船、亦或有額外出來者、此皆例應不待以有足下文引、故特許接待、若常如此、則每年疊送、其計甚巧、非以信相與之意也、是必姦人冒受書契、而足下亦未及察耳、若不防禁、則漸益縱肆、弊將難遏、去甲午年(文明六年)、宗茂勝之還、禮曹奉旨移書使加痛禁、其後亦有宗貞秀使送多難洒毛、宗馬多而羅、沙豆汝文、宗盛俊使送都小只、秦盛幸使送時難洒毛、歹之使送難延都老、源實次使送都汝文、藤熙久使送老仇難洒毛家次使送信汝文、爲

使船ハ其大小ニ依リテ食料ヲ給ス

使船ノ淹留ヲ制セシム

使人ノ留浦定約ヲ超エザラシム

菊池爲邦ノ使

幸使送陳小只、忠吉使送信汝文、源吉使送皮古汝文等、甲午年(文明六年)疊來、源實次使送多而沙而文、持平使送三甫羅汝毛、藤熙久使送可文老愁戒、宗盛俊使送竹本邊沙也文、宗茂世使送沙同古羅等、乙未年(文明七年)疊來、弊復無窮、若不接待則來者失望、有乖聖上撫綏之義、足下嚴加究治、以杜姦僞、一使船之來不點人數、只量船之大中小、大船四十人、中船三十人、小船二十人、給料以革、前日請人代點受料分用之、弊近者又生姦計、使船小則潛請恒居人、大船代量受料而分之、又於量船之時、群至抗拒、不受平量、如此奸詐漸不可長、去甲午年、宗茂勝之還、禮曹奉旨移書、足下既已知悉、宜加禁治、一島主若言使船到浦、邊將卽給馬文督令上送、有違舊例、答曰、慶尙一道四方相距遼遠、監司巡至遠郡、若必待報、監司給馬文則客至淹留動經旬月、館待之事或致踈虞、故更爲措置、使守令僉節制、使給馬文、俾免各處、使船久留艱辛之弊耳、非有他計、今反以爲嫌、是不識國家厚待之意、須將此意、遍諭諸酋幸甚、一使人留浦日限皆有定約、然亦不畏禁制、故爲稽留者頗多有之、此皆姦人與其所主相爲表裏、欲遂私計耳、若不嚴加防制、則後必有騁詐生釁者矣、去甲午年、宗茂勝之還禮曹移書通諭、自今如有無故稽留者、並其主人科罪、以杜姦計、一肥筑二州太守菊池

菊池重朝爲邦ノ使ト詐稱スルモノアリト報ズ

我民全羅諸島ヲ劫掠ス

慶尙道ヲ掠ス

爲邦、曾於庚寅（文明二年）歲、遣使致書曰、戊子（應仁二年）所賜圖書、還使過海、値風墮失、仍請改給、迺改作菊池爲邦四子圖書付回、自後遣使不絕、去甲午年復遣要古也萬老及愁芮老吾難酒毛等、方來館待、又有菊池重朝者、同年八月、遣主師來、其書曰、父爲邦去丁亥年遣使請圖書、使者未還、而戊子二月二十八日父病死、未幾所請圖書乃到、于時適有國王命、赴王城被留、今年四月、始還本土、聞有人稱父爲邦使者、飾詐更乞圖書、每歲遣使往來、此是姦徒僞造之事、仍將戊子圖書送還、諦驗之則果前日所賜圖書也、且爲邦重朝父子兩使人竝時到館、問之則俱曰、彼之所言詐也、遠人之來未易究辨、只據足下文引、皆依例館待、然彼眞則此詐、固無兩是之理、必有奸人欺罔彼此、以窺一時之利者、而足下竝給文引何哉、恐奸人竝足下文引而僞作也、其時禮曹備悉始末通諭足下、欲辨眞僞、卽今已應辨別、仍詳問是非、一甲午年十一月、島船十五艘懸兩航、經慶尙之境、西指全羅諸島、乙未正月、我國咸安鎭人尹子平等八人、入海捕魚、夜遇島船、爲其所劫、殺死者五人、逃生者三人耳、船中衣糧器具被掠無餘、逃生者明暗之中、審其言語服色船體、實爲倭人、又有島船八艘、乃於是年四月、到慶尙道南海縣錦山等處、出沒島澨間、是船等若受足下文引、何難照經知世浦哉、是必潛來境上、伺便窺利也、

明ヘノ執進ヲ辭ス

使人ノ是非ヲ辨ジ文引ヲ出サシム

鮮返書

若此不已、終必構釁、將大懲而後已也、一星燎原、涓滴滔天、古人所戒、年前禮曹移書諭足下、使之禁戢、足下宜更申舊約、禁戢島人、使不得爲非、以永舊好、一島主若言中朝進貢不許奏請事、答曰、前者國王使人至中朝、失禮得罪、其後不得通貢者有年、盧圓之至、我先王具由轉達皇帝、降勅允許、自是日本復得貢、蒙賜符驗、今若更爲煩奏、則於事體不便、玆以未敢耳、一島主若問前來正球還時、付（符力）驗造送事、答曰、前來國王書契云、年前細川伊勢兩氏使者、發書請救、然敝邑實不知之、是奸人所爲、且來使云、其稱諸大臣所遣而來者、亦多類此、若造符驗送于國王處、則必無此弊云云、故我國亦欲防奸僞、作符送之、以爲他日之驗、我兩國隔海相望、世世以信相接、若少有詐僞、實非永好之道、足下居要津、辨別是非、故我國皆從足下文引接對、足下宜加省察、以答朝廷倚委之隆、戊子（十四日）、宗貞國特送宗兵庫助國次等九人辭、上御宣政殿、置酒引見、賜物有差、（上官人助國次、米豆並三十碩、虎皮）豹皮各一張、油席二張、副官人平國忠、米豆幷十碩、虎皮一張、油席二張、餘人賜黑麻布亦有差、禮曹答書曰、書至知清適遙慰、所獻禮物謹啓收了、將土宜正布一十五匹、綿布八匹、又去乙未（文明七年）年、例賜糙米一百碩、黃豆一百碩付還使、惟領留就中足下自繼世以來、益輸忠款、今又奉承先旨、刷還三浦居人、凡所以藩輔我國者、靡不盡心、其於所求何敢靳惜、適因中朝

使臣到國、破費不貲、有司啓以今難從請、我殿下深嘉足下效順之誠、特命量賜、茲以綿紬一千匹、綿布三千匹、聊塞來命、雖未能盡副所望、實是殿下之特恩、足下亦宜體悉、益圖報效幸甚、

〔成宗大王實錄〕六十九

七月朔、壬寅、(二十六日)丁卯、對馬島宣慰使金自貞馳啓聞見事件、五月初二日平明、臣與倭中樞平茂續僉知皮古汝文、護軍源茂崎、特送助國次、發知世浦、酉時到對馬州西沙愁(下島)那浦、居倭乘船出迎、浦有人居三四餘戶、皆茅屋無墻壁、初三日佐須那代官宗石見守國吉司直皮古破知、持酒來慰、又各贈環刀一柄、辭不受、宗越中守盛弘遣人來問、安雙古郡守宗國次持酒來慰、又贈環刀不受、初四日發船到也音非道浦、自沙愁那浦至此二十里、初五日宗盛俊送下程、初六日發船到完(緩浦)于羅浦、自也音非道浦至此七里、人居十餘戶、產業蕭條、有石田、只種麻麥、亦不豐茂、初七日發船、有倭船四艘來迎、左右牽引、過都(豐)伊沙(崎)只、至尼神都麻里(泊)浦、人居五十餘戶、乃源茂崎之居里也、茂崎賞酒肴來慰之、都伊沙只兩峽隘狹、船路回互、波流激盪、最險絕處也、自完于羅浦至此三十里、初八日助國次謂臣曰、代官宗貞秀遣人語予曰、島主女方患瘡疹、勢難迎、命請緩數日、臣答曰、奉命來此、不幸阻風已經六日、不可輕留、助國次曰、若違此言、

自貞ノ報告
知世浦ヲ發ス
西佐須奈浦ニ著ス
宗國吉ヲ贈ル
宗國次ヲ贈ル
鰐浦ニ到ル
豐崎ヲ過ギ西泊ニ著ス
貞國ノ女瘡疹ヲ患フ

島主將置我於死矣、臣答曰、王事有期、不可淹留、助國次曰、若然則乞姑留一日、我當先遣副官人皮古汝文、報告島主矣、臣不得已從之、有婦女老少、以斑衣蒙頭掩面、乘小艇相繼而至、周覽旣畢曰、願聞大國樂聲、令工人作樂、嘆賞良久乃散、初十日發船、皮古汝文還自島主處率軍十五人來迎、島主遣宗上野守伴接而來、代官宗貞秀及宗盛俊、宗職家各遣船來迎于愁(住)未要時(吉)浦、其浦阻狹、廣僅三十餘尺、水淺多嶼、倭船牽引、衛護而行、至訓羅浦、人居百餘戶、沿岸而居、不事耕農、專以興販爲生、自尼神都麻里浦至此九十里、代官宗貞秀宗盛弘宗職家、宗中務少輔職續送下程、十一日、早田彥八來言、吾世受貴國之恩、凡遇貴國使臣、必邀至吾家奉待、今亦欲設朝餐、願暫臨弊廬、臣往見之、酒數行而罷、又設飯無匙、只有木筯一用、卽野俗(野)皆類此、十二日、島主遣河可伊勢守持酒來慰、仍令護衛而來、皮古汝文謂臣曰、島皆石山無寸田、發耕若有朝鮮一邑之田、何患貧窮、島主於肥筑二州皆有田土、思欲移居第、以朝鮮殿下恩德至隆、無以報効、只欲永作藩籬、未敢遠去耳、昔者此島人潛往中國作賊以自給、今不爾、故貧者頗多、至中國如不得利、則往往犯朝鮮之境、故島主嚴加禁制、使不得竊發也、日本國頃因兵戰、徵島主使赴難、島主托故不往矣、臣答曰、違命不往、其無後患乎、皮

國次貞國迎接ノ猶豫ヲ請フ
婦女ノ風俗
住吉浦ニ到ル
對馬ノ地勢
朝鮮ト貞國

朝鮮人ノ築ケル山城

古汝文曰、國王雖怒、終不得加兵、違命何妨、若得罪朝鮮、則無所歸處、甚可畏也、島有山城、相傳朝鮮人所築、未知信否、臣答曰、我國人恐逐海寇來、居此島事在文籍、實非虛語也、十三日發船、宗上野守、河伊勢守、（野脫力）特送助國次、各乘船左右翼衛而行、代官宗貞秀送衛護船數十隻出迎、引至島主家前五里許久田浦、自訓羅浦至此三十里、八居六十餘戶、以造船煮鹽爲生業、島主遣中原三河守問安、引至所館、宗中務少輔職續及代官宗貞秀、遣人送下程、謂臣曰、非不欲奉謁島主、未會勢難私見耳、十四日、島主使人言曰、當擇吉（日脫方下向ヵ）受賜、姑留待之、國分寺住持崇睦、使弟子崇堪、送胡椒二斤、茶葉三斤、崇睦卽島主同母弟也、仇難都老來見曰、我兄立石右京亮國長欲謁見、然有職任不果來、遣我問安、兄自丁亥（應仁元年）年、統察三浦倭人、然常侍島主不離側、故令我往三浦推刷耳、今聞、貴國賜物於我、喜歡罔極、島主以平茂續、皮古汝文與臣有素、令不離左右省視館待諸事、茂續等謂臣言、島主出令曰、我未受書、雖朝鮮受職人、毋得私相往來漏洩言語、但使人問安可也、十五日、臣使平茂續告島主曰、奉命而來、不宜留滯、何日受賜物乎、島主遣人來言曰、交際禮重、況受慶賜、安可不擇吉接待乎、以我占法推筭、近無吉日、未卽奉受、恐以我爲怠慢、然非有他意、所以敬重朝命也、勿以爲訝、十八日當受

國分寺住持崇睦

久田浦ニ至ル

立石國長

自貞會見ヲ促ス

貞國接待ノ日ヲ定ム

貞秀咽喉ヲ疾ム

貞國自貞ヲ迎接ス

之、古河家次送下程、十八日、島主使河野伊勢守來遣酒肴曰、今日雨且子貞秀昨夜始患咽喉、未受賜物、若雨晴疾愈、父子當同受賜物、十九日、島主使皮古汝文來言曰、我年已老、子貞秀將繼我業永作籬臣、今大國委遣使宣慰、慶莫大焉、不勝感恩之至、切欲同受、不幸貞秀咽喉之疾復痛、使醫鍼灸、經夜不寢、更待平愈、同受賜物、乞勿以爲緩、二十一日、使皮古汝文問貞秀病、仍問受賜日期、島主使國長來言曰、貞秀疾未愈、乃何父子同居異日受賜、竊意不便、欲更待一兩日、見病證受之、殿下特遣官來慰、天威甚邇、敢有他心、辭甚切至、國長謂臣曰、我本總治三浦居倭禮當候謁、以島主未會、不敢私見、今則島主有命、故來耳、二十四日、島主使人問安曰、陰霖不止、旅館湫隘、何以經過、慚惧交至、貞秀疾平復無期、若明日雨晴、則我當並受書契賜物、二十七日、臣令押物賚領禮物、先置於島主家廳事、臣奉書契而往、島主下庭、鞠躬祗迎、臣由中門陞廳事、近東西向立、島主陞簷下行四拜、就廳事北向跪、臣就書契授島主、島主受之、授執事人、俛伏興還、就拜位行四拜訖、島主入廳事、近西東向立、相對再拜、島主子貞秀病不出、其書契禮物島主幷受之、島主引臣入廳事西偏房、客東主西、相對而坐、代官宗貞秀亦近南東向座、行茶禮、島主問殿下安否、答曰、康寧、島主又言、宣慰使奉命而至、

貞國刀段子ヲ贈ル

貞國居所ノ概況

適因貞秀患病、未卽奉接良用、愧恨乞寬恕、臣令通事徐有山語島主曰、貴島自先世以來、籬衛我國、効誠甚至、今足下亦繼先志、凡我國事盡心爲之、今者刷還三浦居倭、誅斬賊倭三甫羅等、足下忠款益著、我殿下深用嘉賞、遣我勞慰、以答誠款、島主答曰、今次鴻恩實出望外、感激無已、年前遣仇難都老推刷三浦居倭、能體我意、盡心搜索、吾亦喜甚、臣及語之曰、足下請綿紬綿布、辭語懇至、適朝廷使臣到、本國費用不貲、似不得從請、然足下至誠効順、故特賜若干匹、答曰、中國使臣適來俯從所請特賜貨布、尤增感荷、臣又語之曰、當初邊將擒賊倭三甫羅等、請置於法、殿下尙慮良民詿誤、至此拿致京師、命大臣更鞫、具服得實、然猶不卽置法、付之來使、足下卽令誅諸境上、雖非殿下憐恤之意、然足下防微杜漸、藩衛我國之誠、殿下甚嘉悅、答曰、作賊情狀明白、若不治罪、慮有後日、效尤者卽令誅之、今者特加慰奬、感戴實深、仍進酒欲贈臣環刀藍段子、臣辭之、島主曰、此我島舊風、薄物不足辭、是以我爲鄙夷也、臣不得已受之、島主請曰、殿下旣賜宣醞、願聽樂聲、令工人奏樂、島主曰、大國管弦(絃)清雅、傳聞久矣、今日試聽、實爲可樂、稱歎不已、酒七行而罷、島主脫履送至庭下、島主家前後有廳事、又有馬廐廚舍、蓋以茅周以垣墻、墻外環以壕塹、引海水注之、深廣各丈餘、堂無堦陞、月臺、以板爲

貞秀盛俊ニ物ヲ贈ル

四壁、不施丹雘、東西北壁畫山水、島主自居後廳、至於前廳、則應對賓客、酬答事務而已、常列置皮甲五十、兜鍪五十、木弓七十、長劍二十、長箭四十部以自衛、島內凡八郡、率其屬分五番、每番八九十人、自備糧餉五日、相遞(遞)入直、以備使令、島主之居有人家、可二百五十餘戶、二十八日、島主使國長問安、雙古郡守宗國次、司直皮古皮知、各持環刀一柄、宗石見守國古持長劍一柄、同來贈臣、强之乃受、代官宗貞秀弟宗茂勝、持酒肴來饋、又贈臣茶葉一封、胡椒一斤、扇子一柄、贈通事軍官伴倘椄子各一封、扇子各一柄、仍言、去甲午年、以特送親朝大國、特蒙殿下恩德、至今感激、何日忘之、今聞殿下安寧、不勝慶抃之至、茲將薄物聊表區區之誠、(二十八日、衍)遣通事許得江于代官宗貞秀家、李永孫于宗盛俊家、給書契禮物、貞秀及盛俊依島主受書契儀受之曰、獲霑非分、感愧交幷、饋通事酒饌、又贈人情、又遣徐有山于仇難都老家、仇難都老兄國長拜受、謝曰、三浦之事、吾總治之、吾弟意經還、故殿下特賜物耳、仇難都老家、給書契物件語之曰、前年至三浦、謂必朝京、不代往耳、今受賜物、殿下恩德何可勝言、仍饋酒饌、贈人情、二十九日、國長仇難都老賫酒肴人情來遣臣、極陳受賜感悅之意、令通事徐有山言、三浦居倭不如舊約、宜漸刷還、使無生釁、永遠交好可也、國長曰、島主後若遣我、則當盡心刷還、六

貞秀自貞ヲ慰ム

貞國自貞ヲ招請ス

貞秀面謁ス

文明八年是歲

月初一日、代官宗貞秀賫酒肴來慰、從兵百餘皆佩弓劒、贈臣環刀一柄曰、殿下恩德感謝無已、仍敍遲緩之由、臣語之曰、足下左右島主、凡我國事靡不盡心、我殿下嘉悅幷賜禮物、答曰、本島與貴國交好已久、殿下恩數之隆、又逾前昔、一島之人莫不感激、今又特加奬勸、深增感悚、臣欲三浦居倭漸至滋蔓、宜令如約刷還、以爲永久之好、答曰、敢不盡心、臣又言、使船到浦借恒居倭大船、代黙之奸、答曰、如此奸濫事、我與島主不曾知之、當告島主糾治、初二日、代官宗貞秀使皮古汝文來言曰、點船之事我欲告島主、更思之、島主若聞之、必拿致往來人、推覈科罪、若然則非徒宣慰使久留、島主子貞秀新受寵命、喜慶之初、被刑者多、則實爲不祥、是以不告、凡島中庶務、島主委我參決、宣慰使回還後、我當徐告島主痛禁、勿與島主言之、初四日、島主使人邀臣至其第、島主與子□（貞カ）秀庭下迎、引入廳事西偏房、客東主西、相向對揖、貞秀就前揖、臣答揖、各就坐行茶禮、受（貞）秀敍前日未親得受書契之由、仍贈環刀一柄、鵜青段子一匹、島主言、貞秀禮當拜、疾未痊、不能屈伸、但行揖禮勿訝、力疾而出、勢難久坐、今欲還入、恐以爲無禮、裏頷下有鍼灸處、神色不寧、卽令還入、設酒饌以饗、下至僕從贈人情有差、臣謂島主曰、初貴島人因商販來寓三浦、我先王與先島主約留六十戶、其後日益繁資、潛投者亦

三浦ノ戶數

貞國海賊ノ橫行ヲ說ク

使船定約ヲ超ユ

多、今薺浦三百八戶、釜山浦六十七戶、鹽浦三十六戶、地窄人衆、非徒生計甚難、一或失火、連燒殆盡、且逋逃奸細之徒、間或來居、時時行詐、他日必生邊釁、不可不預爲之防、今足下專使刷還、誠可喜賞、留存之數、遠過初約、是必不忍一時遽還耳、足下宜思彼此利害、須漸刷還、期於如約、答曰、敢不從命、臣又言、甲午（文明六年）冬、島船十五艘略慶尙之境、西指全羅諸道、乙未（文明七年）春、我國咸安鎭人尹自平導八人、入海捕魚、夜遇島倭、被害者五人、逃而生者三人、船中衣糧器具被掠無餘、又有島船八艘、乃於是年四月、到慶尙道南海縣錦山等處、出沒島嶼間、若受足下文引、何難照經知世浦哉、是必潛往境上、伺便窺利也、若此不已、終必構釁、前日禮曹移書諭足下、使之禁戢、足下宜更伸舊約、禁戢島人、以永舊好、答曰、吾非不禁制、但海途遼隔、聞見未及耳、然未必皆我島人所爲也、今京都兵亂、散爲海賊、側聞此輩潛犯大國、當盡心捕獲痛治、臣又言、諸酋使船各有定約、而違約加送者有之、貴島年例使船、亦或有額外出來者、以有足下文引、故特許引接、若常如此、則容有詐僞、非以信相與之義也、是必奸人冒受書契、而足下亦未及察耳、去甲午年、茂勝回還時、禮曹奉旨移書使加痛禁、其後亦有宗貞秀使送多難酒毛、宗馬多而難沙豆汝文、宗盛俊使送都小只、秦盛幸使送時難酒毛、敎之使送難延都

老源實次使送都汝文、藤熙久使送老仇酒毛、家次使送信汝文、源吉使送皮古汝文、爲幸使送陳等只、忠吉使送信汝文、甲午年疊來源實次使送多羅沙而文、持平使送三甫羅汝毛、藤熙久使送可文老愁戒、忠吉使送舍文老愁戒、宗盛俊使送竹本邊沙也文、宗茂世使送沙同古羅、乙未年疊來、弊復無窮、我國不得已、拒不接待、則來者失望、有乖聖上撫綏之意、足下嚴加究治、以杜奸僞、答曰、常加檢覈、不意差誤至此、當更考書示、臣又言、日本國王屢使通信、故我國亦欲遣使報聘、今足下諭以兵亂不可通信之意、然則兵亂何時而止、又問兵亂勝敗之狀、答曰、兵亂不知何日平定、其初構釁之由、及今相戰形勢、當以書示之、島主語臣曰、遐裔窮僻之地、無以爲娛、請觀射的、即於庭中設小的、使管下人射之、雙古郡守宗國次能中之、島主請軍官射之、見內禁衞金四知射曰、此人射法絕異、他日必受大任、親執盞饋之、贈環刀扇子箭鏃、初七日、臣糧食乏絕、將以綿布換米於商船、島主聞之、使國長送米六十碩、臣令徐有山將米價綿布六十匹、送于島主家、島主曰、兩國交好、今使臣辱臨、我縱不能朝夕供設、敢使賣布而用乎、是將欲不恤我島百姓也、大國之恩重如丘山、本島雖貧、今此薄小之米、安敢受直、怒形於色、拒之甚確、不得已還持來、初十日、一岐州護軍三甫郎大郎持酒肴來慰、臣

我ガ戰亂ノ形勢ヲ問フ

射的ヲ觀シム

問、日本國兵亂何如、答曰、兩國深樹溝柵、至今相持、勝負未決、又問、我國使船可以得達國王處乎、答曰、南路兵亂散無統紀、必爲海賊所掠、若自一岐州由北海而行、則風便八日、可到若狹州、自若狹州陸行三息、至伊(今)麻豆(津)站乘船、由水路行三息、至沙(汲)可毛(本)道站陸行一息、至國王處、博多一岐商賈人皆由此路往來、大國若遣通信使、我當指路矣、宗職家領兵百餘、賚酒饌來慰、贈人情、職家乃島主子貞秀妻兄也、十一日、博多居僧少由因商賈來寓隣舍、見通事徐有山言曰、豐前州有八郡、少二殿與大內殿分半、各統四郡、自少二殿失土後、大內殿兼取之、今少二殿欲復舊疆、使宗職盛宗國久等領兵四千、前到豐前州、入據古城、大內殿代官愁延都老聞之、亦率兵三千相對置陣、又築新城以拒之、去五月交兵、大內兵死者六十人、少二兵死者六人、勝負未決、至今相持、終必大戰、以決雌雄、然後乃已、平茂續亦潛語之曰、少二殿從少二殿、往居博多、今又發兵而往、則本島空虛故祕之、不使他國知也、十五日、島主與其兄宗盛俊代官宗貞秀、率弓劍軍士四百餘人來見、設宴張樂饋之、二十一日、島主使人請觀獵、島主著我國所賜笠子、幷帶我國弓箭、前後導從百餘人、皆持槍劍先行引路、至打圍處、軍士四百餘人驅山而下、竟無一獸、島主使代

壹岐ヨリ若狹ヲ經テ京都ニ赴ク路程

博多壹岐等ノ商人此路ニ據ル

大內氏豐前ヲ領ス

少貳氏舊領ヲ復セントシ兵ヲ豐前ニ出ス

陶氏之ヲ防グ

貞國自貞ト共ニ猶ス

貞國ノ書狀其一應仁ノ亂

山名持豐細川勝元幷ニ死ス　山名政豐一色義直東軍ニ下ル　大内政弘畠山義就義視ヲ奉ズ

官宗貞秀來言、觸熱動勞不獲一禽深愧之欲獻一杯、以無兼味未果耳、二十三日、島主遣國長來遣書錄二道、其一曰、日本國應仁丁亥（元年）正月、畠山右衞門督義就尾張守政張（長）自相爭、而一日之內戰死者數萬人、洛下從此人心洶洶（物物）不敢寧處、於是五月、細川右京大夫勝元、山名左衞門督入道敎豐（持下同ジ）不眞起兵相鬪而無止、因是日本國稱大名者、或右袒、或左袒、父子兄弟雲雨翻覆、不言而可知焉、吾殿下以寬宥之意、命以和親之事、細川輒雖應公命、山名拒以不相應、雖然殿下猶憫其愚戇、急不加兵、漸欲令服之、文明癸巳（五年）三月、山名入道病死、同五月、細川右京大夫（勝元）亦病死矣、甲午（六年）八月、山名入道嫡孫彈正少弼延一色左京大夫、內袒以乞降、殿下憫以許之、大內新介政弘、畠山右衞門督義就、刼今出川殿以爲兒首、餘孽相聚成亂、蠅營狗苟驅去又來、殿下猶同仁一視、不忍血刃、謀而奪掠其國郡邑、欲令彼衰耗而自然歸服、以是因循至今、夫關東若奧陸（陸奧）津輕合浦外濱諸公者不遑枚舉、凡貴國所聞知、終始忠心無二者、細川一黨、赤松一黨、左武衞義敏、畠山尾張守、畠山義勝、佐佐木大膳大夫、內道（大厩力）頓敎（幸）之也、九州之諸豪各班次、以遣卒伍於洛、自守其封疆、專外國之扞禦者也、于前畠山大內遣使船於貴國、雖有難于舉書、吾每歲遣貢船於洛、風順則發此、而直到若狹州、若非意有逆

其二　松浦氏等使船ノ數

釣魚船ノ文引ヲ給スルヲ取締ラシム

風、則不能避、彼敵國且又請通信於貴國、以私讎不可廢公義於貴國、雖云已後不可默止、莫怪焉、其二曰、夫若五島、一岐、松浦之諸子、每歲使船之員數、成化六年九月二十八日、賜書特有定額、邇（爾）來守以無相違、揣其去歲遣例船、或爲風濤被阻隔、而若臘月、若翌年正二月到貴國、而今年又遣今年之例船、貴國以去年例船不幸而今年到、用之於今年之例船、而多被減今年之例船、以是有差謬者歟、不如以年月考也、又五島宇久守、疇昔每歲遣三船、成化六年、減一船以兩船爲定額、前歲遣漂流之僧侶、其回來書又加賜一書云、同嗚（烏力）島主亦每歲所許遣一船云、何所有疑哉、又三浦之居人猶以多、所諭夫居人雖多、其地猶有界畔、至暴惡顯著者、豈又不罰折乎、伏聞命耳、又釣魚船之往于貴國者、各出文引以緊密、其事者于前已警畢、今又聞足下屢陳、重以命執事者也、又自今以後、菊地（池）每歲遣兩船者、重朝也、吾固雖守執事之命、猶恐有違失、時之被敎誘者多幸、又國長以島主之言語臣曰、博多居宗金之孫三未三甫羅善盡者也、去甲午年、以畠山殿押物、前往大國、回還時因船毀、未還本土、我愛其才留在本島、後日欲於五十船內出送、乞啓殿下護濟、宗貞秀使船每年依約出送、今云甲午年加送三船、詳考之、只戊子（文明二年）年、金好仁回還時、以一船數外護送耳、想必中間奸詐者所爲也、

盛俊使船ヲ增スヲ望ム

且乙未年、所遣三船拒而不納、其故何也、請令該司細考、甲午、乙未年、所遣人名以示之、吾兄宗盛俊蒙大國厚恩、然使船不過於三、今欲更請加船、乞善爲陳啓、宗盛家使船本七艘、今其子職家繼業而減三船、乞啓殿下、許依舊額、臣答曰、宗盛家本四船、以一時微勞、權加三船、今盛家身死、故還依舊約耳、二十五日、島主使人請臣、至其家迎入廳事西偏房、島主曰、國分寺賴殿下助緣、受圖書歲遣船、今始營建、乞啓殿下、更加船數使得畢、構以爲諸僧祈禱之所、又言、代官貞秀歲遣一船、甲午年加四船、殿下之恩至矣、此人吾所信任者、乞啓殿下、更加憐愍、臣語之曰、使船留浦日限、皆有定約、然與主人倭相爲表裏、故爲稽留者頗多、若不嚴禁、恐多行詐謀、從此構釁矣、自今如有無故稽留者、幷主人科罪、以杜奸計、答曰、如此事吾不得聞、當問於三浦頭倭、推覈嚴治、島主贈環刀、臣辭不得受之、島主子貞秀以病不出、使人贈人情以謝之、島主臨別再言、深感殿下之恩、島主遣蓍野將堅（監下同ジ）子貞秀遣八郎佐衞（左）門來謝恩、令與臣偕行、二十六日、島主使宗大膳送修答書契二道、進上草綠子一匹、鴉青段子一匹、環刀二柄、箭鏃一百根、子貞秀修答書契一道、進上鴉青段子一匹、環刀二柄、箭鏃一百根、是日臣發船、代官宗貞秀、國長宗職續宗茂勝、伊勢守乘船、左右俠（狹）衞至訓羅浦、貞秀設酒樂、極盡

對馬國分寺助緣ノ船

三浦頭倭

自貞對馬ヲ發ス

歸國復命ス

貞國ノ人物

慇懃之意、下至通事軍官皆有所贈、謂臣曰、殿下既慰我島主、以及微賤、不勝感激、遠來送于此耳、我本歲遣一船、去甲午年又加四船、殿下之恩至重、我之祖父爲代官時、歲賜米豆衣服、吾年前據此轉達未蒙准、是我之薄福也、何敢再言、本國聞島主厚蒙大國之恩、嘆羨無已、本島執事者惟我一人耳、伏望啓殿下、定歲加船、則更竭忠誠、終始不渝、又以島主之語謂臣曰、國長糾察三浦久矣、但貴國未之知耳、三浦居人行詐冒濫之事、互相隱蔽、故無由得知、必令國長來往推覈、然後乃可痛治、然則此人未必無補、豈不愈深遠處不急之人乎、乞將此意啓殿下、給圖書定歲船幸甚、初五日辰時、臣與島主特送蓍野將堅等發沙然那浦申時到釜山浦、庚午（二十九日）、對馬島宣慰使金貞（自號）來復命、上引見謂曰、喜卿好還、島主待卿何如、自貞對曰、島主爲本國誠意懇至、待臣亦厚、上曰、島人畏島主乎、自貞曰、島主爲人風彩凝峻、言動不輕、人皆畏服、上曰、其觀獵處何如、自貞曰、在二十里許、洞壑俠（狹）窄、石路險阻、軍皆步行、騎從者只親戚耳、島人曰、此山多毒蛇、愼勿放行、終日不獲一禽而還、上曰、島主觀我國軍官射御乎、自貞曰、島人皆不善射、然能中小的、臣軍官金四知最善射、人皆握手嗟賞、多以刀劒贈之、上謂承旨曰、自貞加資授堂上官、軍官善射以示外人、宜加褒賞、又問待倭使之禮、自貞曰、島人言、

與島主和好則深處、倭寇不能動矣、今來平茂續感國恩、凡事曲盡指揮、亦宜厚待、上曰、令禮曹特加恩數以奬之、　對馬州太守宗貞國特送蓆野將堅來獻土宜、其書曰、恭惟台倭動止萬福、忝遣皇華船命大人金自貞、令持若干之方物、被加慰撫之意、猶如列國聘禮之好、吾何堪當之哉、愧惧交駢、因及皇華之歸、而相副乎使船、以奉致禮謝者也、吾命立石右京助國長、令鎭撫三浦之民、臣去歲爲刷還、遣宗兵庫助右京、卽相副弟藏人、令按行其事、今恩賜特及于藏人、藏人之所賜者、特右京之所賜也、是故遣使臣以來致其謝云、俯見加節遇者、特抽丹忠也、去歲以有大故、致不貲之重望、特賜綿紬一千匹、綿布三千匹、因以聖恩殊絕之意見諭、實榮寵之尤甚無加之、又所賜之土宜、正布一十五匹、綿布八匹、及去乙未年、例賜（給カ）造米一百碩黃豆一百碩重領、恩意不任誠惶誠惧之至、進上繻子一匹、段子一匹、大刀二把、箭鏃百根、照領多幸、

立石國長三浦ノ民ヲ鎭撫ス　金自貞航路指路ノ人ヲ賞ス　貞國ノ使蓆野將監　三島貞成

〔成宗大王實錄〕七十　八月朔、辛未、(十八日)禮曹啓曰、宣慰使金自貞之行、薺浦居倭時羅汝文富山浦居倭信而羅、指路有功、令所在僉節制使親饋之、各賜米豆幷五碩何如、從之、

〔成宗大王實錄〕七十　九月朔、辛丑、(二十二日)壬戌、日本國長門州三島尉貞成對馬州

出羽守宗貞秀、國分寺住持僧崇睦、遣人來獻土宜、對馬州太守宗貞國特遣盛種來獻土宜、

宗貞秀國分寺崇睦貞國盛種ヲ遣ス

〔成宗大王實錄〕七十　十月朔、辛未、(十一日)辛巳、御宣政殿、引見對馬島特送盛種等、領議政鄭昌孫、上黨府院君韓明澮、右議政尹子雲、上洛府院君金礩、兵曹判書李克培、禮曹判書李承召入侍、酒一行、上敎盛種曰、島主誠心效順、宣慰官金自貞之往、禮待甚厚、予甚嘉之、爾歸語島主、敎中樞平茂續僉知國忠曰、宣慰官往還、汝等盡心護行、嘉汝誠款、命盛種進爵、賜物有差、盛種等出、乙酉、(十五日)禮曹啓、前此對馬島特送人無題給米豆之例、但去甲午年出來茂勝、今丙申年出來助國次等、推刷三浦倭人委來事、重給上官人米豆幷三十碩、副官人米豆幷十碩、今特送盛種旣爲謝恩、又護送宣慰使而來、且宣慰使在島時、島主亦飽米四十餘碩、請依助國次例、給上官人盛種米豆幷三十碩、副官人國正米豆幷十碩、從之、丙(十六日)戌、禮曹啓、對馬州特送盛種諸通事云、我國使者往還不得留連、勤苦太甚、兩國恐難交通、且前此島主請賜綿布一萬匹、而大國只賜綿布三千匹、綿紬一千匹、然續遣官宣慰、島主以爲喜、今我入境供億寢薄、以此觀之、不過三四年、兩國交惡必矣、傳曰、其言倨傲、以恐赫我、然豈以此而輕變舊例、丁亥、(十七日)御經筵講訖、上問

國次ノ例ニ依リテ米豆ヲ給ス　盛種朝鮮ノ待遇薄キヲ責ム

李妥盛種ノ接待ヲ諸臣ニ咨フ

盛種等歸ルノ禮曹貞國ニ復書ス

禮曹判書李承召曰、對馬州特送盛種等云、我國接待寢不如初然乎、承召對曰、盛種云、祖宗朝待我厚、今則賜與甚少、供億亦薄、所經州縣待之不禮、仍說三浦倭人、不出數年、悉歸本土、如此則必有釁端、且副船之來、島主專爲護送宣慰官、而不許接待、有乖島主之意、前日求請綿布一萬匹、國家知其意乎、島主知國家待之薄、故試以此請耳、上問韓明澮曰、何以處之、明澮對曰、國家邊境無虞、倭人若一構釁、禍且不測、今宜待之加厚、所求與之、擇朝臣護送、州縣官吏待之薄者加罪幸甚、世祖朝琉球國請綿布一萬匹、世祖許之矣、承召又曰、平國忠古名皮古汝文也、爲人奸惡無比、意者國忠以我國薄待之意播告三浦也、上曰、其厚待之、且從其請、禮曹啓、宗貞國特送盛種、以副船接待事再三請之、以無舊例不從、餞宴時亦請曰、副船不是私來、島主以宣慰使所騎之船體重、若遇風波難以轉避、專委護送、若以無例而終不接待、則非徒有乖島主本意、慚赧無已、臣等謂副船既曰特送、則非常倭之例、又稱護送宣慰使而來、則不可不從請、姑令所在浦僉節制使詳悉尺量、大船則中船、中船則小船、差減接待、給料何如、命勿論大小從請待之、（二十一日）辛卯、宗貞國特送盛種等六人、倭中樞平茂續等三人辭、命承旨任士洪饋送、禮曹答書曰、專使書問得諳氣味、清勝開慰、所獻禮物謹啓收訖、將土宜

正布二十七匹、綿（布カ）西一十三匹、及今丙申年例賜糙米黃豆各一百碩、就付回使、惟照納、

少貳政尙、島津國久、澁川敎直等、各使ヲ朝鮮ニ遣ス、

少貳政尙ノ島津持久同國久

澁川敎直宗貞國牧山正宇久勝宗貞秀

神田德

〔成宗大王實錄〕六十六丙申（文明八年）七年大明成化十二年、四月朔甲戌、己丑（十六日）、日本國關西路筑豐肥三州總太守太宰府都督司馬少卿藤原政尙、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕六十七一九月朔、辛丑、癸丑（十三日）、日本國關西道薩摩州島津持久、對馬州出羽守宗貞秀、薩摩州市來太守國久、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕六十三丙申（文明八年）七年大明成化十二年、正月朔、丙午、戊午（十三日）、日本國關西路九州都元帥源敎直、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、丙寅（二十一日）、日本國一岐州代官牧山十郎源正、肥前州下松浦五島宇久守源勝、對馬州出羽守宗貞秀、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕六十四二月朔、乙亥、日食、日本國對馬州出羽守宗貞秀、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕六十六四月朔、甲戌、戊寅（五日）、日本國海西路上松浦一岐州居住藤也三甫羅母理祐、肥前州上松浦神田能登守源德、遣人來獻土宜、甲申（十一日）、日本

鴨打永　宗茂世　古河家次　菊池重朝　平方忠吉　宗盛俊　宗盛弘　宗職盛　三島貞成　宗貞吉　志佐義　田平弘　立石國長　源繁

國肥前州上松浦鴨打源永、關西路九州侍所宗彥八郎茂世、對馬州古河山城守家次、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕六十七　五月朔、癸卯、日本國關西路肥筑通守重朝、攝津州兵庫津平方式部衞忠吉、對馬州太守宗貞國、出羽守宗貞秀、守護代官宗助六盛俊遣人來獻土宜、倭護軍又四郎盛數等二人來朝、

〔成宗大王實錄〕七十　八月朔、辛未、乙酉、(十五日)日本國對馬州出羽守宗貞秀、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕七十一　九月朔、辛丑、庚戌、(十日)日本國對馬州太守刑部少輔宗貞國、越中守宗盛弘、四郎宗職盛、出羽守貞秀、守護代官宗助六盛俊等、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕七十二　十月朔、辛未、癸酉、(二日)日本國西海路筑前州冷泉津尉藤原貞成、對馬州太守宗貞國、佐須奈浦代官石見守宗貞吉、遣人來獻土宜、倭僉知平國忠等六人來朝、癸未、(十三日)日本國肥前州下松浦志佐源義、田平寓鎭彈正少弼弘、對馬州出羽守宗貞秀、橘氏立石右京亮國長、遣人來獻土宜、倭護軍皮古仇羅等十人來獻土宜、丙戌、(十六日)日本國五島鳴(島カ)主源繁、對馬州太守宗貞國、出羽守

宗職家　源茂崎　松浦賴永　源武　千葉元胤　志佐源次郎　宗茂世　大內教之　宗像氏鄉　觀音寺宗殊　鹽津留經　波多島納　宇久勝　大友親繁　伊集院熙久

宗貞秀、仁位郡四郎宗職家、越中守宗盛弘、遣人來獻土宜、倭護軍源茂崎等二人來朝、辛卯、(二十一日)日本國上松浦能登大守賴永、一岐州守護代官兵部少輔源武、肥前州山城千葉介元胤、關西路肥筑通守重朝、對馬州太守宗貞國、出羽守宗貞秀、越中守宗盛弘、遣人來獻土宜、倭護軍道安子四郎來朝、乙未、(二十五日)日本國肥前州上松浦志佐源次郎、關西路九州侍所宗茂世、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、丁酉、(二十七日)日本國肥前州下松浦志佐源義、周防州大內進(亮)敎之、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕七十三　十一月朔、辛丑、日本國筑前州宗像郡知守氏鄉、上松浦鹽津留觀音寺看主宗殊、一岐州上松浦鹽津留助次貳源經、肥前州上松浦波多島源納、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、乙巳、(五日)日本國肥前州下松浦志佐源義、一岐州守護代官兵部少輔源武、五島宇久守源勝、對馬州太守宗貞國、豐唐二郡太守宗盛俊、遣人來獻土宜、甲寅、(十四日)日本國薩摩州日向太守盛久、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、丁巳、(十七日)日本國關西路九州都元帥源敎直、豐州守出(大)友親繁、薩摩州日向大守盛久、對馬州出友(羽)守宗貞秀、遣人來獻土宜、庚申、(二十日)日本國五島宇久守源勝、薩州伊集院寓鎭隅州太守藤熙久、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、己巳、(二十九日)日本國肥前州上松浦鴨打源永、長門州赤間關太守忠重、

松浦盛
島津立久
宗家茂

關西路九州侍所宗彥八郎茂世、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕四　七十　十二月朔、庚午、(三日)日本國肥前州山城太守源吉、田平寓鎭彈正少弼弘、肥後州守爲幸、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、(十三日)壬午、日本國一岐州代官牧山十郎源武、對馬州太守宗貞國、出羽守宗貞秀、仁位郡四郎宗職家、遣人來獻土宜、(二十七日)丙申、日本國松浦丹後太守源盛、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、(二十九日)戊戌、日本國關西路九州都元帥源敎直、日向大隅薩摩三州太守立久、對馬州太守宗貞國、遣人來獻土宜、

〔成宗大王實錄〕四　六十　二月朔、乙亥、(文明八年)壬辰、倭護軍宗家茂來朝、

〔成宗大王實錄〕六　六十　五月朔、癸卯、(十一日)癸丑、倭護軍六郎酒文等三人來朝、(二十五日)丁卯、倭護軍時難酒毛等四人來朝、

〔成宗大王實錄〕二　七十　十月朔、辛未、(五日)乙亥、倭中樞平茂績等五人來朝、

〔成宗大王實錄〕二　七十　十月朔、辛未、(四日)甲戌、雷雨雹傳曰、倭人賫來黃金、許私貿、

年末雜載

變異、

〔實隆公記〕三　正月四日、己酉、瑞雪寸分盈地、豐年佳景、幸甚々々、子刻許西陣有火事、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　五月三日、乙巳、天晴、今夜室町在家欲炎上、但則打□(消カ)云々、

〔親長卿記〕七　四月十七日、小地震、

〔歷代皇紀〕五　後土御門天皇　六月十六日、晴、戌刻地震、鳴動三ケ度、

〔親長卿記〕七　五月十八日、雨下、近日炎旱之處降雨、神妙歟、

〔新選和漢合圖〕下　文明八年丙申、自五月至九月大雨、飢、

〔大乘院日記目錄〕三　正月十一日、東大寺八幡宮鳴動、

〔親長卿記〕七　正月廿六日、晴、今日聞春日社有怪異云々、御供所井死人飛入云々、東大寺八幡社頭上瓦三食合落、懸橘木打折枝云々、又有蛙合戰、在所忘却、條々希代事歟、藤源之輩不思儀可出來前表歟、

二月一日、晴、今日或人相語曰、春日怪異事、先若宮八幡鳴動、其後瓦食合落、春

西陣火ク
地震
旱魃
東大寺八幡宮鳴動
春日社御供所井ニ死人飛入
東大寺八幡社殿ノ瓦食合落ツ
蛙合戰
八幡社鳴動

日山同鳴動云々、

〈歷代皇紀〉五 後土御門天皇　正月、春日山鳴動、東大寺八幡上瓦三食合落、社前橘枝打折云々、此間神殿鳴動有蛙合戰云々、

〈大乘院日記目錄〉三　三月十三日、申刻、若宮蜜鏡落御、觀應元、康正元、今度三ヶ度云々、

〈東院年中行事記〉七　三月十三日、丁巳、晴、今日申刻若宮殿蜜鏡懸緒、自解落御云々、則卜占之處、四月、六月、七月之間、火事兵亂云々、

〈親長卿記〉七　二月廿五日、今曉雷鳴甚、雨下如夕立、後聞、雷落平野社云々

〈妙法寺記〉（文明）八、丙申、門松ヲ二度立ル也、犬ニハカニ石木、又ハ人ニ嚙付、自滅スルヿ不知數ヲ、

神社、

〈親長卿記〉七　七月五日、賀茂光久社官事奏聞、勅許、

十六日、雨下、諸平、諸久社官事奏聞、勅許、諸久爵同安堵事、同勅許也、

〈賀茂社家總系圖〉平之一流　繼平（神主從三位）　文明八年十二、廿四補權禰宜、

若宮蜜鏡落ツ

火事兵亂ノ兆

雷平野社ニ落ツ

賀茂光久同諸平同諸久叙爵

賀茂權禰宜

神主從三位諸平　文明八年十二、廿四補片岡祝、干時從五位下、

〈賀茂社家總系圖〉久之一流　棟久（神主從三位）　文明八年十二、二十四片岡禰宜、

〈親長卿記〉七　六月廿六日、晴、鴨社禰宜祐崎申（元宮一又宗一）安堵事、何樣可奏聞之由返答、

廿七日、晴、鴨社禰宜祐崎申、可被與奪養子祐名云々、奏聞勅許、

〈實隆公記〉三　正月廿五日、庚午、陰、入夜雨降、今日自禁裏雖有召、依雜熱所勞不參、從五位下源雅秀（姉小路神明神主也）云々、康顯申之、

之處、則勅許、

廿六日、辛未、晴、雪時々散、自廣橋亞相許召雜掌間、遣元盛男之處、昨日雅秀民部少輔所望之事、勅許之儀不可然、其故彼雅秀者、奉取立南朝族也、別而可被處罪科者也、何如任官可有勅許哉、已令宣下者、忩可召返宣旨之由勅定也云々、如此之儀一向不覺悟、其上未宣下之由返答了、尤驚入者也、

二月朔日、乙亥、晴、抑雅秀事、高橋神明神主也、如此神官之輩、任八省輔事如何之由、於局中相談之處、橘豐文（姉小路神明神主也）、補大藏大輔、乞是准據、又雅秀父任民部少輔事勿論也云々、如此師富朝臣相語之處、予聞違之、卒爾姉小路神明神

源雅秀ヲ民部少輔ニ任ゼントス

雅秀南朝ノ族ヲ取立ツトノ說

片岡祝

片岡禰宜

鴨祐崎

主之由披露言語道斷也、此趣委令言上了、

〈紀伊續風土記附錄〉三古文書部三 名草郡 神宮上郷日前宮藏

紀伊日前國懸神社大工職

被仰下大工職之事

右大工職者、任先例神前中務丞仁被宛下之處也、但向公方樣而無不忠之儀者、迄于子々孫々不可有相違之者也、仍御書下之狀如件、

御奉行 俊總 判

文明八年丙申四月七日

〈大乘院寺社雜事記〉六十三 卯月晦日、大雨下、

興福寺天滿宮神樂

一自明日天滿御神樂代五百文、神主方下行、小五月無之時、每度此分下行者也、五月錢之內也、

五月二日、

一自龍花院方申小五月錢事、二千疋天滿ニ可有御寄進之由申給之、

五日、

一天滿神輿入御如例也、成就院ハ針ヌキノ內マテ入御、門內ニ不入神輿、

〈守矢氏舊記〉坤○信濃 文明八年丙申明年花會御頭足

小五月錢

一宮頭 片切民部大輔光爲、御符禮一貫八百、使孫十郎、頭役二拾貫、

信濃諏訪社花會頭足

片切光爲

一御堂 敷味山市川越中守朝保、御符禮二貫、白布、十二ヒロ、使彌八、頭役二拾貫、

御敎書同前、

一磯並 內山須江入道沙彌善孝、依田美濃守光俊、御符禮二貫三百、使三郎、

頭役十貫、

一前宮 河田御符禮三貫三百三十三文、保科長光、保科長經、使孫六、

文明八年丙申明年五月會御頭足

一左頭 深志坂西兵部少輔光雄(マヽ)御符禮二貫三百、使彌三郎、頭役拾五貫、

一右頭 禰津田中代官浦野駿河守神直貞、御符禮二貫三百、使三郎、又小田中殿より三百出候、副狀付候頭役二拾貫、

一流鏑馬 殿島神林河內守改(政)兼、御符禮一貫八百、使彌五郎、御符禮於已後一貫八百可被出候と判形出し候、頭役拾貫、

一加頭 小鹿野村原入道沙彌善胡、御符禮五貫六百六十六文、使孫六、御符

五月會左頭ニハ古井村ト書、上書ニモ、副狀ニハ吉田村書名字、守岐村御宿所書相原村、

一加頭 小諸紀伊守御符禮二貫三百、穗坂豐後守景盛、使三郎、頭役二拾貫、

五月會右頭

文明八年雜載

市川朝保

須江善孝
依田光俊

保科長光
同長經

五月會頭足

坂西光雄

浦野直貞

神林政兼

原善胡

穗坂景盛

阿江木光康
御射山頭足
畑物貞奉
高梨政盛
川村秀高
島津信忠
鷹野朝光
飯島爲頼
小嶋高盛
飯澤家信
東寺八幡宮新放生會延引

一加頭　長倉御符禮三貫三百、阿江木新左衞門尉光康、使三郎、頭役二拾貫、
　文明八年丙申明年御射山御頭足
一上增、伴野鷹野鄉畑物藏人頭貞奉、御符禮三貫三百、使孫十郎、頭役二拾貫、
一左頭高梨本鄉高梨源政盛代被渡始而被勤仕、御符禮五貫六百六十三文(六)、
代官川村秀高、使曾次二郎、御敎書禮同、神鷹神馬代三貫、御敎書禮五貫六
百六十六文、使曾次二郎、孫六、頭役五拾七貫三百、
一右頭長治嶋津兵庫助信忠、御符禮五貫六百六十六文、使孫六、御敎書禮同、
神鷹神馬五貫六百六十六文、代官鷹野孫衞門朝光、使孫六、可(衍カ)有此年嶋津
孫六殿御射山へ御社參有、太刀二進し候し、其內國吉助家まて候し、頭役
七拾貫、
一下增、飯嶋伊與守爲頼、御符禮二貫百彌(使脫カ)五郎、
一加頭、須毛小島高盛、代官飯澤家信、御符禮五貫六百六十六文、使金五郎、御
敎書禮同五貫五百、代官飯澤左衞門尉家信、頭役二拾貫、

〔東寺執行日記〕十三　八月十五日、新放生會、久世庄無名無實之間、先延引
之、本放生會同延引之、此事八月九日以折紙別紙方へ詫事ハ、依亂世借用等
不事行候、彼所務已後可致沙汰申之處ニ、同十五日鎭守論儀(義)候座敷ヨリ、廿
日以前可備之由、自供僧中別當方へ被申送候、仍別當此分催促之間、重而供
僧方へ致詫事、十六日有評定、延引者雖不可然候、堅承間、來夜叉神方收納已
後、可有沙汰之由、別當方へ被申送之、仍延引也、
十一月十九日、文明元、放生會行之、
三斗三升十三合依爲古三升、新米ハ三斗五升也、
此三斗三升之內、兩年一獻ニ八升八合引之、
代六十二文、去年分、取七十一文、當年分、合二百卅六文、御供方升ニ百文
ニ三升七合、坊用ニ一斗三升六合定、
殘米二斗四升二合御供ニ成之、

花定番　修理大工作之、
中綱十人、定全、定忍、淨琳、定仙、敬觀、敬俊、定觀、乘俊、童二人、飯取之、乙夜叉、愛夜叉、曲事
也、
職掌三人與左右次郎、孫太郎、右衞門次郎、
鐘突二人、福善得万、地下職事、右衞門次郎、　依之延引之、

同十三日行之、シタヽメ事淨琳ニ雇之事行也、每年半濟之時分也、去年之預云、先此間ノふ□（マヽ）御沙汰ヽヽ、衆儀被申候間（諸下同ジ）、無力先行之、色々年內ニ故障申候時ノ返答ノ衆儀也、

導師壇長院宰相律師、三獻有リ、清酒出之例也、

カンナシ、モミ大根菓子五色、フチタカ、二人定、

兩座定仝ハ去十二月卅日夜死去、定忍、定觀、忌タルアイ（タルナリ、夕不參也、）タ無出仕也、淨琳參之、小入ハ童

職掌、右衛門次郎、（初テ出仕）左衛門太郎、（初テ出仕）水代夜叉、（千カ）得万、（初テ出仕）一法師、

三獻、カンナシ、モミ大根菓子三、ウスキヲ燒餅一枚出之、半濟分也、

〔上諏訪神社文書〕一〇（信濃）

當大明神御渡之事、十二月十二日夜令凝結湖水、同十四日辰剋當社濱自大溝渡下御天、下宮濱小井弖渡江上御候、佐久新海明神、自濱澤渡下御天、御參會湖中候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文明八年十二月十四日　　大祝

進上　御奉行所

當大明神重御渡之事、同十六日巳剋自當社濱古河渡下御天、下宮濱大井弖渡江上御候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文明八年十二月十六日　　大祝

進上　御奉行所

〔續常陸遺文〕八　木原村楯縫神社棟札

文明八丙七月廿八日

土岐原修理亮　　加藤式部丞藤原仲季判

源氏景成　　執行支　　一宮明神之神主社人禰宜

〔太宰管內志〕上筑前之十八　筑手郡

神輿銘文に、敬白奉新造劍權現寶輿之事、筑前國鞍手郡植木庄新延鄉鎭主御寶殿、右志趣者、奉爲天長地久御願圓滿、天下安穩、國土豐饒、玉體安全、諸人快樂、當所安穩、諸人繁昌、殊者信心大願主息災安穩、家門太平、子孫繁昌、皆令滿足、祈願成就、吉祥之所也、文明八年九月十八日、大願主藤原朝臣貞時、源朝臣寶信、大工藤原忠家、○下略

文明八年雜載

駿河伽藍大明神社鐘銘

〔駿河記〕十六志太郡二、相賀御伽藍明神社鐘銘

奉寄進御伽藍大明神寶前法鐘、大日本國駿河州志駄郡相賀村居住三寶弟子等、於是聊冶而新之、其功不朽、先願天長地久、御願圓滿、天下太平、万民快樂、伏乞施旦輩、現當願望、一切圓成、子孫繁茂、至祝々々故文云、聞鐘色煩惱輕、智惠長菩提生、離地獄出火坑、願成佛度衆生、聲來耳邊耳往聲處、眞理深重也、豈可思量乎、銘曰、形器成立、外圓而正、中虛而靈、神物憑之、有扣卽應神乎、何霄神而明之、與聖爲度、至禱、

本願 則時

命二

助緣

藤原直吉

藤原定吉 欽白

若干

大工藤原守吉

畧文明八年丙申四月吉日誌之、

古市胤榮春日社參籠

〔大乘院寺社雜事記〕六十三 卯月朔日、

一古市播磨(胤榮)公社頭參籠云々、

十四日、

香取神宮田所祿司代注進

一六方返事今日遣沙汰衆方、社頭參籠云々、

一社頭安居師參籠、

〔香取文書〕舊祿司代家所藏乙

注進、文明八年丙申卯月吉日

合在

一坪、吉千與私五反內用センヤシキ、田所、二坪、吉安私二反田所、

三ミ、司行事禰宜私二反小內小大應寺二反□□、四ミ、吉私二反、

五ミ、司大、サン分田所內大應寺、六ミ、判□御名一反內六郎二郎內、

七ミ、申丸御名四反同人、三郎兵衛內、八ミ、申丸御名一反同人、

九ミ、申丸二反內一反小別當大目代、十ミ、行事禰宜私一反、一反永ささやう小、

十一ミ、行事禰宜私一反小、彌藤次郎アト、十二ミ、吉安私三反家內田所、

十三ミ、司、ソタカ神家內大祝、十四ミ、司大內行事禰宜、

十五ミ、吉安私二反一反三郎ひやう反左衛門二郎へ、十六ミ、吉安私三反家內田所、

十七ミ、犬丸大、御手サキヤ田所內、當永ささやう十八ミ、一反小神五□作內門アト、

十九ミ、司三反、內神二反御手、廿ミ、司三反、內神二反御手、

淡路八幡宮領鹿子山田關田數

廿一ヶ、司三反坪神中八郎内、
廿三ヶ、司三反目代、
　案主　田所(花押)

〈護國寺文書〉(坤 ○淡路)

八幡宮御領
　鹿子山田關田數之妻
　　合文明八年丙申九月六日
谷ノ
自與□段□(返カ)祐□□□　一段勘解油殿(出下向ヲ)同斗
二段勘解油殿此内六十歩□　代、
一段三百歩小太郎殿、　一段三百歩道祐
小右近　小道祐　一段勘解油殿
一段同作　一段幸木谷右近
小又五郎殿(幸木谷、)　八十歩右近
六十歩、小大郎殿□　一段勘解油殿
　已上田數壹町參段廿歩
□(神 主カ)□田貳勘解油左衞門庶子

廿二ヶ、目代私五反(右衞門二郎、當ヤシキ三反、)
廿四ヶ、貳三反、彌友次郎アト、
　六司代(花押)

前法師申付　政幸(花押)

〈阿波國社寺文書〉(乾 那賀郡和食村蛭子社藏)

(花押)

仁宇郷御公事錢之事

　合

眞延　光清
吉繩　敎勸
光念　吉宗
貞家九百五十文　委志參百五十文
包延四貫五百五十文　安光九百五十文
光久八百文　西納參百五十文
一名分錢貳貫參百文　但定役
　中分
逆委五百文　松本百文
柏峯四百文　那伊瀨參百文

文明八年雜載

ひま七百文
枇杷屋敷六百文
臼元谷參百文
櫻谷五百文

ゆつりえ五百文
高野四百五十文
岸峯參百文
さう谷九百文
横谷六百文
さんた百文
舞子參百文
山ませ百文
たう畠貳百文
但廿ヶ年以來作名歟

そいきう六百文
平名九百文
小濱壹貫文 參七十
おん谷壹貫百六十三文
奥分

さう山四百文
寺内四百五十文
小泉參百文
但廿ヶ年程以來作名歟
北浦參百文
たゐ九百文
ふしの木六百文
名子五百文
せり百五十文
河成五百文
奥名分

太畠四百文
北浦百文
毎年定□料八百文五十在之、
于時文明八年丙申六月十五日　　俊光(花押)寫之

〔東寺百合文書〕 ゐ十四 ○山城

〔端裏書〕「寺家分下久世庄公事錢算用狀方　文明八年丙申分」

注進東寺八幡宮御領下久世庄御公事錢散用狀

合拾伍貫肆百五十文内

捌拾參文　壹反當荒分除之、
殘錢拾伍貫參百六十四文之内、
半分漆貫六百八十貳文之内、
正月十四日ヨリ十一月晦日マテ、已上十二度ニ貳百卅文宛、
已上貳貫漆百六十九文　目錢加テ、

御節供四度分　壹貫貳文二百五十文宛、
御放生會　壹貫五百文

あすのへ五百文

十二月辨　　貳貫四百十文

總已上辨七貫六百八十一文

不足壹文

右散用狀如件、

文明八年十二月晦日　　□(花押)

河内天野社領三寶院公事錢無沙汰

〔和田文書〕

當國近木庄天野、依爲社領、三寶院代々捧請文契狀預所ニ候之處、自往古之背契狀、近年寺社之年貢公事錢令無沙汰間、地下催促之、代官令改易、神前次郎左衞門方ニ申付候處、三寶院背寺命及違亂之條、神敵佛敵不可過之候、雖然預所分事者、先堪忍候、代官之事者、神前方ニ申付候、萬一如何樣之儀ニ成立候共、國々御儀可預御心得之由衆議候、恐々謹言、

年預澄遍(花押)

文明八年

八月廿八日

國々面々御中

佛寺、

補任權律師

〔大乘院日記目錄〕　三　十二月六日、權律師增專參賀、

十二日、權律師增專參賀、

法印權少僧都

〔實隆公記〕　三　二月十九日癸巳、晴、○中略梶井宮僧官之事被申之、權大僧都證潤申法印、權律師實順申權少僧都、則奏聞勅許之間、口宣案二通書進了、

廿九日、癸卯、雨降、終日無事、入江殿御寮來臨、僧官事岩崎申之、則宣下了、大法師定宣下了、

權律師

悟任權律師、

五月七日、己酉、晴、入夜見參眞乘寺宮、今日僧官二通被仰之、大法師慶□(秀カ)珍、權□(律カ)師、則

六月六日、戊寅、晴、晝間自毗沙門堂前座主有使者、僧官宣下事被申之、

十一月二日、壬寅、晴、寒威折綿、僧官事、貳人所望權少僧都日源、同日廷申權大僧都、權律師春祐、同弘尊申權少僧都之間、今日令宣下了、

〔東寺百合文書〕　ち廿一口方評定引付　文明八年丙申　五月十二日、

○山城

一觀智院宗杲法印極官口宣案披露之、文明六年八月七日々付也、數輩超越之條、依有其憚、于今雖致斟酌、近日病氣以外之上、自今日田舍邊下向之間申入之由、被申之通披露也、惣寺心得申由可有返事云々、

〔三島神社文書〕 坤

（花押）

可被敍法印之由御所望、不可在子細候、口宣事、早々可有申御沙汰之旨候、先以御免狀披露不可有相違候、次證號事、可爲正覺院之由、積善院僧正御房所被仰出候也、仍執達如件、

文明八年十一月十五日　　法橋重快（花押）

三島正覺院

〔親長卿記〕 七　二月廿九日、陰、威德寺僧正弟子直敍法眼事、先日以元長奏聞、同勅許、

〔實隆公記〕 三　三月六日、庚戌、晴、抑大法師實瑜申法眼、季春卿息左大將ヲ爲猶子、住心院公意僧正付弟也、直敍法眼、一則勅許、口宣案書遣之、依忩劇未加次第之下知者也、段之規模歟、珍重々々、

〔紀伊續風土記〕 高野山部三十一　第百六十八世法印大和尚眞敞性印房、山主撿挍次第二　山主撿挍

勢州山田の人、文明五年十月日撿挍職を辭す、治山三箇年、同八年十一月日撿挍職に補す、禪忍卒去替、執行代宥盛禪忍房、第百六十九世法印大和尚長任、智興房、無量壽院、　文明八年十二月六日撿挍職に

稱號

法眼

四辻季春ノ子實瑜ヲ法眼トナス

高野山撿挍

竹内之北坊　供目代

別會五師　一切經納所　一切經衆

春日社唯一切經

補す、眞敞退替、執行代勝璟長養智院、

〔大乘院寺社雜事記〕 六十三　一賢秀可號竹内之北坊之由仰了、

〔大乘院日記目錄〕 三　四月三日、供目代英照補之、

〔東院年中行事記〕 七　卯月三日、丙子、英照實淨房、任供目代云々、卽被來了、

〔大乘院日記目錄〕 三　八月十九日、供目代乘英補之、

十一月十六日、供目代專秀參賀、六十四歲、

十九日、英經爲供目代、則專秀之弟子也、

〔大乘院日記目錄〕 三　二月十六日、新別會五師與弘拜賀、

十二月廿日、一切經納所補與弘五師、去十八日、宣尊僧都入滅闕分、

廿九日、一切經衆補之、各拜申文、與胤、眞乘、各本衆、懷藝、輪轉、

〔大乘院寺社雜事記〕 六十三　五月五日、

一水坊唯一切經事、堯弘眞觀房之闕分、被恩補憲秀大夫公之由、被仰出候、恐

春日社唯一切經事、堯弘眞觀房之闕分、被恩補憲秀大夫公之由被仰出候、恐

々謹言、

文明八年雜載

五月五日

惣藏司御房

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月十八日、小雨下、

一一切經衣服一昨日引之、自大僧正上首分且引之云々、隨分納所也、

〔大乘院日記目錄〕三　十二月廿日、勅願納所補訓英訖、興弘辭退所也、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月廿七日、

一勅願納所〻書狀遣之、奉行分事也、繼舜法橋申子細在之、

晦日、大雨下、

一勅願納所申、去年到來分供料八十貫文、此內二十貫ハ上卿分、二十貫納所德分、相殘四十貫文在之、御講可有始行歟、近日可成集會云々、

〔大乘院日記目錄〕三　五月日、春日安居師專覺得業、恩房也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月晦日、大雨下、

一當年春日安居師專覺得業也、則複請之、（後下同ジ）

六月十六日、大雨風雷、

○略上　春日安居師專覺得業則複請之、

二三六

春日安居師

一切經衣服

勅願納所

鶴岡八幡宮寺殿司職

那智山判所職

東寺供僧職

文明八年雜載

〔鶴岡八幡宮寺社務次第〕坤　一御殿司職一方

香象院公信　申納言律師、イ本無ニ之ヲ、

文明八年丙申十一ー九ー、於御影堂闕被補之、

〔潮崎稜威主文書〕二

所被補任那智山判所職、道興、後也、任先例可被存知之由、撿按前大僧正御房令旨所候也、仍執達如件、

文明八年十二月五日　法印奧雅

三位僧都御房

〔東寺百合文書〕イ四十六之六十九　○山城

東寺供僧職事、宗杲僧正所讓與宗演阿闍梨也、任例爲申入仁和寺宮、連署之狀如件、

文明八年十二月八日

阿闍梨眞照　阿闍梨祐源　阿闍梨賴俊

阿闍梨宗承　阿闍梨重禪　權律師嚴信

權律師公遍　權少僧都俊忠　權少僧都融壽

東寺觀智院供僧

權少僧都覺永　權少僧都敎濟　權少僧都原永
權大僧都宏清　權大僧都　法印權大僧都堯杲
法印權大僧都宗壽　法印權大僧都杲覺　法印權大僧都仁然
法印權大僧都融覺

〔東寺百合文書〕（ち廿一口方評定引付 文明八年丙申 十一月十六日、○山城）

一觀智院現供僧事、中納言阿宗演依違例、自美濃无上洛之由書狀、披露了、

十二月八日、

一當寺供僧職之事、宗杲僧正跡、令讓與宗演阿闍梨之狀、令披露畢、

一同供僧職、宗演阿闍梨令讓與慶清律師之狀披露畢、兩方共調連署、可遣補任狀之由衆儀畢、（儀下同ジ）

同廿八日、

一宗演阿闍梨供僧職事、榮舜阿闍梨讓與之狀披露之處、任例可有補敍之由治定了、

〔廿一口方評定引付〕（四 山城）　文明九年正月十八日、

一宗演阿闍梨供僧職讓與榮舜阿闍梨事、去十二月廿八日、雖有評定、不被盡

供僧職ト執行職ト兼帶ヲ允サズ

榮舜ノ請文

講堂供僧職

事之間、重而令披露之處、衆儀之趣、廿一口供僧、與執行職不可兼帶事、執行嚴瑜僧都之請文（眞治三、七）、明鏡也、然者榮舜闍（阿脫カ）梨執行職讓得之時者、不日可被辭退供僧職云々、次寺僧中不可執行代事、應永廿八年三月十四日評定引付分明之上者、當時以如然、所詮兩條共、如衆命有請文者、於供僧職者、可被擧申之旨治定了、

一去年十二月廿八日評定、爲兩三人被定重職事、且聊爾之儀、且職之零露歟、於向後者調人數、偏有存知、其後可被調連署之由評儀了、

同廿八日、

一榮舜阿闍梨請文令披露了、其請文案、（正文廿一口方重書箱第三箱納之）、東寺供僧職與執行職不可兼帶事、先規分明之上者、若執行職讓得之時、於彼供僧者、不日可讓與他人候、万一讓與停滯之時者、爲衆中可被擧申他人候、次爲寺僧之身不可執行代事、任先例不可致候也、仍請文如件、

文明九年正月廿四日　榮舜 判

〔東寺百合文書〕（け十三最勝光院方評定引付 十二月十三日、○山城）

一講堂供僧職事、以觀智院僧正闕、令補任寶嚴院僧都、次護摩堂供僧二口□

慶清增長院ト東寺廿一口供僧職ヲ爭フ

甲斐莊ノ口人ニヨリ供僧職ヲ強要ス

同可令補任寶非院、寶泉院、衆議治定畢、

〔東寺百合文書〕ち廿一口方評定引付 文明八年丙申 ○山城

一故寶光院僧都尭全之跡、廿一口供僧職事、讓與于慶清律師、然而自增長院十二月廿二日 評定、

被申云、於此職者、爲當坊四ケ供僧隨一、自專之儀代々幷尭全請文如此之上者、俊雄公ニ申付了云々、但慶清律師被申云、住坊既讓得、然者於職不可爲各別之間、一具可相續也、但代々雖有請文、永別人仁被申付之事無之、當身失面目之由訴訟、依之兩方共ニ取合及評判之處ニ、增長院自專之段請文明鏡也、爲彼坊可相計之由治定了、就中律師以武邊之口入種々被申候條、言語道斷之次第也云々、

同廿五日、

一昨夕慶清律師來云、此間供僧職事、增長院江雖歎候、無承引候之間、以甲斐庄口入去狀給畢、可預披露云々、將又自增長院被申云、此職事爲寺家任理運可相計之由被仰候間、俊雄ヱ申付候處、被付强々口入候之間、有子細者惣寺江可被申候由、數篇致返答候處、彼使者帶刀杖、欲敍害宰(同宿)相律師之條、事既及物忩之間、寺中面々馳集、以當座無爲之儀、無力如彼方案文一紙出

候了、更以非本意候云々、彼是致披露之處、就此職者慶清律師乍承衆儀還而惣寺江者是非不申候、如此所行一向忽諸衆命之條、以外身(進)退也、追而以科評儀一段可及御沙汰歟、治定畢、

同廿七日、科評定

一今度付供僧職慶清律師幷原永僧都之所行前代未聞也、特就此職者、廿一口嚴重之法式有之、非背嚴誡、剩以武邊之口入令押領他職之條、自今以後濫吹之專一也、所詮一寺捧告文、對于兩人可義絶之段治定畢、仍條々子細顯起請文畢、

〔廿一口方評定引付〕○四山城 文明九年正月廿八日、

一故寶光院尭全跡供僧職事、依相論不定之間、講堂修正壇供爲闕分、別當執行可割分之由治定了、

閏正月廿五日、

一民部卿律師相論供僧職事、甲斐庄口入申子細披露之處、無人數之間、重而可致披露之由治定了、

二月十六日、

甲斐庄増長院ニ押入リ放券ヲ取ル

一相論之供僧事、甲斐庄方ヨリ重而申之間、令披露之處、無人之間、來廿一日可有評定之由治定了、

同廿一日、

一供僧事、

五月廿一日、

一増長院與民部卿律師慶清、相論供僧職事、任理運去年可被補任之處、依甲斐庄口入申、于今延引、然而自増長院以山崎與五郎被問答之間、甲斐庄停止綺之由返答了、仍調連署可遣補任之由治定了、隨而去年甲斐庄使亂入増長院、押而放券取之、正覺院自筆案文出了、雖然未來不可成支證之由、寺家之御一向所望之間、可被出之云々、其狀案、

〔東寺百合文書〕（後注文）「正文増長院返之」 ○チ三十之三十八 ○山城

自其被仰候供僧之事、竹鼻方へ申候處ニ、正學院（覺）ゐつゐて申候へと被申候へ共、私より申事ニて候間、綺を停止仕候由被申候、左候間、身のいろみをもやミ候て、任支證之旨、寺家御成敗よてあるへき由返事仕候、此分いそき〳〵惣寺へ可有御申候、若ゐけのそゐ方より重而申子細候者、承候て居可申候事候、恐々謹言、

文明九
五月十五日　　山崎與五郎
　　圓正 判

増長院御坊

〔東寺百合文書〕 ○メ七十一之八十五 ○山城

御披露已後、惣寺御心得預御狀候者、可爲本望候、

故堯全僧都所帶之供僧職事、讓與慶清律師之由被申候之間、於此供僧者、爲當坊自專之四箇供僧隨一之間、申入寺家之處、任御文明（綱）競之旨御成敗承悅候、然而彼律師相語武邊之者、亂入當坊、以强々之儀出去狀案文、押而取判形之間、當座之儀不及力次第、且者於寺中無其隱者也、雖然以山崎與五郎、甲斐庄方へ種々致問答之間、停止綺仕候由返答候、仍此通與五郎方以一紙申候間、則副進候、此上者以前之去狀不可爲向後支證候、以此旨有御披露、預御吹擧、被補俊耀□候者所仰候、恐々謹言、

文明九
五月廿日　　俊忠（花押）

押取セシ放券ハ後ノ支證トナラズ

興福寺當年研學 關白九條政基ノ長者宣

明年研學

東寺領給主

奉行

行道免除

年預僧都御房　　俊忠

〈大乘院寺社雜事記〉（六十三）

○上略當年研學被退光弘得業了、仍高專得業蒙宣了、此高專ハ先年之研學未業者也、各依新長者（九條政基）殿如此云々、去月成敗也、

〈大乘院日記目錄〉（三十五）

蒙宣、未業一臈云々、

五月日、當年研學光弘得業辭退之、前研學高專得業

十一月十六日、明年研學乘英、

〈東寺百合文書〉（ち廿一口方評定引付　文明八年丙申　十二月廿日、

○山城

一當給主事、久世兩人、（金藤、女御田、佛乘、平野、寶生、植松、金運、）已上補任料以前、（金輪、）

沙汰畢、敎令寶殿、太良原永、已上兩人補任料□（ヌカ）懸間、以後上給主之時不可

出之、矢野、寶泉、增長、河原城、宮內卿僧都、未補任料不出之間、以後上給主（平野以上、）被轉之

時不被出之定也、矢野庄補任料之事者被破之了、

一明年奉行合點之事、宮內卿僧都六、寶敎院、寶泉院各三、宮內卿僧都治定了、

一寶生、寶輪、金運、行道御免事被申、自明年七十已滿之間、不可有子細之由衆

儀畢、

一同三人法會出仕御免事被申披露之處、先規七十有餘一臈一所御免也、然

二佛乘院二臈近年御免之事ハ、老弱之上病氣以外也、以別段之儀彼仁一

人御免也、其餘被申不可然之旨、不可有領狀云々、

〈東寺百合文書〉（た一號寶莊嚴院方評定引付　文明八年　二月四日、

○山城

一眞照阿闍梨近日度者可被出、然而相續而可被入仁躰無之、其上亂中三村

等一向到來無之、（勤）歡學會談義試講可有退轉之歟由披露之處、先且眞照阿

大會前マテ可爲度者、相手ニハ學衆巡役ニ自奉行可被指申也、其間ニ未

役之度者衆可有歡（マヽ）錯（ヵ）之由、衆議治定了、

〈長防風土記〉（八十二　三十三　三田尻宰判佐波郡古文書　防府東大寺領古文書五）

留守所下

防州國衙牟禮令保司職事

合

右以人所宛補也、然者諸濟公事已下、任先例可有其沙汰者、保民宜承知旨、聊

勿違失、故以下、

文明八年丙申八月十九日　　目代（花押）

周防國衙牟禮令保司職

度者

興福寺菖蒲萆

〈大乘院寺社雜事記〉 三六十 五月四日、

一菖蒲萇仕丁參申、一臈菖蒲持參申、如例二百文下行、權別當分、東門院萇之、

八木三斗會所斗定、幷料足百文下行定例云々、九仕丁丸參申所々、正權別當坊、兩門跡、同政所、五師坊、三綱坊云々、菖蒲池菖蒲持參之、彼池予當職中ニ仕丁丸共申入之間、召給七鄉人夫掘之成修理了、

節供

五日、

一御節供如此、手長榮喜久丸、

茅輪

六月朔日、

一朔日事、政所調進如例、

同東院書初

晦日、

一御輪役專實、泰弘、良俊、各付衣、予、僧都、同付衣、五帖、權別當付衣、

〈東院年中行事記〉 七 正月一日、天晴丙午、佛神餠等備進如例年、同音懃行、每日講等如常、節供等如例年、對揚行專坊書初沙汰之、神供自中務太輔方到來、則頂戴畢、加賀部屋會如例年、

二日、晴丁未、同音懃行等如例、節供等如常、節供祝如常、

立春

三日、晴、立春戊申、勤行等如例、節供等如例年、畢、

三毬打

十五日、晴庚申粥、三毬杖等如例年、

鏡破

廿日、晴、夕雨下乙丑、得業坊來臨、長舜坊同被來、一瓶慈仙一合、隨身之鏡破、以略儀沙汰之、

節供

二月十晴五日、己丑、舍利供物懃行等如例年、持齋得業來臨了、

東寺節供

三月三晴日、丁未、節供以略儀沙汰之、

物價

〈東寺執行日記〉 十三 九月九日節供方

卅文 イモ、 十文 コフノリ、 十文 ミソ、 二文 シヲ、 五文 ハシ、 八文 赤カワラケ、 五文 ヤウノ物、 五文 シト入、

廿文 枝マメ二色分、 六十文 酒兩方へ、御子中十五前分、公人中十六前分、

廿文 酒之內、四十文分兩座中、已前、定全子、三十文分御子中、已上百四十六文、定忍子、

中綱十八、定全、定忍、淨琳、定仙、敬觀、敬俊、乘俊、定觀、童子二人不參候、乙夜又、二夜又、

八定全子、

職掌三人、與左右次郎、孫太郎、右衞門次郎、不參、鐘突二人、福善、得万、

興福寺走
摘茶

蚊帳

講堂仁王
講

〈東院年中行事記〉七　三月廿六日晴、庚午、走摘茶沙汰之、竹桧上之、二斤餘在之、

卯月十四日丁亥、蚊帳釣之、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　卯月朔日、

一講堂仁王講、大頭予前法務大僧正、請僧三口出之、惣而大僧正、三人、權僧正、五人、法印權大、三人、法印、三人、權大、三人、權少、六人、權律、十二人、合卅五人　一二

百口之請僧支配之、上首各三口、末座二口也、

導師事、信專律師ニ仰付之、散花以下事請僧三〇以下闕ク、

五月朔日、

一講堂仁王講、大頭修南院權僧正光憲、予、請僧三口出之、〇六月仁王講ノコト、異事ナキニ依リ略ス、

六月十四日、

一仁王講布施物事、以專實亘細仰遣奘舜、

廿六日、

一來月仁王講、大頭松林院僧正也、新御所院號事尋申、□只官計少僧都ト可

千巻心經

心經會

春日社大般若會

佛生會廻請

始行

書旨仰之了、

晦日、

一少僧都御房仁王講代官事、二口ハ訓英□□(請之カ)佛供燈明以下悉皆口別每月五十文、一口與弘五師請取申、口別每月卅文、佛供等ハ自此方可有御沙汰云々、使者定圓也、

〈東院年中行事記〉七　二月一晴日、乙亥、仁王講請僧三口同前、千巻心經如常、

〈東院年中行事記〉七　正月十晴三日、戊午、心經會施行、香直垂、二具、大口、二腰、

〈大乘院日記目錄〉三　二月三日、四日、春日大般若會、綱所泰弘、源乘、從儀師別會順懷僧都、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　卯月十三日、

一佛生會廻請今日成之、來廿一日云々、權官判申出云々、

廿一日、雨下、

一佛生會始行之、行香役宴貞寺主、

〔大乘院日記目錄〕三　四
〔故廻請之寫〕十四
（美書ニ云）寺務淨法院任（四）国

千部會廻請、右方文明八卯月廿六日、別會五師興弘、

千部會廻請、右方文明八卯月廿六日、別會五師興弘、
來廿六日、辰剋、可被集會金堂前、
奉唱千部會請僧事、
奉講
妙法蓮華經
右方
源專房擬講　堯弘大法師　奉
重兼、、、　奉　敎弘、、　奉　專覺、、、
專祐、、、　奉　高專、、　奉
宗藝、、、　奉　懷秀、、　奉　貞海、、、　奉
祐圓法師　奉　實乘、、、　奉　淳快、、、　奉
圓巧、、　奉　專有、、　奉　憲秀、、　奉
弘成、、　奉　重弘、、　奉

俊乘、、　奉　英照、、　奉　英慶、、　奉
實胤、、　奉　政尊、、　專政、、　奉
懷專、、　奉　了弘、、　奉　榮宣、、　奉
朝弘、、　奉　昌懷、、　奉　政快、、　奉
賴乘、、　奉　訓英、、　奉　興胤、、　奉
曉覺、、　奉　實有、、　奉　定乘、、　奉
經禪、、　奉

右依例奉唱如件、

文明八年卯月日　別會五師興弘

權長官法印大和尙位權大僧都判
權上座　寺主從儀師
寺主大法師　都維那法師

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月十九日、雨下、

一千部會廻請、權別當加判、左右正權ニ相分也、
廿六日、

始行　一千部會始行、今日式日也、當會ハ天台法万院相實法印本願也、藤原氏人也、

〔大乘院日記目錄〕三　四月廿六日、千部會始行之、

三藏會　五月六日、三藏會始行、竪者英慶實胤、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月十五日、

復請　一三藏會來廿七日可有始行旨被相觸之云々、印鎰之次、英慶、實胤被複請之事可爲如何哉、前寺務之時、既以被成廻請了、廻請以後之複請ハ、無心元者也、於廻請以前者、複請事不可能左右、爲後之可尋先例事也、此上者廻請モ可成改哉、

延引　廿三日、大雨下、一三藏會來月六日ニ延引、竪者用意不成立故云々、

東北院ニ行フ　五月六日、一三藏會於東北院始行、竪者英慶供目代令弟也、實胤融算觸穢所也、長谷寺伎僧不及下知者也、本承仕役之權別當案內事、兼而今日以書狀、自寺務申子細在之云々、

〔大乘院日記目錄〕三十　十一月九日、三藏會始行、竪者專秀、六十四歲、融算四十八歲、

新唯識會　〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月十五日、

一新唯識會年番昨日被成之、一座講師權官定日未定綱所源乘初年也、

六月廿四日、

一新唯識會始行、證義東門院僧正、早、東林院法印、兼、綱所奘舜、舜貞、講衆後賢得業辭退所也、善英法印、光明院大僧都、宗算律師、興基律師、光守、、實嚴擬講、興憲、、兼親得業、光慶、、、

廿五日、

一新唯識會后座無重難、

晦日、

一自寺務內々以訓英尋申、三十講論匠事、幷法花會放請事、巨細仰遣之了、玄家以下廿臈衆申入故云々、

法花會　〔大乘院日記目錄〕三　七月廿九日、法花會得請好筭、一萬分十七萬、善繼、操、出、分十四、行成、三十講分此內二人ハ□(三)□論匠輩也、十三萬、

八月廿五日、新論匠玄家、英祐、光盛、實英、淨胤、公海、專宗、經舜、

廿九日、法花會得請英祐、權別當分二十萬、玄家、御房分二十萬、光盛、公分八萬、實英、公分八萬、於三

口者去月得請了、各今度論匠之輩也、

始行
文安二年
分

十月卅日、法花會始行竪者、文安二年分、
初日次
立家卅四、薦廿、英祐卅四、薦廿、光盛、十八薦、實英、十八薦、好算、善繼、行成、元雅、初日本太政大臣、十八、薦十八、

方廣會

十二月廿日、夜一乘院禪師、方廣會竪義、精義、門徒光明院權大僧都、十七日ヨリ加行、

三十講

〔大乘院日記目錄〕三二 二月廿四日、卅講論匠實尋、宗信、善繼、行成、惣而三双也云々、

〔東院年中行事記〕七 卯月一日、天晴甲戌、卅講粥自東門院送給之、

觀禪院三十講

二日、天晴乙亥、良舜房法印、長舜房被來、明舜房、觀禪院卅講登高座、無爲事遣賀禮了、

十一日、晴甲申、良專房卅講、初年問者勤仕之、行專房令扈從出仕了、朝座二本加行者講師英宛、香專房、一問、現業早化、一法中道、沙汰之了、於悅酒者於興善院沙汰了、則良專房罷向了、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三 卯月六日、

一觀菩三十講、觀禪院登高座以後、指合令出來之時、不及井院之登高座事、無

力次第、重而不及沙汰條無大事云々、

十四日、

一觀禪院三十講讀師役事、自兩堂出仕之處、西金堂閉門之間不罷出、色々雖問答不承引云々、仍東金堂重而相催之、閉門上者西金堂衆不出仕條尤也、猶以不可然、三十講以後堂司可罪科旨及評定云々、不可然事也、但可依先例事也、

結願

菩提院三十講

興西院三十講

十五日、

一觀禪院三十講今日結願之、今夜後夜入堂在之、井院三十講分ニ相殘處致沙汰歟、不審事也、

十八日、小雨下、

一井院三十講始之、

五月五日、

一興西院三十講始之、如例、

六日、

一松林院僧正來談義、三十講粥被持之、

寺家三十講

院入十講

向淵講

講米談義

講米無沙汰ニ依リ名字ヲ籠メントス

納所德分

六月十六日、大雨風雷、

一去月初比寺務披露、寺家卅講可有始行也、自然題目ハ學侶可有合力旨云々、珍重□□返事申之云々、

〔大乘院日記目錄〕三 二 〔大乘院寺社雜事記〕六十三 卯月十五日、

向淵講僧名、自松林院入見參講米一定以後、可成年番之由、仰綱所奘舜了、

十七日、小地振、

一松林院僧正來、向淵御講米事、學侶ヘ披露狀仰合之、於權別當所談義在之、

五月朔日、

一向淵御講米二十石外者不可沙汰旨、納所多田申間、不可然旨披露、學侶之間、七日八日比、可籠名字旨學侶一決云々、

件講米者、本七拾石也、多田納所事、代々致其沙汰、三十石ニ請申、四十石ハ納所德分ニ仕者也、此七十石外ニ猶以德分有之事也、仍彼三十石分ハ於私宅定置、一宇倉引住(往)連、嚴重ニ致其沙汰之處、近來ハ彼講米ヲ召仕自用、

檢使所分

新唯識講

興善院講

或者一向ニ無沙汰、或三十石ヲ可減旨申、及度々致問答者也、此七十石外ニ檢使所分十石在之、松林院ニ御許可也、御願僧名奉行兼之、件十石米內二石ハ自松林院爲給分拜領歟云々、其餘一向無沙汰云々、旁以珍事也、

九日、

一向淵御講事(米脫カ)無沙汰間、去六日既可籠名字分一決、七通分名字□□處、去四日泰俊色々致披露之間、十日マテ延引、昨日泰俊多田ヘ下向、今夕定而可罷上、隨其返事可有一途之旨、訓英內々申之、

六月八日、小雨、

一向淵御講米事、學侶ニ仰遣之了、

十六日、大風雨雷、

一供目代來、向淵御講米催促事、十八日學侶集會ニ可披露云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三 卯月十日、

一新唯識講(廻)巡請持參、權別當加判、勸進乘政云々、

廿七日、

一興善院講也、藏俊僧都ハ治承四年九月廿七日入滅、于今權別當也、建保二

年八月十三日爲贈僧正法印大和尙位當入滅以後三十五年者也、仁治元年與善院講始之歟、以下藤分觀并已講師體爲講師、當時學匠大略彼門流也、

五月十日、

一本唯識講廻請承仕持參權官判申出之云々、

晦日、

一淨名講始行、松林院得業爲講師、捧物一切經納所役也、檀紙二束進之云々、

供料衣服等近年雖有名無實、於納所役者慇懃ニ致其沙汰、隨分納所也、恒例臨時所役且大儀事也、

所役條々

正月御茶（或瓶子等、）四月風呂代五百文　五月淨名講捧物檀紙二束　六月瓜十合（籠以下代、）同夏事代三貫文　八朔白布二反（入櫃一合、）九月招題（提）寺千燈會油代百文　十月柿籠四　十一月正願院舍利講大頭六百文　十二月上林代一貫文

臨時

本唯識講
淨名講

花見一獻　夏中手習茶　松葬事　小五月召返一獻　後夜入堂、世俗度々　講師坊所出（幷御坊中御出、）御方所出、

六月十八日、

一今日長谷寺蓮花會、

〔大乘院日記目錄〕三　六月廿日、樸楊（陽下同ジ）講始行、少僧都御房御出仕、兩日、六月十日、爲少僧都、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　五月九日、

一樸楊講事、六月必定旨訓英同申之、

廿八日、雨下、

一十三人方衆相殘衆英祐、玄家以下各出頭、爲樸楊講也、

廿九日、

一極樂坊々主來、此間筒井籠僧之內也云々、順宣歸住圓明院、爲樸楊講加行云々、

六月朔日、

一樸楊講加行下臈分始之、今度讀師事定淸大僧都、（于時五師、）興基律師兩人之理

長谷寺蓮花會
樸陽講
同加行

運也、然而除定清而、興基興憲兩人讀之、定清事無正躰者也、會式可破由每
度支度也、仍今度除之了、失面目者也、爲身爲道不可然事也、已講御房爲講
衆可有出仕之間、如近來寺務出仕、以故實可被計略歟、又可有出仕歟、內々
昨日以奉書仰遣訓英方了、
二日、雨下、
一兩勸進代參申、各付衣五帖、樸楊講式日可有始行候、可有御出仕之由云々、
權別當見參承之由返答云々、正權方各如此申云々、
三日、
一就樸楊講出仕事、巨細昨日又仰遣訓英方畢、
六日、
一樸楊講御出仕御共交名出之、御出奉行專實、
清賢　法橋　專實（各鈍色モケサ、指貫、中間二人、大童子隨之、）　伊與守（フタコ、）　千菊丸　入道丸
千松丸　十郎丸　松菊丸　藤若丸　慶德　慶力　慶万　力陣　德
力　座法師二人　來廿日、廿一日辰貝定、
八日、小雨、

一樸楊講新本廻請御判、昨日申出云々、
十四日、
一前供目代宗弘申、新沙汰人云々、樸楊講御出仕在所等事伺申子細仰返事
了、

十六日、大雨風雷、
一樸楊新探殿（頭下同沙）供目代、本探殿、善秀、當時學侶之住寺之一萬也、
廿日、雨下、自日中天晴、

一樸楊講始行、少僧都御房□（出仕銚色カ）□□□五帖、手輿、御共清賢法橋、專實、各鈍色五
帖指貫、御前大童子一人、御童子、力者、各當色、自禪定院出仕、經槻坂西口通
食堂細殿、自北戒壇院前入觀禪院、雨下之間於四足下々輿、正權別當任例
不出仕之間一座ニ御著座也、自堂申入案內、承仕參申、御早參之間、於東金
堂前參合云々、今日新ニ入數輩在之、
廿一日、
一樸楊講出仕如昨日、兩日共五番以後御退出、々入ニ正面裝頭各退了、
今日自東御門御社參、手輿也、少僧都拜賀也、次以致其沙汰了、御共衆□□

辯才天講
四季講
夏中舍利講
五段舍利講
舍利講
慈恩講
大般若經
信讀

向東院了、還御時分參申、

〈東院年中行事記〉七　卯月十□四日、丁亥、(樸楊講文)談義在之、行賢房初而來、少輔得業來、

晴十五日、戊子、堂內一人召仕之、談義在之、行賢房來、得業房被來、

晴十六日、己丑、談義在之、行賢房來、得業房來臨、眞舜房法印被來、

〈東院年中行事記〉七　正月七日、晴壬子、辨才天講修之、堯顯坊得業結緣之、

三月廿八日、壬申、修南院四季講施行、依風氣不出仕、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　卯月八日、

一夏中舍利講始之、同大乘經等、

十五日、

一講問一座予行之、次昨日分舍利講、十三日分慈恩講同修之、

六月十四日、

一五段舍利講予行之、

〈東院年中行事記〉七　三月八日、晴壬子、自今日三ヶ日於南圓堂一寺郡(卿下同歟)參、大般若經信讀之、入堂了、

〈大乘院日記目錄〉三　三月十八日、去八日南圓堂群參、大般若始之、

十二月七日、南圓堂大般若、三參、三ヶ日詐參、平田事、

〈大乘院日記目錄〉三　十一月十四日、大供始行於東北院、供目代乘英、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　五月八日、

一大佛御經自今日始之、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　五月朔日、

一千卷心經導師權別當法印、

六月朔日、

一心經導師權別當法印、

〈大乘院日記目錄〉三　三月十七日、四恩院千部論始之、七ヶ日、

廿四日、千部論供養導師西南院權僧正、主(脫)願東門院權僧正、

〈東院年中行事記〉七　三月十七日、晴辛酉、自今日七ヶ日於四恩院千部論讀誦云々、寺社安全魔障遠離御祈禱也、

晴十九日、癸亥、千部論供養諷誦文事、自供目代內々被申候間書遣了、

雨下廿四日、戊辰、千部論供養、呪願東門院僧正、導師西南院ゝゝ勤仕云々、

大供
大佛御經
千卷心經
千部論
同供養

清涼寺圓頓戒

〈實隆公記〉三　二月廿日、甲午、晴、早旦退出、統惠論師設小齋招請了、向二尊院、自明後日於嵯峨清涼寺有圓頓大戒云々、時正以後越山崎有灌頂、仍下向、爲暇乞罷向者也、蘇合香圓一具遣之了、

東寺供夏開白

〈東寺執行日記〉十三　四月十五日、供夏開白無之、其子細者開白□(地)ヲ納所一方乘琳屋分此料所不出之也、七月ノ末致沙汰處ニ、定金定忍兩(ヤ)云千手堂支具分、依訴訟延引之、

夜叉神修正

年預方ヘ夏衆一腹豐後寶俊、一人有之、依之年預正覺院ヘ此趣豐後住(注)進之間、承仕左樣ニ不隨其役ヲてハ無力ト計被申也、

〈東寺執行日記〉十三　正月十日、夜叉神修正行之、餅一枚出之、(公文中方ヘ)

導師宰相律師行之、三獻、(マヽ)、大根、(モヽ)、菓子三、(フチカ)、中綱五人之內、定分、不參、定忍、同、淨琳、同、乘俊、同、定觀、一人出仕、職掌三人之內、與左右次郎、孫太郎、不參一人、右衞門次郎、二人出仕、得万一獻、(マヽ)、二コン、(カンシ)、大根、(マヽ)、三(カンシ)、

酒、廿五、吉、位無人數酒不入之、(廿カキ、カンシ、トコロ、ハナヲリ、五、大コン、フリ、クキヤウ)、半濟タル間一枚也、

導師、圓鏡一枚、五種カサリ、

千反陀羅尼

二月三日、修正、牛王三枚執行役、白紙牛王各二本、棚守役、

不動堂護摩

〈東寺百合文書〉(ち廿一口方評定引付　文明八年丙申　一〇山城)　五月十二日

一今日西院千反タラニ百疋、於鎭守大般若經百五十疋寄進、良照坊口入也、

中院五十萬反六萬反念佛

又於不動堂一七ケ日護摩有之、(廿一座、當住寺僧一座、宛相當也、)五百疋寄進之、何モ同願主云々、支具料事、一座別廿文宛可有下行云々、酒肴料百文(六人中)交也、其外布施均等支配之、委細支配狀有之、

荒神供

〈大乘院寺社雜事記〉(六十三)　一中院五十万反之由、三千反唱之、

談義

〈實隆公記〉三　六月廿七日、己亥、晴、自今日六万反念佛唱之、大略可爲日課也、

伏見院宸筆ノ論

〈大乘院寺社雜事記〉(六十三)　卯月廿五日、

一堯學法師荒神供ニ參申、

〈大乘院寺社雜事記〉(六十三)　卯月廿八日、

一松林院(學頭)僧正談義ニ來、上人御房七帖ケサ持參拜見之、伏見院御筆論一部同、〇以下談義ノコトアレドモ略ス、

唯識論
慈恩法樂五重門
辯才天法樂
藥師法樂
觀音法樂
地藏法樂

廿八日、
一唯識論一部法樂、
五月十三日、雨下、
一慈恩法樂、五重門、〇六月十三日ノ條略ス、
〔大乘院寺社雜事記〕三十 卯月五日、
一講問二座予行之、一座者去三日分、
七日、
一講問一座予行之、大弁才天法樂也、所願成弁珍重幸甚々々、〇六月七日ノ條略ス、
八日、
一講問一座予行之、藥師法樂、〇五月八日、六月八日ノ條略ス、
十八日、小下、雨
一講問一座予行之、觀音法樂也、〇六月十八日ノ條略ス、
廿四日、
一講問一座予行之、地藏法樂、
廿五日、

文殊天滿法樂
彌勒法樂
星法樂
太子法樂
毗沙門法樂
彌陀法樂
普門品百卷讀誦心經書寫
慈惠大師法樂

一講問二座予行之、文殊天滿法樂、
五月朔日、
一講問一座予行之、社頭代官如每旬也、〇六月朔日ノ條略ス、
五日、
一講問一座予行之、三六法樂、
廿一日、
一講問二座予行之、一座昨日星法樂也、
廿四日、雨下、
一講問二座予行之、一座ハ廿二日太子法樂也、〇六月二十二日ノ條略ス、
六月三日、
一講問一座予行之、毗沙門法樂、
十五日、
一講問一座予行之、ミタ法樂、
〔實隆公記〕三 正月三日、戊申、雪時々散、早旦行水、普門品百卷命人々令誦之、般若心經一卷書之、是慈惠大師法樂也、

舍利出現

七月晦日、辛未、晴、今日佐々木小原宿□(所)近日新造之杜上青色佛舍利出現、貴賤群集、彼舍利十三粒於愚亭拜見了、

法隆寺聖靈會

〈法隆寺聖靈會記錄〉○大和

文明八年丙申二月廿二日、

役人繪殿前上祐重、下宗慶、舞臺上長弘、下榮弘、

梵音頭春心、

金光院堂集會、自九日十八日マテ在之、

講師坊集會、同日ヨリ十六日マテ在之、

廿八

興請同一聽祐重、春心、實專、快訓、清賀、宗慶、尊實、榮弘、長弘、友舜、實存、清快、延壽、慶松、圓宣、俊弘、慶尊、新入同直弘、英範、同順眞、

日光山常行堂念佛

〈日光山常行堂念佛所作配〉○下野

導師昌欽　文明八年丙申八月十八日、

一番一頭深譽

四番二頭昌喜　一番三頭昌快、

〈東寺百合文書〉ゑ一號上○山城

東寺光明講方世出世道具目錄

八萬四千基塔板木

現在帳

渡申光明講方世出世道具目錄

一本尊兩界一鋪箱入之、

一土砂器一

一過去張七卷

一塔版木二枚八万四千(基)版、万タラ版是也、

一食堂聖僧御鉢子舟入之、

已上出世門具

一上椀五十膳各入箱、

一皿數百入箱、

一折敷大小百枚各入箱、

一中居椀廿五膳此内十五膳六椀、此外不具少々、此内汁椀一、正覺院御算用之時失了、使淨見、

一中居折敷六十枚此内二十枚緣黑、

一同皿數四十五

一下椀三膳此外破損椀少々有之、

一下茶椀貳

一升一出米時用之、

一提貳

一味曾垂袋壹、

一白鉢四、

一杓五、

一布巾破損而無之、

大乘院尋範忌日
戰亂ノ爲メ收納ナキニ依リ佛事ナシ
大乘院孝尋忌日
安位寺經覺忌日
足利義滿忌日

一箱一合、算用狀等、其外色々、
一文書箱一合、
已上世間門具
右所渡申如件、
文明八年十二月廿八日　慶琳(花押)

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　卯月九日、

一內山本願(大乘院尋範)忌日、持經者參申、
十七日、小地振、
一三俣摩(藤原房前)御忌日無之、彼庄亂以後不能取納故也、可歎々々、
十八日、小雨下、
一後己心寺(大乘院孝尋)御忌日、光明眞言一晝夜佛供燈明代三十疋下行、
廿七日、
一後五大院(安位寺經覺)殿月忌日也、
五月六日、
一今日鹿薗院大相入(國股)道御忌日也、
八日、

覺信忌日
五大院覺尊忌日
法華寺忌日
足利義敎忌日　戰亂後八講ナシ
一乘院幹信忌日　羅漢供

一康和(覺信)大僧正御忌日、持經者參申、御忌日於一乘院修之、
十一日、
一五大院(覺尊)僧正忌日也、法花經讀師事、於新宮可沙汰旨仰付之、十疋下行、
六月四日、
一七日御忌日廻請權官判申請之、
五日、
一永專來、三个御忌日代官事畏入之由云々、權官代官仰付之、
七日、於法花寺雨下、
一法花寺御忌日ニ參詣了、參□居坊大湯屋ニ入了、梵網會丁聞弟子御房爲讀師、樂人等參勤、嚴重事也、
廿四日、
一普光院殿御忌日也、大亂以後八講無之、
廿七日、
一法務權僧正賴信正忌日也、持經者參申、

〈東院年中行事記〉七　正月九日(晴)、甲刁、先師正忌日、羅漢供修之、孝心坊招請

三條西實連月忌

之、

〈實隆公記〉三　十月廿日、庚寅、雨降、今日故相公(三條西實連)羽林月忌也、十年、九　明遲論師招請之、

尋尊淨土寺參詣

〈大乘院寺社雜事記〉三六十　五月三日、

一淨土寺參詣、坊主頭風氣云々、

一條兼良淨土寺愛染王參詣

六月朔日、

一淨土寺愛染王參詣了、坊緣被新造之、直ニ成就院ニ參申、禪閤愛染王御參詣、興進之、

吉野參詣

〈大乘院寺社雜事記〉三六十　五月廿三日、

一堯善今日吉野參詣了、

六月五日、

福田院參詣

一巳講、御房、權官、東門院禪公以下福田院參詣、步行、

〈實隆公記〉三　三月十九日、癸亥、早旦樂邦(萬里小路冬房)同道罷越大原、及晚參梶井宮、入夜歸宿坊、窪道(法師、浦)

三條西實隆萬年草ヲ獻ズ

廿日、甲子、晴、未明出魚山、於長谷行朝膳、詣觀音、(解脫寺、)歸路岩倉歷覽、參觀音、(大雲寺、)

大雲寺觀音參詣

寺、歸宅、未刻也、万年草進上、禁裏、自大原則有御書、

三條西實隆萬年草ヲ獻ズ

十月十日、庚辰、晴、及晚向廬山寺、例時短律阿彌陀經最中也、長老對面之後暫聽聞之、

廬山寺參詣

〈親長卿記〉七　九月十六日、晴、及晚細雨下、參廬山寺、聽聞如法念佛、次參詣北野、(今朝行水、)次誓願寺、行願寺等、

〈親長卿記〉七　正月九日、雪下、依初寅參詣鞍馬寺、中御門中納言(宣胤)、樂邦、(飯尾)彥左衞門淸房等同道、行步不叶、歸路迷惑也、

長門少司久守

三月廿日、晴、參詣鞍馬寺、安禪寺殿、眞乘寺殿、曇花院殿等御參也、右衞門督、左大辨廣光、元長等同參詣申、御共通夜也、參貴布禰越、

廿一日、晴、自鞍馬寺下向、

九月廿一日、晴、參詣鞍馬寺、安禪寺殿御參詣、(松木宗綱)兵部卿(冷泉)爲廣朝臣、樂邦等同道、

廿二日、雨下、自鞍馬寺御下向、

〈親長卿記〉七　二月廿一日、晴、爲參詣石山、坂下龍首座、樂邦等同道、詣中御門、黃門旅店、折節飛鳥井大納言入道(榮雅)來、閑談歸華、暫付梅枝送一首、予、中御門、樂邦等贈各(資力)暫所望十五首題續之、

安禪寺宮眞乘寺宮曇花院宮等鞍馬寺御參詣

甘露寺親長石山參詣

十五首題詠和歌

甘露寺親長北野社誓願寺行願寺鞍馬寺參詣

三時知恩院參詣
忍坂墓所參詣
市原野墓所參詣

廿二日、晴、朝飯之後參詣石山、詣竺藏院一宿、
廿三日、晴、朝飯之後參佛前、自石山歸華、
〔親長卿記〕七　正月十二日、晴、予參賀三時知恩院已下所々、實淳卿番代同前、
〔實隆公記〕三　十二月七日、丁丑、霽、參三時智恩院、
〔實隆公記〕三　十月十三日、癸未、天晴、今日詣忍坂墓所、統惠論師同導之、入江殿御寮同被參了、晩頭歸宅、
〔親長卿記〕七　七月八日、細雨下、參大原舊院御墓所、安禪寺殿、眞乘寺殿、大聖寺殿、庭田大納言入道、右衞門督、實隆朝臣等同道、於現覺坊有御非時、及晩歸宅、
十四日、晴、詣市原野墓所、予姉妙珊尼、實隆朝臣同道、實隆朝臣番代召進元長畢、
〔實隆公記〕三　七月八日、己酉、陰、雨時々灑、今朝參大原御廟、安禪寺宮、大聖寺宮、眞乘寺宮御參、大納言入道、都護、金吾等相伴、各馬上也、〇中略午下剋著大原、於理覺坊著直垂等、參御廟、於彼坊有小齋、
十四日、乙卯、晴、早旦退出、當番令相博元長了、都護令同道、向一原野墓所、申下刻歸宅、

一條衆良堯善部屋ヲ訪フ
顯一勾當

一乘院教玄衆良ヲ訪フ
橘寺如來堂勸進

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　卯月六日、
一成就院ニ參申、〇此後、尋尊、屢成就院ニ赴クコトアレドモ、異事ナキモノハ略ス、
十二日、
一禪閤御入於堯善部屋、堯懃供御等申沙汰之、
十七日、小地振、
一顯一勾當參申、見參了、
廿三日、大雨下、
一友清仕丁息參、狩衣御童子、鵲鄕住人也、名主清賢法橋以畏申入也、千菊丸號次郎丸頭弘五師後見云々、
同道云々、彼友清ハ御童子勝若丸法名道椿、之息也、茶臼屋之友長仕丁爲猶子、
相續之間成仕丁了、友長ハ櫟原之披官人、仍友清爲櫟原之披官了、又道椿（發下同ジ）之正流ハ門跡數代奉公之御童子御披官人也、內々ハ小南ヲ相憑歟云々、
廿六日、
一一乘（敎玄）院殿成就院御宿ヘ御出云々、
一橘寺如來堂勸進僧參申、御判共事申入之、

一條教房書狀

五月九日、
一土佐(一條教房)御所ゟり御書到來、去月廿三日御書也、十六个日ニ到來了、
廿三日、
一成就院ニ參申、自土佐御所御書、三月御書也、先日令到來御書より前御書也、
六月五日、
一松林院僧正(榮雅)夏事持參、如例也、禪閤渡御、御配膳松林院得業、東門院禪師以下也、
一條兼良大乘院ニ赴ク

十日、大雨下、
一於東門院、寺務權官(任圓)(尊寒)、東北院(俊圓)修南院(遵祐)等會合云々、
任圓等東門院ニ會ス

十九日、
一御作手與四郎之非子五歲、松千代丸、今日初參、爲御童子折二合榼等持參、代々御□□之披官人也、與四郎同道、
廿二日、
一筒井舜覺房順尊來見參、一獻給之、畏入了、初來者也、榼三荷、折一合、瓜二籠持參、聽延同道、順宣代官來云々、
筒井順尊大乘院ニ赴ク

晦日、
一御童子春松丸初參、榼一双、折瓜持參、十二歲云々、北南院住也、
一紀州下向躰立野奉書申請之、清賢申入之、
〈東院年中行事記〉七　正月七日、晴、壬子、修南院へ罷向了、修南院入來、得業坊、
同被來、一瓶一種隨身之、光明院被來、一瓶兩種豆腐半□隨身之、
二月廿六日、庚子、加賀公勢州へ下向、
三月九日、晴、癸丑、加賀公自勢州上洛了、
十一日、晴、乙卯、加賀公京都へ上洛了、
廿六日、庚午、良專房自今日堂室暫住了、御洗老尼來、加賀祈禱事談合了、竹屋(光兼)殿被來、
廿七日、辛未、御洗老尼來得業房來、
卯月五日、小雨下戊寅、良舜房法印、少輔得業、長順房、長舜房被來、
六日、己卯、良專房來、堯顯房得業被來、
〈大乘院日記目錄〉三　二月廿九日、良祐(延乘房)十六、參門徒、(堯弘得業弟子、中御門猶子、京仁云々、)
六月廿四日、兼尹、淨恩房、十七、參門徒、兼實得業弟子、高樋舍弟云々、

得度
新茶
神南院油
坂油賣

〈大乘院寺社雜事記〉六十　六
一兼尹（淨恩房、）參門徒、兼實得業弟子、高樋息云々、
六月廿四日、
〈大乘院日記目錄〉三　八月廿四日、興家、（圓堯房、）十六歲、參門徒、專秀弟子、鳥屋息也、
〈東寺百合文書〉ち廿一口方評定引付　文明八年丙申　十一月十六日、
○山城
一龜壽殿得度、當年十五歲出家之由、金勝院告文書狀披露了、
〈大乘院寺社雜事記〉六十三　卯月十一日、
一新茶二十袋自已心寺進之、
廿四日、
一神南院御油五升、自興憲擬講方進之、坂油賣ニ申付之云々、故光舜法印奉行地也、奉行分ハ持寶院堂ニ令寄進歟云々、
晦日、大、下、雨
一三貫文、御宿當月御米代、自長谷寺進之、
五月三日、
一去月分御月當御米方三百疋、同持參進御宿了、當年中分如此仰付之故也、
廿一日、

筍
雜紙
杉原扇
瓜
天野酒
薗豆
瓜配當

一自內山年預上洛、樝一荷兩種進之、禪閤御樝二荷兩種進上之云々、
廿二日、雨下、
一內山中院恒例卷數幷樝一双筍二束進之、
廿六日、雨下、
一內山中院來、茶二十袋、雜紙十束持參、先日禮云々、
六月十四日、
一杉原十帖、扇一本、遣明舜方、使堯善、
廿七日、
一西南院（光淨）僧正方より樝二双、折一合、瓜二籠送給、使者林賢云々、喜入旨仰之、
〈東院年中行事記〉七　正月七日（晴）、壬子、天野酒小樽自良禪坊方送給之、
卯月九日（晴）、壬午、薗豆一鉢自得業房方送給之、
〈東寺百合文書〉ち廿一口方評定引付　文明八年丙申　三月十五日、
○山城
一今度譽田自大津就上洛之儀、可有禮節歟之由披露之處、樝代百疋幷卷數年預可致持參之由治定畢、同申次廿正云々、彼足者浮足方近年一向无之間、當知行諸庄薗可有各出、可爲（隨）如瓜配當之由衆儀畢、

若槻莊日次瓜

風呂

日次瓜

草川莊役

〔大乘院寺社雜事記〕 三六十 六月廿七日、

一若槻庄日次瓜、今日初而五合到來、

廿八日、

一日次十合到來、

晦日、

一日次瓜十五合到來、

〔大乘院寺社雜事記〕 三六十 卯月二日、

一風呂在之、一切經納所頭也、五十疋沙汰、禪閤等渡御、東門院僧正自夜前候、

十六日、

一風呂在之、草川庄役、禪閤渡御、

廿四日、

一風呂在之、禪閤渡御、日中供御等進之、上下悉行之、慶英、宗信、英寬、祐秀等申沙汰也、悉皆三百疋進之云々、

五月四日、

一風呂在之、樊舜寺主頭、禪閤渡御、

大市莊役

興福寺東室上聲

帶解橋修造

勸進ヲ以テ修造セントス

六月二日、雨下、

一風呂在之、清賢法橋頭、御湯供御調進之、禪閤入御、

十三日、

一風呂在之、大市庄役也、禪閤入御、松林院參申、

〔東院年中行事記〕 七 二月廿日、晴、甲午、來廿五日門跡之御湯依御下知今日申付之、塔內二人、幷小保召進之、光明院被來、

三月五日、晴、己酉、於修南院風呂在之、光明院沙汰也、則罷向了、

〔大乘院寺社雜事記〕 三六十 卯月廿日、雨下、

一近日爲東室上聲、鳥見山之材木共引入寺中、珍重事也、學侶沙汰也、當室坊主ハ東北院僧正也、

廿六日、

一大宅寺下司山村武藏公胤慶參申、帶解橋修造事、自六方書狀給之、書狀趣ハ、件橋事兩方及相論、理非爲六方難申、不可有存知候、橋事ハ爲甲乙人不可然之間、爲六方近所茶屋ニ申付之、以勸進可沙汰候、可得其意之由儀也、去廿四日書狀也、彼茶屋事、相尋下司之處、自道ハ東方大宅寺領內也云々、

喜多院ニ階堂檜皮修理

東寺西門堀浚渫

池掘ヶ

予相尋云、六方申狀爲下司無相違歟如何、返事、此趣非存知候間、爲下司申付橋事ハ可沙汰仕分、六方ニ可返事候、其子細ハ、先年橋造營事、自下司方勸進聖を申付、致其沙汰之處、彼聖不法仕無正躰成下候間、自寺門公人ヲ被差下、爲寺門被懸橋了、其時一旦之儀也、於今度者涯分可沙汰云々、爲下司分彼在所之茶屋兩所候、其物ニ申付可沙汰之旨申之、誠有其實者可爲珍重者也、自然不成立者、又如先年ニ自寺門以公人可沙汰歟、何よも成立可然旨仰了、

六月三日、

一近日喜多院之二階堂之損檜皮修理在之、寺門沙汰、自律家奉行之、文安年中悉以上賁、自寺門沙汰也、近日破損故加修理云々、

四日、

一爲掘池田舍人夫共堯憋申請之注文給泰弘了、

〈東寺百合文書〉 ち廿一ロ方評定引付 文明八年丙申 十月廿四日、

○山城

一寺官等申、西門之通重而堀樑(濱カ)等可令沙汰、惣夜廻被仰付者可然歟之通、公文所來申旨披露、其分可申付云々、諸坊中公人境内百姓等可爲如先々之由治定了、

織田敏定尾張犬山德授寺建立

相模陽雲寺建立

會津黑川東照寺建立圓命寺建立

土佐潮江觀音寺鰐口銘

一新屋敷百姓等申、彼屋敷西一町以前之外又一重可掘候、然者地子之事、其分無程可預御免之由申間、餘引懸不可然之間、地子免之事不可叶云々、

〈異本塔寺長帳〉 原題長帳續年日記 四

同喰丸邑圓命寺建、

〈尾張志〉 三十九 丹羽郡 寺院 德授寺 犬山外町よありて、了義山と號し、京都妙心寺の末寺也、文明八申年、當地の城主織田大和守敏定、栢庭和尚を招請して建立し、桃隱和尚を開山とす、栢庭泗の本菴なり、

〈新編相模國風土記稿〉 三十四 足柄下郡十三 村里部 北ノ久保村○中略 陽雲寺 陰盛山西稱院ト號ス、淨土宗、足柄上郡沼田村西念寺末、文明八年、莊蓮社嚴譽建、永正二年二月廿八日卒、

〈古文叢〉 九

奉懸潮江觀音寺、文明八年十二月日敬白、願主阿部氏太郎兵衞、

右一通、安藝郡和食西分村永正寺ニ藏ル鰐口ノ銘也、古文凡テ三通ノ第一紙、

〈大乘院寺社雜事記〉 六十 三

六月三日、

人夫

鹽斷除病延命

藥草ヲ服ス

物忌札

十个夜番

一東方芝辻子八夫濟々自松林院召給之、十座物五八召加之、

〔東院年中行事記〕七　卯

〔東院年中行事記〕七　正

二月八日、晴壬午、鹽斷沙汰之、

三月八日、晴壬子、鹽斷沙汰之、

卯月八日、晴辛巳、鹽斷沙汰之、

正月八日、晴癸丑、鹽斷沙汰之、爲除病延命也、

〔大乘院寺社雜事記〕六三十　卯月二日、

一藥草今日より服之、

六月十四日、

一物忌札宣舜書之、去七日同前、

〔大乘院寺社雜事記〕六三十　卯月晦日、大雨下、

一立野十个夜番、至今夜了、

六月朔日、

一法貴寺一黨十个夜至夜前勤之、公文申入者十个夜之內上四日寺本下六日散在勤之處、今度散在不參了、爲以後嚴密之御下知可目出之由申入之、

童子入

下剋上ハ當時ノ風儀

得御意、重而可成奉書旨仰返事了、凡番事ハ一黨中ニ仰付計也、於私支配之一段ハ、公義更不及御覺悟事也、且如何、是併一堂(黨)近來冷(零)落故歟、珍事々々、

〔東寺百合文書〕ち廿一口方評定引付　文明八年丙申　十一月十六日、

〇山城

一公文所申、夜廻當年中如先々可申付云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六三十　卯月十日、

一清賢法橋申、御童子二萬中市之入道丸息、近日御童子入事致其沙汰之處、辰市御童子號田舍御童子、不加其數條不便次第也、近日各加悅酒之衆之處、相除條歎申入云々、又入御童子事、名主清賢方へも不申之間、不覺悟如何云々、予返事、彼息事奉公子細未申入之、申事者公方向更以不被知召事也、左程子細在之者、以長伊與守可相尋歟之由仰了、

十三日、

一六方書狀進之、兩門連々御會有事不可然之由云々、爲下臈上事計申條、下極上至、當時之風儀面白、爲土民侍以上之身上、進退相計事儀同篇也、

五月九日、

京衆地下進退ノ掟

佛事布施引分ケズ

菩提山鑄物師相論

西金堂閉門

一一昨日衆中集會在之、在奈良京衆地下者共、進退事、數个條掟法定之云々、

〈東寺百合文書〉（ち廿一ロ方評定引付 文明八年丙申）○山城

一去年佛事布施不引分十九ケ度有之、堅納所ニ可申付之由、若衆方ヨリ被申之間、相尋乘珍、年貢不出百姓等一々令披露畢、然者去年分支配之殘不可有之通披露了、

四月四日、

十五日、

一自若衆中被申、去年佛事布施無支配分事、作人寺官以下堅可有催促、不事行者下地可被召放之、猶不事行者可被閣歟之由披露、納所ニ申付、先可有催促、佛事略事者可有思案云々、

〈大乘院寺社雜事記〉（六十三）卯月廿六日、

一井山鑄物師相論事、同亘細下司山村ニ仰之、

五月五日、

一西金堂閉門間事、爲成敗學侶之內沙汰人二十人、六方內沙汰人二十人差定之、可致盡理糺明旨、寺門一決云々、可爲無爲條、爲集儀分ハ不審事也、無心元々々々、剩可及爭論事可出來歟、兩堂共以可及異儀事也、

向礫

喧嘩

〈大乘院日記目錄〉（三）十一月十六日、西金堂開門了、

五月五日、

〈大乘院寺社雜事記〉（六十三）五月五日、

一向礫在之、芝衆龍花院四足ニ至、自龍花院ハ修學者共罷出、前代未聞事云々、六方衆中集會有之云々、今日礫事、自衆中沙汰衆以仕丁丸、奈良中相觸之令停止處、於南大門芝有之間、沙汰衆等罷出追拂之間、龍花院之四足ニ追入之處龍花院方衆了、益了恩兄弟以下、又帶弓矢罷出追拂之云々、色々說共有之、不一途、自松林院申給龍花院方、與衆中公事ニ可成歟云々、

六日、

一衆中六方集會在之、昨日題目云々、

〈東寺百合文書〉（ち廿一ロ方評定引付 文明八年丙申）○山城

五月八日、

一去二日、新屋敷堀掘之時喧嘩出來、堤（堤弟）彥六ヲ令打擲之間、備後石見等勢遣令沙汰、依之濱井則打死畢、其外又三郎伏見等被疵、彼等皆近比國方被官者罷成之間、其趣令注進之間、去五日以豐岡使、年預納所地下人等召之間罷出、於隅田（隅田、豐岡）許ニ納所地下人相尋子細、注一文ニ、屋形披露之、依不事盡、六日、又雜掌（上總）納所召具地下人罷上了、被尋子細、又七日、同彼等罷上

興福寺講衆蜂起法花宗徒ヲ襲フ田平發向

高野山金剛三昧院領

之處、對決以前ニ備後逐電了、依之公事落居也、又昨日七日、給人罷下、彥六家ヲ檢符、寺家ヱ案內之間、公文所納所罷向同付符了、其由披露之、

〔大乘院寺社雜事記〕六十三　五月廿七日、

一今夕定寬法師披官八與訓英披官喧嘩事在之、無爲落居云々、

〔大乘院日記目錄〕三十三　六月廿六日、

一講衆蜂起、法花宗住屋進發了、

會、

〔高野山文書〕金剛三昧院七

筑前粥田庄年貢　十一月七日、就平田(田平)八座方發向事、學侶六方神水集

幡(播)州道山庄年貢

同國佐江村年貢

作州大原年貢

紀伊國由良庄年貢

津國小眞上年貢

右諸庄薗運上年貢万貫(脫カ)万貫皆納如件、

文明捌年正月吉日　成範在判

〔開口神社文書〕八〇和泉

三方役壹町九段大御年貢米、幷秋公事錢貳ヶ條未進分事、一途催促被申付候處、自寺家色々依御侘事、政所殿より任御免狀旨、閣申候上者、於已後不可有其煩候、但秋公事錢一段別百文宛、又御年貢米反別貳斗貳升七合八夕宛、此分可被納狀如件、

文明八　下村公文
卯月七日　定森(花押)
（附箋）「三郎次郎」
念佛寺　公文山崎屋

〔法隆寺伍師年會衙記錄〕〇大和

御年行事

就鵤庄國方段錢、例年者一獻分九十貫文宛沙汰處、爲近年躰每年及二百七十貫文、雜用以下四百貫文仁被相懸候間、地下借錢爲過分條珍事由、名主大通庵幷內山入道罷上色々寺家衛歎申者也、土代彼借錢事者、名主百姓悉以雖爲可致返辨段、勿論代々在庄有加判上者、寺家珍事不可如之者歟、然上者

文明八年雜載　二八九

雖非本意、於今度借錢者、以別段撫民之儀、爲寺家可廻返辨之計略旨、滿寺評定事實也、仍於足付者、自庄家寺家仁運納之諸納所、公私共仁悉令勘落、彼要脚仁宛置處也、其謂者於爲庄家不知行者、公私名田畠不可有正躰間、如此之儀以連署令記錄、調衆儀條（條下同ジ）、群儀事切畢、仍爲龜鏡記之了、

年會五師圓海

同勘落名々辻

光久、万阿、中宮寺重國、勸學講、東室宗永、藏人坊、助弘、羊西圓堂計增、恒眞、光末以下、西室

度前講、西室太子講、文殊講、本供養、法方、浮免、御舍利堂方一圓、去年西方未進

方、兩社頭、東保平方太歲頭、以上、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　五月二日、

一自衆中申、御領內窪邊借物無沙汰子細在之、以使可致催促云々、仍遣定使了、

四日、

一柚留木法眼狀到來、去月十七日書狀也、若狹國甘西鄉事、半濟分計略仕候處、成就院被仰合、先以爲珍重存旨申返事、

興福寺領窪

若狹甘西鄉

半濟分ヲ取ム

丹後三俣摩莊

伊賀大內莊

笠目莊

坂田莊

院入莊

神供反錢

丹後國三俣摩庄請文、予當職之時借遣、以其色々問答、無爲御成敗、雖成下國、役事不計之間、一向無正體、請文重可持參云々、

一伊賀國大內庄振上分十連（數百）、二到來、峯殿御寄進、當門跡相承領也、年貢一向任雅意不致其沙汰、廿一个年檢注等も無正體成下了、號笠目庄、

六日、

一西南院僧正方より使者來、坂田庄事、

六月三日、

一就院入庄御米事、顯融沙汰次第巨細泰弘言上、

五月六日、

〈大乘院寺社雜事記〉六十三　五

一五个所申、法師原之內所々在所ニ立屋、門跡公事不可沙汰之由且如何云々、以外子細也、就法師原所役也、不可有在所之他領、云十座、云五个所、不能左右之由仰了、

六月廿三日、

一去年神供反錢事、越智方無沙汰之間、可籠名字之由、學侶一決云々、反錢無爲之儀、今日於古市申合云々、但自寺僧中筒井鄉も不致其沙汰上者、慇懃

無用之由、申下體有之云々、希有事也、

廿六日、

一大佛殿燈明去年より奉加ニ入了、今日四升下行了、御童子七郎丸ニ渡之、

〔東寺百合文書〕（た寶荘嚴院方評定引付 文明八年）　二月十八日、

○山城

一三村庄亂中一向寺納无之、然而自觀智院代官所望之仁有之、以半分年貢、可有了簡之由被申之間、披露之處、委細相尋、以雜掌直ニ可有了簡之由衆了、（歟脫カ）

〔東寺百合文書〕（ち廿一口方評定引付 文明八年丙申）　十一月十六日、

○山城

一上野庄自山名方裏成之事申之通披露、不可叶之由、可致問答事、

一横沼就矢野庄引違寺領年貢可押之由申、以折紙申事、

〔阿蘇學頭坊文書〕（三 ○肥後）

猶々、彼坊地事、永代可爲御計候、此内鏡善へ被遣御扶持候ハヽ、彌御門葉繁昌之嘉瑞よて候、

御近所之坊地事下へ依罷移候、自今以後可爲御計之由申定候、此内鏡善望之由候、依坊地役候申候、尤存候、以御談合鏡善望之分、わり御渡可有候、適御

東大寺大佛殿燈明
東寺領三村庄
東寺領上野庄
矢野庄
肥後阿蘇西岩殿寺學頭坊地ヲ萬福院後能ニ與フ

門葉事候之間、御扶持可然存候、爲後日如此令啓候、則此折帋鏡善へ可被遣候、同敷御一筆御副可有候哉、以面拜万吉（可カ）被申述候、恐惶謹言、

文明八年丙申
七月十八日　　學頭、
万福院に　　長宣書判
御同宿中

〔親元日記別錄〕中

一慶壽院等順（讓存房）同前、（七月六日）同日、

仁和寺眞光院故院主借錢卅五貫文事、（卅貫文也、）借書、寬正元十二廿、

富波庄爲敵國之上者、以若州藍田庄年貢可致算用云々、同二十二卅、質券江州

一招月庵桂厚（文明）一八九十六、（諏左將）

永代買得寬正五十九、十之地、丹波國船井郡廣瀨村爲久名田九段卅代事、賣

主一宮備後守逢亂云々、（注文有之、）

同前

一慶春藏主一八九廿六、

城州平野北田地七段（字號、）賛卅梅津郡内六段所々事、自壽仙僧手

等順

桂厚

慶春

正輿
清水茂吉

小番
元三

中御門宣胤坂本ヨリ上洛

買得當知行也、仍可給安堵御下知云々、

一太清院正輿首座（諏左將）（一八十十七、江州野洲郡、）

寺領江州所々買得相傳當知行之地事、可被成下安堵御奉書事、

一清水新右衞門尉茂吉（同）（一八十十九、）

西勝坊領坂本善學院秣田事、爲質券之地十ヶ年間、代官職乍令契約、（去文明二、）二ヶ年所務之後押領云々、

一若王子雜掌（清泉州）（一八十二二、）

坊領若州瓜生庄定使私借物事、號熊谷四郎左衞門直俊錢主、無謂懸本所年貢、以數十人使譴責之、

禁中、

〈親長卿記〉七　正月二日、晴、番代召進元長了、予依不具也、

三日、雪時々下、元三也、當番召進元長、予不具之故也、

六日、雨下、中御門中納言（宣胤、）雖爲當番、不上洛、仍予俄參內、（下姿、彼門代也、黃）

七日、晴、中御門中納言上洛、依御番也、

十五日、晴、今日請取番也、付著到退出、

二月九日、晴、宿番祗候、民部卿相博之故也、

十三日、晴、今日請取番也、

三月六日、晴、中御門中納言自坂本上洛、自今日當番之故云々、

四月一日、晴、自今日小番結改、外樣每月三ヶ日云々、內々番如元五十日也、予爲二番、

六日、晴、參內、番也、今月御番結改、予二番也、

五月廿一日、晴、早旦自御番退出、至昨日五ヶ日番也、

七月十二日、雨下、親方番代請取也、左大將請取相博也、親方番代世尊寺領狀之處、豐通（久我）卿番代存知之間、九番德大寺（實淑）番代可立替之由、藤宰相頻懇望之間令領狀、自去二日存知之、

十月一日、晴、自今日小番結改云々、予爲三番云々、

〈實隆公記〉三　正月十一日、丙辰、晴、雪時々散、早旦行水看經等如例、午剋著束帶參內、自今日當番也、番頭以下皆參、但政長（近江院）卿故障云々、

二月廿日、甲午、晴、晝間著束帶參內、今日爲兵部卿番代也、入夜於御前數剋世事等言上之、又有勅定、

五月二日、甲辰、天晴、爲公敦卿代著到付請取、早旦退出、入夜歸參侯殿上、
八日、庚戌、晴、早旦行水、今日斷鹽也、入夜爲右宰相中將（正親町公兼）番代、著束帶參內、侯寢殿、
六月朔日、癸酉、天晴、及晚颱吹、著束帶參內、於御前數剋有御雜談、今夜爲顯長（西坊城）卿代、侯寢殿、
十二月一日、辛未、晴、今夜爲高清（海住山）卿代祗候了、自今日近臣小番爲四番、三ヶ日夜可令祗候之由也、
十三日、癸未晴、早旦著束帶參內、自今當番（日晚方）也、三ヶ日夜、季春（四辻）卿、敎國（勘解由小路）卿等祗候、及晚雨灑、

〈歷代殘闕日記〉八十七　言國卿記　十

當番ニテ祗公（候）也、

〈親長卿記〉七　十二月廿九日

行（元長、御新奉行也、）御卷、付予許御卷數等相副進上、其次申入歲暮御禮等、去廿七日御經供養事等有御尋、

〈實隆公記〉三　二月十一日、乙酉、天顏快晴、晚頭前內府被參、有一獻、於常御

所各傾數盃、今夜侯寢殿、
四月十四日、丁亥、陰雨時々灑、無殊事、二尊院昨日上洛、今日爲御禮被參、予申次之、則御對面、
七月四日、乙巳、晴、今日三寶院（義覺）殿令參內給云々、

〈實隆公記〉三　二月十九日、癸巳、晴、及晚有召之間參內、有十度飲、
三月三日、丁未、晴、御祝以後依召參御前、少時御雜談、廿五日御法樂和歌等拜見之、
六月十二日、甲申、晴、炎暑如蒸、今日猶侯御所、御記等有蟲拂、
十三日、乙酉、今日猶侯番、蟲拂等如昨、

〈實隆公記〉三　正月二日、丁未、晴、此間有竹園御祝、入夜於小督局有小盃酌、
次有若宮御方御祝、退出之次、於內藏頭（山科言國）陣屋撤裝束、又勸一盞、歸家之處、行水
行夕飡、看經及深更、依節分也、
三日、戊申、雪時々散、竹園幷若宮御方御祝等如昨、深更退出、今夕於中將方有
一盞、
五月九日、辛亥、晴、今日猶祗侯、入夜於若宮御方有盃酌、深更退出、

實隆仙翁拜領

十月三日、癸酉、雨降、朝間退出、自若宮御方仙翁百拜領之、賞翫無比類者也、及晩中將、臨崇、統惠、定意等來話、小盃酌有興、

御燒火

廿五日、乙未、晴、終日無事、於若宮御方有清談、今夜於御學問所落間有御燒火、今夜又候寢殿、

〈歷代殘闕日記〉 八十七言國卿記 三

付、御袖結ウス萌木、薄紅、白綾ニセラルヘキ也、

〈實隆公記〉 三

正月七日、壬子、雨屬晴、今日故菅亞(東坊城)相益長息女被參禁裏云々、當時內侍無人之處、珍重々々、

諸家、

〈實隆公記〉 三

正月朔日、丙午、天晴、○中略次參伏見殿、

二月卅日、甲辰、雨降、及晩參竹園、民部卿(白川忠富)、季經(四辻)朝臣、予、言國朝臣等一提持參、有御當座、大飲及深更、今夜候竹園、

四月廿二日、乙未、雨猶不休、於伏見殿有盃酌、

五月廿八日、庚午、晴、入夜參伏見殿、今夜祇候、

七月十七日、戊午、晴、入夜向左幕(聖護院三條公敦)下清談、移剋歸路參伏見殿、四辻宰相中將(季經)等、

伏見宮家御當座和歌

東坊城益長女內侍トナル

安禪寺眞乘寺曇花院三時智恩寺

同直之、入夜大雨降、

廿六日、丁卯、晴、涼風來、小浴、入夜參竹園、

七月廿三日、甲子、晴、殘暑甚、今夕李門御出京、於竹園清談及三更、

〈親長卿記〉 七

正月十日、晴、及十二日、晴、予參賀三時知恩院已下所々、

十四日、晴、未剋許自曇花院可參之由有仰、卽參入、安禪寺殿、眞乘寺殿有入御、每年之儀云々、予、樂邦、修藏主許祇候、入夜參內、實淳代番也、晝間不參、

十六日、晴、參安禪寺殿、依召也、眞乘寺殿、曇花院殿等有入御云々、及大飲、予、樂邦、修藏主等也、

廿六日、晴、參安禪寺殿、眞乘寺殿、

廿九日、晴、及晩參眞乘寺殿、安禪寺殿、曇花院殿等有御出也、及一獻大飲、左大辨宰相、廣光、四辻宰相中將、季經朝臣、樂邦、修藏主等祇候、○以下、實隆、安禪寺、眞乘寺、曇華院ニ參ルコトアリ、レドモ略ス、

〈實隆公記〉 三

七月廿一日、壬戌、晴、入夜參安禪寺宮、曇□(華)院、眞乘寺等宮、舊院上臈局、左大將、(大炊御門信量)右大將、源大納言、右兵衞督等同參入、大飲及深更、

龍首座和泉ヨリ上洛
賀茂棟久出雲下向
中山宣親石山ヨリ上洛

〈親長卿記〉七　正月二日、晴、招頭中將、實隆朝臣、用意朝飯了、
二月二日、陰、詣善法寺幷富樫等許、年始未罷向之故也、
九日、晴、入夜詣民部卿陣屋、近日移住之故也、予、園前中納言基有、左大辨宰相、
二條前宰相、(中將尹房)右大辨宰相、(廣橋兼光)公兼朝臣也、
十五日、晴、龍首座自泉州上洛、
十八日、晴、及晚詣常樂庵、依招引也、南向同被出、龍首座、樂邦等同道、
三月廿三日、晴、棟久縣主下向出雲國之由申之、
廿九日、晴、中山少將宣親、自石山上洛、自明日、○以下闕文、
四月二日、晴陰、中山羽林今朝張行汁中酒等、

〈實隆公記〉三　正月朔日、丙午、天晴、向源大納言勸修寺大納言、(日野勝光)前內府亭等、
歸路向甘露寺、有盃、歸宅之處、向中將亭、詣鎭主春日社、次行朝膳、參入江殿、於
東庵有盃、參方丈御盃拜領、則歸家、
四日、己酉、瑞雪寸分盈地、豐年佳景、幸甚々々、今日不出仕、聊休息、統惠論師、(昭慶)竹
田法印、堯慶法眼等來、民部卿(山科言國)內藏頭入來、悉對面了、勸修寺父子、萬里小路等
來臨、正益、種直、高鳩彌太郎等來、秉燭以後、右宰相中將入來、中將來臨、一盞祝

著齋藤主計助夫婦同在座、
五日、庚戌、宿雪滿簷、朝日朦朧、元盛男妻携一樽參入、四辻、滋野井來臨、(公澤)大昌院
入來、江邊(マヽ)中將、小倉中將(季綱)等及晚被來、故障之間不能對面、
七日、壬子、雨屬晴、向執柄陣家、(兼俱)卿宅、參雲花院、眞乘寺、安禪寺宮、東洞院、舊院上
藏局等、向三位殿、局、右兵衛督、正親町、小倉、左右大將等亭、○中略參仁和寺宮御
對面、退出之處、於入江殿有一獻、歸路向內府、藤亞相、同相公、四辻等亭、二尊院
等、
十四日、己未、晴、早朝行水、燒香看經、今日所々參賀、南御所、寶慶寺殿、北小路殿、
連輝、万松軒、大昌院、(景三)三西堂、園、細川、畠山治部大輔山名典厩、讚州、廬山寺、赤松、
伊勢、同毋、昭慶法印等也、沈醉過法、及黃昏歸宅、則著束帶參內、依當番也、
二月朔日、乙亥、晴、早旦行水、詣鎭主春日社、向入江殿、二尊院等、午時向飛鳥井、
甘露寺等亭、參安禪寺宮、
八月廿三日、甲午、晴、於南隣朝飡相伴、上乘院法眼在京之程也、定法寺入來、及
晚自青蓮院有使者、天隱和尙來話、勸一盞了、
十一月二日、壬寅、晴、寒威折綿、晚頭自日野拾遺許有使者、明後日可設朝飡可

園基富官奏始
梅
唐紙
硯
人參木香湯
各月丸

來云々、今日俄歡樂之間、令養性、隨躰可罷向之由返答了、
四日、甲辰、天晴、內府以下歷々向日野侍從許、下官歡樂故障之由、以使者申雅
國朝臣了、

〈親長卿記〉 七 十一月四日、晴、女生日、詣日野侍從許、依招請也、有朝飯、內府
公敬公、已下濟々、

〈歷代殘闕日記〉 八十七 言國卿記 二月八日、下向坂本、
廿六日、上洛、〇コノ後、屢坂本ヨリ上洛スルコトアレドモ略ス、
十一月十日、天晴、今日蘭少(基富)將カンソウハシメニテ、各亭へ罷也、中院、(季泰)四辻、(公宗)松
木(尹)、四辻宰相中將、予、左少辨同道罷也、〳〵、

〈實隆公記〉 三 二月十八日、壬辰、晴、一樽進上典侍殿局了、
四月廿四日、丁酉、晴、今日大原梅子一籠被下之、則進入江殿了、
八月一日、壬申、天晴、統惠論師今日自九州上洛、唐紙被惠之、
三日、甲戌、晴、行水、統惠論師來話、硯一面被惠之、予亦硯遣之了、
十一月三日、癸卯、天霽、八參木香湯五包元盛進之、則腹用者也、
六日、丙午、雨降、周防入道元□各月丸五百粒惠之、治脾泄良藥也云々、

齊木
童形除服宣下ノ例

萬里小路阿子丸出仕
滋野井信量除服出仕

風呂

七日、丁未、天晴、今朝召大工仰沓之事訖、同沓木一足之分、遣庭田亞相許、
〈親長卿記〉 七 六月十七日、晴、自勸修寺大納言許、送使者云、童形(重服)萬里小路阿子丸申、
除服宣下否、予覺悟分可示云々、返答云、舊院御代廣橋大納言(綱光)弟、阿婦丸、喪父之
時、不申除服、五旬之後出仕、阿庭丸(故永盛子)喪母之時、不申除服、五旬之後出仕畢、
可爲例歟、
十八日、晴、勸修寺大納言參會申、昨日子細重尋予云、彼兩童者不申敍爵歟、予
云、未申爵、万里小路當時申爵之間、可相替歟、予云、不可依爵是非歟、仍奏聞、勅
答云、可尋予云々、卽相尋之處、彼兩人事注申之由重奏聞、仰云、此上者不及除
服可參云々、
十九日、晴、阿子丸(万里小路、實寺大納言次男、勸修)參內、不及除服也、
〈實隆公記〉 三 八月十三日、甲申、晴、信量(右大將)卿除服之事被申之、則宣下了、
十一月二日、壬寅、寒威折綿、今日滋野井除服出仕之事申入之、則勅許、令宣下
了、

〈親長卿記〉 七 十二月十四日、晴、有風呂合水、
〈實隆公記〉 三 四月廿九日、壬寅、自曉天雨降、今日入風呂、終日安閑無事、

鹽斷

〈實隆公記〉三　四月廿三日、丙申、屬晴、朝日現、終日無事、入夜行水、明日爲斷鹽也、

タノモシ

〈歷代殘闕日記〉八十七言國卿記　十一月二日、天晴、今日陣屋ニテタノモシアリト云々、

近江朽木莊公用錢納狀

〈朽木古文書〉乙十五號ノ一　納申御公用之事

合貳拾貫文者、

右爲朽木鄕文明五年分、請取申所如件、

文明八年二月十四日　中輿(判)

清水殿

朽木莊料足請取狀

〈朽木古文書〉乙十六號ノ二　請取申御料足之事

合貳拾貫文者、

右爲御作事方、朽木庄御年貢万疋之內、所且請取申如件、

文明八年八月廿五日　右衞門尉國久(花押)

清水殿

請取申朽木之御年貢御料足之事

合拾貫文者、

右爲御造作方、所請取申如件、

文明八年十月十一日　右衞門尉國久(花押)

清水殿

うけとり申御さうさく方の御れうそく

合拾貫文わかつ〳〵

右所うけとり申如件、

文明八年

十二月二日　御大工(おもん)國久(花押)

くつ木より

(清カ)きよ殿

〔朽木古文書〕 乾 乙五十一號ノ一

安主名御年貢御屋形參分

合文明八年

安主名年貢		
貳斗		
七升		
百文	分米九升	源八方渡
二貫五百文	分米一石七斗五升	御夫市右近
八百文	分米五斗六升	御夫さい法師
九貫貳百文	分米六石四斗四升	御夫市者
五貫文	分米三石五斗	御夫津田方
五貫文	分米三石五斗	御夫ゑもん二郎
廿貫文	分米十四石	上殿參 そうゑん渡
百文	分米八升	
一貫四百五十文	分米一石一升五合	莚三まい 御一家有寄合時ゝい物代
一貫八百八十五文	分米一石六斗三升五合	公文方渡
		同御寄合ゝい物

六貫五百文	分米五石二斗	長德院返辨
二貫文	分米一石四斗	御夫さい法師
五百十文	分米三斗三升二合	水鳥四番
一石五斗	御酒米	御一家御寄合時
五斗		御中間五郎兵衞 御公用ふ上候 上殿參
一貫五十文	此内五十文利分 分米七斗三升五合	
一貫文	分米六斗五升	平井掃部助方へ
百五十文利分	分米九升七合五夕	同
已上五十七貫五十五文		
分米四十石九斗八升五夕		
已上貳石貳斗七升米分		

〔安藝文書〕 四 ○土佐

安藝山中

東者大道カキリ

南者八多山塚カキリ

西者大忍塚（カキリ）
北者別役塚（カキリ）
右彼之在所八多山可爲知行者也、仍爲後日狀如件、
文明八年正月十一日　安藝兵庫頭元盛（花押）
八多山藤左衞門尉殿

〈親元日記別錄〉中
一靜住憲舜（清泉州）（文明八年）一四十九、
大御乳人御局御里（棟地）口東西七丈五尺、南北六丈八尺、事、任賣券之旨、爲後可被成下御奉書云々、
此儀雖望申奉書、先々無其儀、仍如本物返屋賣券（被封裏遣候、裏書之樣）任此狀之旨、所令存知也、
文明八四十九（和泉守、弾正大夫、當執事代、）（二十八友久一流譜中正文在伊作衆田部四郎左衞門）
畠中之門
三郎五郎

〈薩藩舊記〉

安藝元盛
大乳人ノ宅地
薩摩田部友久畠

四段
二段卅
二段
卅
廿（ひらき）
以上九段卅
畠（三斗まき）
文明八年四月廿日　田部三河介友久（花押）

〈安藝文書〉四〇土佐
任御奉書之旨、東川專當名之御年貢米、定貳貫文之外者、指置申處實也、
文明八年六月一日　□□（花押）
東川
專當ゐ女

〈親元日記別錄〉中
文明八年雜載
下ふるかヨ
ゐやうめん作
中ふるかヨ
ゑしの口
屋敷之內
屋ゐ

池田定員　若狹今富小石丸名

沼田光延　若狹瓜生莊下司職

野依雄春　加賀德丸保

美濃壓長莊

增田元清

同前（頭左將）（文明八年）一七、六、

一池田孫右衞門定員（一七六、此方被官人）

若州今富內小石丸名事、永代買得相傳也、可被成下安堵御下知之由申候、

放券文明元十二（一七六、此方被官人）

一沼田彌太郎光延（一八八廿一、松主）

知行分若州瓜生庄下司職重書事、去寶德二入置拾貫文質物之、約月晦日入夜可請返之由申候處、既號流、錢主中村（一八八廿一、守護被官）押領彼所之、就被成御下知雖返付、猶拘惜重書云々、

一野依若狹守雄春（一八八十九、清泉州）同日、

加州德丸保內永代買得之地賣券、（寬正三四廿一、中興院妙彥四郎、）同國福田庄地頭方內地賣券、（寬正二十一、沙彌妙覺）廿三、證人同前同日、

一同前

賀茂山本向武久知行濃州脛長庄事、就借錢契約處、不慮爲敵國之條、不運至也、何時モ彼國應御成敗者、如契約可領知之由、可申請御奉書云々、

一增田彥左衞門尉元清（一八八十九、諏左將）

西京二三條內田地（目錄有之、）

西鄉彥右衞門尉（一八八十九、一色式部少輔殿被官、）

越中宮川莊（越中國宮川庄百姓等借物事依不知行無沙汰云々、）

三條西家河內所領（〔實隆公記〕三十一月三日、癸卯天霽、今日召下木村男於河州家領了、十二月十一日、辛巳晴、行水看經等如例、今日丹州今林庄上使臨崇下向了、）

丹波今林莊

寄附、

（〔永嚴寺文書〕○越前）

奉寄進〔　　〕

合壹段者〔西之方一　　〕

右件之田地者、爲妙性禪尼後生菩提、寄進永嚴寺所實正也、但每月無懈怠靈供おめされ候て、御とふらいあるへく候、本券相副候て寄進申候上ハ、たれ〳〵ゟ一族親類と申〳〵候て、いらんゟつらい申候者出來候ハヽ、以此證文、盜賊の御沙汰あるへく候、其時一言子細申候はしく候、仍爲後日狀如件、

文明八年丙申二月八日　　道德之內妙性（花押）

後生菩提ノ爲メ

一族親類ノ違亂者ハ盜賊トス

〔大徳寺文書〕

○六 山城 きたん

京都大炊御門東洞院屋地先祖子供菩提ノ爲メ

右おゝいの御門東のとういんの屋地之事、あこよ永代頼うぬより御ゆにり候所實正也、但先祖子とも菩提のためニ、天澤院に寄進申候、頼兼の御ゆにり状おそへ候てまいらせ候、巨細者彼ゆにり状見る候也、仍寄進状如件、

文明八年四月廿七日　　村上掃部助さい女 あこ（花押）

〔日御崎神社文書〕

○二 出雲

出雲千牧村宇賀郷之内椿分所々

出東郡之内千牧村、同郡宇賀郷之内椿分所々事、日御崎爲御神領寄進云々、其分則致披露、彼所々之事打渡申候也、恐々謹言、

文明八　　高宮 重心（花押）

六月八日

三崎殿 參人々御中

奉寄進日三崎御神領事

合兩所者　出東郡千牧村、同郡宇賀郷内侍、前分之事

右爲天下太平、殊政數武運長久、子孫繁榮、奉寄進者也、諸役段錢以下、任先例令免除所也、仍狀如件、

文明八年八月廿八日　　政數（花押）

三崎撿挍殿

〔武州文書〕

六 荏原郡南品川宿妙國寺所藏

馬場地贊（碧カ）代仁本光寺地進置事

東者　其方之堺積

西者　法藏房堺

南者　善仲寺堺

北者　妙行寺堺

右此分永代進置事書狀如件、

文明八年丙申六月廿日　　本光寺住持日統（花押）

鈴木入道殿御宿所

〔日光院文書〕

舊稱成就院文書　○上 但馬

奉奇（菅下同沙）進田地之事

合米參斗者坪者作之北畠之年貢之内にて、毎年秋一期之間まいらすへく候、

右辰歳五ニ成候龜壽、息災延命、增長福聚、心中所願皆令滿足之故奇進申候、然者正五九月之十一日とに、御供お御寶前ニまいらるへく候、彼莵速之宿之給分末代相違あく龜壽まて知行仕、此御供米參候樣ニ、千秋万歳御守請候て可給候、仍奉奇進所如件、

文明八年六月廿八日　　富田美濃守朝秀(花押)

妙見山

日光坊參

〈密宗年表〉文明八七月十三日藥師院久阿、以分知寄附丹生寺爲祠堂、藥師院後改大光明院、山吏、

〈性海寺文書〉○越前

奉寄進乙法師名之内田之事

合壹段者在坪沼寺也、

右件田者、雖爲私知行之内、性海寺ニ奉寄進、實正也、於此田違亂之輩在之、盜賊可有御罪科者也、仍狀如件、

文明八年十一月　日　　堀備後守景重(花押)

性海寺

〈中山寺文書〉○若狹

寄附

若州大炊郡大寶寺遺跡事

右彼依大寶寺久破壞之儀既無住持之寺僧、然間此本尊同堂舍共、去正長年中奉移一乘寺ニ、是故當寺遺跡鎰懸限山中東西南北之境等、任先規、悉令一乘寺ニ附處也、仍爲後龜寄附如件、

文明八年十一月　日　　公友(花押)

一乘寺寺僧中

〈明通寺文書〉上

奉寄進若州宮河中寺堂田事

合壹宇但御寄進狀幷田地坪付在別紙、

右彼田地者、片山太郎左衞門尉正次雖爲重代相傳之田地、依有志之子細、支證等悉あいそへ、爲明通寺如法經堂之定籠(緑脱カ)、永代令寄進者也、然上之者、爲子

堀景重　若狹大寶寺遺蹟　同一乘寺　同宮河中寺

文明八年十一月　日　　堀備後守景重(花押)

性海寺

〈中山寺文書〉○若狹

寄附

若州大炊郡大寶寺遺跡事

右彼依大寶寺久破壞之儀既無住持之寺僧、然間此本尊同堂舍共、去正長年中奉移一乘寺ニ、是故當寺遺跡鎰懸限山中東西南北之境等、任先規、悉令一乘寺ニ附處也、仍爲後龜寄附如件、

文明八年十一月　日　　公友(花押)

一乘寺寺僧中

〈明通寺文書〉上

奉寄進若州宮河中寺堂田事

合壹宇但御寄進狀幷田地坪付在別紙、

右彼田地者、片山太郎左衞門尉正次雖爲重代相傳之田地、依有志之子細、支證等悉あいそへ、爲明通寺如法經堂之定籠(緑脱カ)、永代令寄進者也、然上之者、爲子

孫違亂煩之儀不可在申者者也、然間爲妙祐妙春令奉加所也、無懈怠可預御訪者也、仍爲後證、永代奉寄進所如件、

文明八年丙申十二月十五日　　正次(花押)

片山正次

賣買、

〔眞長寺文書〕

○美濃「(端裏書)永代賣券文書　慶靜坊」

永代賣渡申下地之事

合大者坪本三輪地藏堂前、もゝのき引、

右件下地者、依有用要、代錢三貫九百七拾文、永代賣渡申處實正也、但彼下地ニハ、每年三輪社當ヘ、爲修理料五百文宛候、無沙汰なく御沙汰候、永代めさるへく候、自本下契約狀本文書相そへ候て進之候、兎角之儀申輩出來候ハヽ、此以書狀、堅盜人罪科めさるへく候、万一天下一同德政行候共、彼下地ニおひてハ、違亂之儀不可有候、仍爲後日證狀如件、

文明八年丙午正月十三日　　眞長寺慶靜坊　觀榮(花押)

代錢
修理料五百文
德政

〔本蓮寺文書〕

○備前

沽渡申私領田尾之事

合壹段者　宛直錢貳貫貳百文也、

在坪幡多之鄉之內神乃七坪也、

四至　東限類地、西限縄手、南限類地、北限同鄉內田、

右件田尾、依有直物要用、永代牛窓法花堂沽渡所申在地明白也、但於此下地者、自往古無正稅候、於已後不可有土貢之設、天下一同德政行、若又親類他人於中違亂候共、爲私永代沽渡申候上者、不可有承引候、仍爲後日沽券狀如件、

文明八年丙申歳正月十八日　　難波新四郎　秀房(花押)

備前牛窓法花堂
正稅ナシ德政
難波秀房
德政

沽渡申私地田尾之事

合壹段者　直錢貳貫文也、

在ゝ知鄉ゝらうす十二坪也、

右件私地田尾之事、沽渡申所實也、但就此下地、親類他人之中違亂輩出來候ハヽ、自公方御成敗あるへく候、縱天下一同御德政行候共、於此下地ハ一言子細申間敷候、仍爲後日沽文如件、

直錢
德政

文明八年正月十八日

百姓職　太郎左衛門殿

〔大德寺文書〕 六〇山城

（端裏書）「東山谷　崗崎賣券　百姓岡崎彦三郎」

直錢　永代賣渡申百姓職之事

鴨升　合大者在所者東山谷字名坪內、

右彼田地者依有要用、直錢四貫七百文大西又三郎方に賣渡申處實正也、但本年貢者雲頂院に六斗六升六合六才、鴨升にて納申候、其外諸公事ゟく候、若於此田地違亂妨人有出來者、以本錢買返可申候、万一無沙汰儀候者、可被召上候、仍爲後日買券狀如件、

文明八年正月日　　難波新四郎　秀房（花押）

作職

〔京都帝國大學所藏文書〕 東大寺文書

賣渡　作職新券文之事

合壹段者字カツラキ川マタケ、歲末黑米貳升四合、　請人岡崎彦三郎（花押）　賣主谷彦右衛門（花押）

右件作職者、年來知行之處ニ、更ニ無他妨、雖然要用アルニヨテ、手繼者ヲ相副ヘ、直錢肆貫伍佰文ニ、東大寺執金剛神燈明方へ賣渡申事實正明白也、向後不可有他妨者也、仍狀如件、

文明八年丙申二月三日　　藤夜叉（ナウイン）（花押）

〔桂林寺文書〕 〇丹後

丹後國志樂庄春日部村是元名田事

合參斗代者在所小倉大さこ、木戸口くさり、參十七、御年貢錢毎年さゝ可申候、

右田者、是元名公田半之內依爲、行永十衛門方へ、限永代を渡申候上ハ、三分二之方より異儀を申候ハヽ、爲地下公方堅罪科（結下同ジ）可有候、玉井殿之於子孫ニ聊之儀被仰候ハヽ、公方地下之御成敗よて、御罪科被行可申候、如此候間、過分之禮錢請取渡申候間、後向（向後）いらん不可有候、仍爲後日支證如件、

文明八年貳月廿八日　　玉井帶刀左衛門尉　直綱（花押）

〔徵古文府〕 〇一伊勢

沽申田之事

撰錢　苅河莊　作職　直錢　伏見升　加地子

合一段在かやもときさよりより四段をゑ、ひろしへおゑて、そおゑへをさ
き二郎さへもんとの、にしへ大ろさとの、きさへあさちあや二
郎ひやうへ　まうまさき、

右件田ハ、忘りせん十貫文ニ申さめ、薗田十郎き守誠神主ようり申物也、爲後日狀如件、

文明八年二月廿九日　　かい□正(花押)

〈誓願寺文書〉○一山城　伏見田案文

賣渡永地之事

合貳段者在所苅河庄之内、字著柿七田也、

右件下地作職分者、雖爲右衞門五郎先祖相傳、依有用要、直錢伍貫文ニ永代をかきり、地藏寺賢秀御房ニ賣申處實也、但此下地預申作仕候て、本年貢苅河庄之納よて、本所庄内ニ壹段別ニ壹石三斗貳升代、伏見升六升入也、これお作人とゑて沙汰仕候て、其外加地子之米伏見升十合ニ七斗宛、毎年永代斗可申候、但賣申上者、御用之事候て被召放候共、異儀申ハ敷候、尙々先祖(行カ)より別相傳知行仕候上者、更々他之違亂煩あるへからす候、萬一於子々孫々、違亂煩申輩出來候者、爲公方可有罪科候、仍爲後證新券之狀如件、

文明八年三月廿八日　　三栖右衞門五郎判

〈太田文書〉○伊勢

定　永財沽却渡進田地新立券文事

合壹處者在所二見三津字大濱

四至限東山、限南二見辻(險カ)田地、限西山、限北西村五郎(狹カ)宜田地、

右件田地者、雖可渡本支證、自御手參藏主處分給後、代々知行敢無妨他地也、然而本文書依爲壹紙連券、不副渡者也、雖然依有急用、限上件直錢拾肆貫文、進所大鹽屋東殿沽却渡實正明白也、雖至末代更ニ不可有若拾(狹アラン)ヶ年之内、不慮煩出來者、不謂地利、勘定本直之用途、愷可辨濟也、仍爲後代放券狀如件、

文明八年丙申四月五日　　二見三津德雲庵元英(花押)

口入二見三津次郎大夫(花押)

〈京都帝國大學所藏文書〉

賣渡申屋敷新券文之事

合壹所者、

四至東者道、南者岸、西サイメ、北者大路、

薪庄

右山城國綴喜郡薪庄之內、
右件屋敷者、中長阿相傳之雖爲私領、依有要用、現錢拾貫文、所虎丘菴賣渡申
實也、於已後萬一有違亂之輩者、盜人之可行罪科者也、仍爲後證明鏡之狀如
件、

文明八年丙申八月日　　中一　長阿

直錢

〔本蓮寺文書〕　○備前

私領沽渡申財屋村庵屋敷畠尾之事
合壹段者　宛直錢參貫文也、
在坪可知鄉內唐臼里拾坪在之、
四至　東限垣副田、西限垣籠西之畠、
南限繩副田、北限三賓寺免之田、
右件畠、自往古我等屋敷分壹町內庵屋敷畠尾、直錢依有要用、牛窓之法花堂
江無正稅永代沽申在地明白也、但時々檢麥惣地江懸候時者、支配之分可有
沙汰候、自然一色成候ハヽ、夏大麥秋大豆穡破付分可有沙汰候、此外不可有
萬雜公事候、若又天下一同德政行候共、於此下地者、我等兩人爲計沽却申、幷
手次渡狀移相副進候間、親類他人中不可有違亂煩候、仍爲後日永領沽券之

正稅ナシ
檢麥
德政

狀如件、

文明八年丙申霜月十五日　　柘植四郎次郎經光(花押)
　　長原彥九郎盛重(花押)

柘植經光
長原盛重

直錢

〔塚本文書〕　○備前

永代賣渡申藤井之保屋敷之事
合壹所者　在所相應寺御領內、
右件屋敷幷藪者、山崎妙悟寺之梵喜瑞源兩人雖爲相傳私領、依有用要、直錢
貳拾陸貫文仁本文書拾壹通相副、淨光院聖言御房仁賣渡申處實正明白也、
本役者參百文ヲ半分宛、二季ニ法花寺江出之、此外萬雜公事無之、萬一於以
後違亂煩出來時者、賣主而(ママ)共明可申候、但於當亂中之賣德下地、德政長地行
候共、別而申定候上者、聊一言之子細不可申候、仍爲後日賣券證文之狀如件、

文明八年丙申十一月廿八日　　梵喜(花押)
　　瑞源(花押)

〔眞長寺文書〕　○美濃

永代賣渡申田之事

直錢

利子四十文

合貳段者　坪本ハ小洞口、

右件下地者、依有要用、代錢貳(貫)伍百文仁、本文書を相副候て、永代を限候て
うり渡申處實正也、此上ハ於彼下地、(違)亂輩出來候ハヽ、此狀爲前、盜人の御
罪科可爲候、又永代下地、德政行事候共、背余方を申ハ敷候、仍爲後日證文狀
如件、

文明八年丙申十二月十七日　うりぬし眞長寺坂本坊慶算(花押)

貸借、

〔輯古帖〕四〇伊勢

かり申料足事

合拾貫文者、此分ハふちん壹貫かり申候、

右每月貫別四十文にて、來十二月中ニハおらす〳〵返
辨可申候、もし殿をうけニたて申候うへハ、さら〳〵ふさたあるましく候、
仍狀如件、

文明八年六月十一日　則長(大中臣)(花押)
氏長(大中臣)(花押)

大隅禰寢院佐多村ノ地

紀伊熊野先達旦那

讓與、

〔薩藩舊記〕前集二十八

讓與

大隅國禰寢院佐多村之內田等之事

一松坂之園一ヶ所　一濱田七段內山口園一ヶ所

右件於田園等者、崇音重代相傳之私領也、さるあいさ、ちやし(く脫)二郎左衞門清
康よりんをうもんを相副候て、永代ゆつりわさずところ實也、おしさゝむ
ゑ事ハ、ゐんをうもんよめいたくなり、仍爲後日讓狀如件、

于時文明八年丙申四月七日　沙彌崇音

〔米良文書〕四〇紀伊

先師執行法印道珍不違御意、一朝將來之事不違命終至時御意、本振(舞カ)來
候也、

城南房分

伊勢國、駿河國、遠江國、伊豆國、相撲(模)國、武藏國、越後國、出羽國、其外漏分何國
也共、一圓房地諸旦那、資財雜具、城南房可爲地(知)行者也、

文明八年雜載

近江
三河
駿河
下總
河内
越後

一城喜房分
近江國、是ハ大田勘解由左衛門ヨリ賣得一圓、三河國池(地)頭所領、山城國中旦那方分、駿河富士下方、善鎭ヨリノ白刀一腰、光勝房下茶園、伊勢國深部旦那山壽房賣一圓、城慶房ヨリ賣得、下總國上野八貳左衛門作八百田一段、料足十貫文、
一禪林房分甲斐國禪慶房ヨリ質券、伊勢國寺尾ヨリ讓ノ旦那也、是ハ二品ニ七貫ノ質物也、安房國平島旦那一圓、葛(マヽ)奥殿ヨリ井坂田六百田、石藏彦次郎作ハミ子金、(貳)將束刀一腰、料足十貫文、
一十聖房分、河内國寶住院賣得旦那也、鎌倉永金門弟引一圓、イサカタ六百田、次郎大夫作、黒皮具足一量、(領)料足十貫文、
一有馬北村殿分、濱宮右馬承(丞)作、田一貫、田一段、是ハ善鎭御戸開時割付一、此十七八年ハ一貫文分ノ(ヲヽ)押(デ)不立候、御意得候、毎年一穀(右寇)筒也、來太刀一腰、是ハ濱孫左衛門方ヨリ五貫質物也、(佐野カ)タテ□□□
一□□房五貫文
越後國十貫文狀、一同料足十貫文、
一南光房料足十貫文、

奥州會津
安房

一光勝房六貫五百文、無料足借申候、是一、同一野湯料三貫文質、是一、光海ヨリノ質券狀二、千光房三河國淨大房十貫(二)賣得旦那也、此間是モ此方ハ半分地(知)行也、
一葛(マヽ)小三郎井坂田二百田二斗、八郎殿賣得旦那先達引、二斗米惣野五百文代、
一河關源三郎溝田一段、是ハ其方ヨリ兼テ(ナシ、殘料足一貫文、賣得田也、同畠每年二百文塞代、
一艮覺房料足五貫文、奥州會津狀共餘多有見テ可取候、
一圓淨房クシノカワノ二百田二斗、安房國先達岩嶺門弟一圓、
一南花房具足一量、是ハ鳥居ヨリ房ノ賣得具足也、自然房作(ヲヽ)小事合力可爲候、
一慶達房ツイチ五貫文作狀、
一仙艮房伊勢アサカ旦那、其方ヨリ賣得申候、
一光明房本二貫狀一文、折敷代半分一貫五百文也、一貫五百文ノ請取申、
一河關九郎三郎料足二貫文、
一戌公上□一野五郎次郎作二百田一段、料足三貫文、
一松壽菴三百田一段、

一伊與公眞信房、土佐殿、二斗ッヽ、舉米、

右件次第譲狀事、先師道珍法印御意、本房任進躰(退)譲置處也、內歲實報院道珍法印御恩、外歲寺尾覺有大僧都御恩也、其外ハ女ノ呪第立ヨリ一帋半錢ノ費ニ不得候、仍譲狀如件、

文明八年丙申九月十日　瀧本執行權僧正珍海(花押)實報院大僧都道助申置處也、

返渡金ヲ盜取ル

訴訟、

預錢無沙汰

〔親元日記別錄〕中

貸金返辨催促

一勝藏財遲布霜臺（四月九日）同日、

去文明四九、鵜川中務丞ニ預置料足廿貫文事、同十月十三日ニ可返渡之由、自彼方申之間、翌日十四爲請取候遣人候處、昨夜忍入テ盜取之、造意之企可有御成敗云々、

一片山太郎左衞門尉正次諏左將（文明六四十六）廿貫文事、一向無沙汰云々、

一芝田太郎左衞門預錢四九、

一比丘尼永輪諏左將一八八九、

富永駿河入道常永、去應仁三年以來、度々借物七貫文返辨事、彼息左馬助ニ可有御下知之由事、

預金無沙汰督責

一本鄕僧同前（六月十六日）、

遠州河曲庄頭陀寺之土倉ニ預置拾貫文事、無沙汰之、可被成下御下知云々、

本願寺筑前政慶貸金返辨催促

被成奉書畢、

一山徒三位乘祐松九左一八十一廿八、

本願寺筑前政慶仁預置二百卅貫文內、旦(只イ)八十貫文渡之、相殘分無沙汰云々、

請取ヲ再ビ要求ス

一和久勘解由左衞門尉房直飯加一八十二五、

長祿三年積善庵仁借錢百貫文事、每年沙汰利平之處、兩年之請取令紛失畢、仍其分可致沙汰之由被申候、迷惑云々、

坂本德政無沙汰

一山徒大輔隆兼飯加一八十二廿四、

吉田彌次郎ニ借與廿貫文去（十二月二十四日）同前、

一山村孫三郎國近清泉州（二月三日）事、號坂本德政無沙汰云々、

貸金無沙汰

巉峨善入寺今號寶篋院、老母借與十貫文三石事、無沙汰云々、

〔政所方書〕二

勝定院領播磨善同庵知行

一勝定院雜掌申、末寺播州目賀善同庵領三野南條、繼緋田兩庄內一分地頭職事、松田五郎左衞門尉秀康、河勾十三郎實康仁所沽却也、然河勾十三郎彼庵江直錢百廿貫文仁永代賣、寄進當知行之處、秀康子孫松田左京亮就違亂、可出寺家支證候之由、爲國方申時分、當院末寺等重書、橫川飯室ニ預置間、不相待召寄之間、爲守護下知了、既證文之袖ニ勝定院殿樣被加御判之、仍出帶之上者、嚴重可預御成敗之由、

飯尾爲信別奉行トナル

此事飯加爲信、依爲別奉行、不及賦、被執申了、

十月廿日

幕府領和泉堺南莊

可置所務外中之由、御下知事被申、可被成之由頭人御返事、

一自上樣被仰出候、御乳人和泉堺御料所南庄百姓泉屋道榮申父處分料足事、同北庄八文字屋石原源次郎預リ置難澁之由、清泉州被參申、頭人御返事、可被成問狀奉書歟之由有之、申次親元、十一月廿二三日頃、

學藝、遊戲、

〔禿尾長柄帚〕二六十　景盧齋記

夫天地之氣、日新而無窮、則人材亦與之隨、而豈可有窮乎、由人材而衆藝出、於衆藝而有大有小、大者經世之才及載道之言也、小者醫卜之類是也、醫之爲藝、其名雖小、而濟人之功、其實大矣、予姑陳其所以大者、在昔炎帝肇嘗百草、藥毒名分、而本草經始于此、爲之醫典之祖、其後黃帝曉示衆病所起、而著內經、爲之醫家之宗、彼二經雖或疑先秦之士依倣而託之邪、其言昌矣、其旨邃矣、寧可非至人所述而得如此考覆乎、由是觀之、其經世也莫高於炎帝、其載道也莫遠於二經、將謂所自來尙矣、其後盧人秦越人、聞黃帝時有扁鵲、鵲者景仰以爲之號、著八十一難經、率舉內經之要而推其言者也、人之稟形於天地者、靡弗有病、之門不一而難知、々々而難治、以其所難而筆之、此書大也哉、君子之仁、如天之覆、如地之載、蓋天地覆載焉耳、於人有病不奈之何、醫之有仁、雖天地不可及焉、非是醫之功之大也哉、人陳其所以小者、人之有禍、莫甚於死、人將死必有病、々而不醫、自愈者十才一二尒、故病家以尋醫爲急、醫家亦以濟人爲急、於是乎庸醫之要售術者、弗慮我伎可能與不可能、彼病可治與不可治、而始則峻其劑、而急其効、後則俟其還與、馬而迎輦、錢帛而致信、手與藥、々與病相乖、則幸而雖可自愈者、不幸而遂革、々則不可起矣、嗚乎、假濟人之名而禍人、誰不痛惜

醫師永全
永全卜龍統

焉乎、以故楊雄法言有曰、醫多盧非是醫之藝之小也哉、今也醫之惡小好大者固鮮矣、有一偉人、名曰永全、以醫爲業、克通其書、先是予在醍醐寺、伏枕半歲、居以與全相接、無日不煩、未訊而示以養內外之方、故知之熟矣、聽其言、義而信、審其術、博而簡、怵然有急乎濟之容、泊然無苟乎利之心、止能視可治者、而所愈尤多、有立而愈者、有指期而愈者、視其不可治者、輒去不復顧焉、可謂其所志大矣、一日來告曰、我茅齋未扁、請名以作記、且鍼予所過、砭予所不及可也、予遽飯故里、而如胡越者殆十年矣、（文明八年カ）丙申春、予入洛、全也在泉州、又寄以紙督之弗已、因以景盧命焉、善非庸醫之漁名獵利而稱盧氏者、是實如越人以扁鵲爲號者、予之所期也、十年之前言、既信術、既簡容、既急利、既不苟、則今之所進、不問而可知矣、顧天地者古之天地也、八材亦可無今之盧乎、全也以是爲志、然勿以醫道之行爲喜、書以爲記、

永全和泉ニ在リ

〔新古今和歌集〕（圖書）〇東京佐々木信綱氏所藏

右書以或本書加了、于時文明八年三月十五日　和歌所寄人按察使親長（甘露寺）

新古今和歌集甘露寺親長奥書

〔寶生院經藏圖書目錄〕九

一觀普賢經

觀普賢經奥書

一軸

奥書曰、尾州海東郡富吉庄大野西方覺眞房釋迦寺御本書寫畢、文明八年丙申三月廿八日、

〔三寶院文書〕二十五〇山城

（血脈裏書）文明八年丙申八月七日寫功了、故本朽損間、拭老眼勵禿筆、如形書之了、殊更魚網盡失之時節也、用反古之條、後覽之至、彼此嘲寂也、將來之羞恥、兼而歎有餘者乎、雖然慥抽紹隆之丹地而已、羨斯卷烈祖垂照鑒矣、

法印俊□□十□

血脈裏書

〔神祇服紀令〕

本云文明第八曆仲秋天日曜吉時　從二位卜部朝臣（判）

右服紀令從吉田二位（兼俱卿）相傳之、可秘藏者也、

于時永正二年七月下旬　參議正三位行藤原基春

此一册者、基春卿眞筆也、依厚望、不顧惡筆加奥書者也、

延寶九仲秋日　藤原基時

神祇服紀令吉田兼俱奥書

〔寶生院經藏圖書目錄〕九

一三寶院印信等年月日　一通

印信

振鈴
源氏物語關屋卷
住吉法樂
千五百番歌合
影供歌合
般若心經

奧書曰、文明八年二月十五日、虫大法師位明海花押、

〈寶生院經藏圖書目錄〉 七

一印信

第八通　文明八年三月十日

〈寶生院經藏圖書目錄〉 十九

一振鈴口決

奧書曰、文明八年三月十日、授與重覺傳授大阿闍梨權少僧都宥箏示之、

〈實隆公記〉 三　十月六日、丙子、晴、依舊院上臈局命、源氏物語關屋卷書之了、

〈實隆公記〉 三　正月廿七日、壬申、天快晴、行水、住吉法樂短册三首書之、進舊院上臈局、

八月廿一日、壬辰、雨降、早旦行水、權大納言典侍局扇之和歌事被所望、書寫之、

九月廿二日、壬戌、雨降、千五百番歌合第八社一□左大臣□□今日書寫終功了、石見孫四郎貴經依所望也、

十二月十日、庚辰、雨降、影供歌合書寫之、

〈實隆公記〉 三　正月朔日、丙午、天晴、聊傾午枕、驚寢之後書般若心經一卷、試筆者也、

廿六日、辛未、晴、雪時々散、依統惠論師所望、長音供養文頃刻書與之了、

六月六日、戊寅、晴、晝間自毗沙門堂前座主有使者、同例時本可令書寫之由有命、先□（日カ）雖被示固辭之處、重而被命、先令領狀了、樂邦來話、

七月八日、己酉、陰、雨時々灑、今日□作法遣毗沙門堂了、

〈實隆公記〉 三　四月九日、壬午、晴、自禁裏御盃臺文字風庭、可書進上之由也、則書進上之、及晚雨降、

六月十一日、癸未、陰、自今日當番也、午剋著束帶參內、則參御前、法然上人繪四卷拜見之、

〈實隆公記〉 三　正月廿六日、辛未、晴、雪時々散、自二尊教院春日大明神御箏也、殊勝々々、

〈雅久宿禰記〉 九月五日、乙巳、霽、被談義在之、又同有朝飯事、直向茝（景愈）西堂聽聞論語談義、晡歸華、

十一日、辛亥、霽、音首座東坡蘭坡論語等談義聽聞、凡此間所々講義流布、每日事也、今日請詩題於蘭坡、吉田藏人同爲可作之也、又大學中庸可讀聞由、今朝約

長音供養文
法然上人繪卷
被談義
景茝論語ヲ講ズ
音首座蘇東坡ノ詩ヲ講ズ
講義流行

宗紹三體詩ヲ講ズ
龍澤東坡ノ詩ヲ講ズ
龍澤杜甫ノ詩ヲ講ズ
景三黃山谷ノ詩ヲ講ズ
平家物語
源氏物語初音卷
二位公詠歌口傳
和歌知規集
拾遺集

諸、

十二日、壬子、霽、入夜陰、紹藏主三體詩談義也、兼俱同道向之、

廿一日、辛酉、陰、朝小雨則止、宗紹藏主三體詩、(龍澤)大昌院東坡講問、向兩所聽之、兼俱卿同道、

〈雅久宿禰記〉　九月十八日、戊午、霽、又雨降、大昌院杜詩講議也、粟一盆遣之、

廿日、庚申、霽、(景三)橫川禪師山谷講議也、惣忩間不及聞書、

〈實隆公記〉　三　三月十三日、丁巳、雨相降、今日猶祇候、無殊事、於長橋局平家物語一二卷讀之、今夜候鬼間、

廿八日、壬申、雨降、入夜平家物語第一覽之、

〈實隆公記〉　三　正月二日、丁未、晴、今夜於竹園覽初音卷、

〈歷代殘闕日記〉　八十七言國卿記　十月廿二日、刑部卿、新宰相、千鶴丸白地來了、二位公詠歌口傳、予書寫也、和歌知規集兩帖借用也、

〈實隆公記〉　三　八月十七日、戊子、雨降、今日拾遺集下丹州了、入夜風雨甚、

〈東寺百合文書〉　よ十八　○山城

文明八年丙申四月春季分釋論第二

眞如門有十界差別歟事
眞如有形色歟事
相續識第六識歟事

文明八年丙申十月冬季分疏第一　末

發井心信心爲躰歟事
一心爲本居歟事
三毒中以何爲勝事

〈大乘院寺社雜事記〉　六十三　卯月三日、

一於一乘院御會在之、禪閤入御、東北院、修南院、東門院以下濟々參申云々、

八日、

一夏中手習連歌等如例、

廿五日、

一月次頭泰弘也禪閤渡御、

廿七日、

一英寬參申、連歌在之云々、

一乘院連歌會
夏中手習連歌
月次連歌

肥後藤崎宮千句
甘露寺親長亭月次和歌會
三十首當座和歌
甘露寺家歌會
同月次會

一於成就院御連歌在之、光秀夢想也、
五月廿五日、雨下、
一月次頭清賢法橋勤之、禪閤入御、
六月廿五日、
一月次連歌頭春覺律師、禪閤入御、

〔菊池温故〕一 ○肥後桑林山光久寺 文明八年、菊池重朝藤崎宮に於、千句之連歌を興行し、詩歌を詠せらるゝ時、忠直(隈部上總介)を會座有しと聞、(マヽ)

〔親長卿記〕七 正月廿八日、陰、及晩細雨下、今日予亭月次會也、十三日式日延引、今日適遂之、來臨人々、勸修寺大納言、讀師(四辻季春)右衞門督、勸解由小路前中納言、左大辨宰相、右大辨宰相俊通(飯尾)、元連(飯尾)爲信、清房(飯尾)、貳世法眼等也、有三十首當座如常、右兵衞督出題、懷紙短尺等有披講、元長講師也、

〔實隆公記〕三 正月廿六日、辛未、晴、雪時々散、今日甘露寺會始、懷紙遣之了、但延引爲明後日云々、

〔親長卿記〕七 二月十三日、晴、今日請取番也、月次會也、中院大納言、右衞門督、左右大辨、藏人辨政顯、元連、爲信、清房、貳世等也、讀師中院、講師政顯也、依及

昏當座短尺略披講了、元連頭人也、
三月十三日、朝雨下、午後晴、月次會也、勸修寺大納言頭役也、勸修寺大納言、右衞門督、勸解由小路、左右大辨、照明院、俊通、爲信、清房、貳世等也、有披講、讀師予、講師俊通、

〔實隆公記〕三 四月廿六日、己亥、晴、今日都護卿月次會也、有褒貶歌合、晩頭參內、

〔親長卿記〕七 七月廿一日、晴、月次會也、去月去々月依日野前左府事延引、右大辨宰相、量光、俊通等頭也、有披講、々師頭中將、實隆朝臣、讀師勸修寺大納言也、

〔實隆公記〕三 七月廿一日、壬戌、晴、今日都護卿月次會也、仍罷向會(有當座)□各來會、講師予沙汰之、

〔親長卿記〕七 八月十九日、晴、月次會也、中院、勸修寺大納言、四辻(季春)前中納言、右衞門督事、山名拜任事、武家御執奏、仍辭退云々、勸解由小路前中納言、政顯、武邊輩也、今日可祇候之(旨)間、被仰下之間、兼日懷帋不及披講、當座許披講、讀師中院大納言、講師貳世法眼也、

九月十七日、晴、今日月次會也、新(四辻)大納言、季春、中御門中納言宣胤、頭役也、勸修

寺、新大納言、勸解由小路前中納言、左大辨宰相、右大辨宰相、頭中將、實隆朝臣、藏人辨、政顯、照明院、長光、長興宿禰、爲信、三答清房、同爲規（貞脫カ）（善）世等也、有披講、講師元長、讀師新大納言也、

〔實隆公記〕三　九月十七日、丁巳、晴、今日都護卿亭月次會也、有褒貶、中院前大納言、勸修寺大納言、勸解由小路前中納言、右大辨宰相、量光、頭中將、實隆朝臣、政顯、照明院、宣親、中山少將、非會衆、依當番自飯尾加賀守、飯尾與三左衛門尉、石見孫四郎加入數畢、長興宿禰、爲信、爲規、貴經、頭役、貞世等也、

〔親長卿記〕七　十月十六日、晴、月次會也、有褒貶、中院前大納言、勸修寺大納言、勸解由小路前中納言、右大辨宰相、量光、頭中將、實隆朝臣、政顯、照明院、宣親、中山少將、非會衆、依當番自飯尾加賀守、飯尾與三左衛門尉、石見孫四郎加入數畢、長興宿禰、爲信、爲規、貴經、頭役、貞世等也、

〔實隆公記〕三　十月十六日、丙戌、天晴、今日甘露寺月次會、爲褒貶歌合、可來之由也、自朝罷向、中院、勸修寺、四□（季綱カ）（辻カ）勸解由小路、柳原、（前於寺政繩）右中辨等、其外武家輩少々在之、三十番歌合右兵衛督被出懷紙了、今夜宿樂邦院聯句口號、又有之、柳原同宿、

〔親長卿記〕七　十一月七日、晴、今日月次會也、中院前亞相、左大辨相公、頭中將等頭役也、來臨人々、中院前大納言、勸修寺大納言、新大納言、季春、勸解由小路前中納言、左大辨宰相、照明院、長興宿禰（小槻）（當小路）俊通、元連、爲信、貞世等也、兼日當座等有披講、々師俊通、讀師新大納言也、

中山宣親石山ヨリ上洛

三十番歌合

飛鳥井雅康亭和歌會始

十五首和歌

一身寺庚申十五首和歌

〔實隆公記〕三　十一月七日、丁未、天晴、今日都護卿亭月次會也、故予雖爲頭役、依歡樂不罷向、懷紙遣之了、

〔實隆公記〕三　正月二日、丁未、晴、右（今日）武衛被送題了、

九日、甲寅、晴、雪霰時々降、今日武衛亭會始也、仍遣一樽、未下刻著直垂罷向、勸修寺、廣橋等父子、滋野井、藤宰相、（柳川政國）右馬頭、伊勢、大館、小笠原以下濟々在座、披講（講師藏人右中辨等也、）了有盃酌數獻、沈醉過法、踏月歸宅、

〔實隆公記〕三　二月五日、己卯、天晴、冷泉（政爲）三位入來、十五首和歌張行、披講有之、

十九日、癸巳、晴、樂邦、左少丞等入來、十首當座興行之、

三月十七日、辛酉、晴、早旦退出、今日於戶部卿許、武衛等來會、有一續和歌、歌舞及夜、

廿三日、丁卯、晴、樂邦來話、入夜四辻（季經）宰相中將等入來、十首興行、樂邦被宿、

廿八日、壬申、雨降、及晚長橋局小督來、滋野井、（正親町三條實綱）少將等入來、一續興行之、

七月十九日、庚申、晴、今夜一身寺庚申十五首和歌獨吟及曉天、

八月九日、庚辰晴、及晚樂邦庵、四相公、中□(院)、滋野井等來會、十首當座和歌興行、
小飲、
九月廿日、庚申晴、今夜一夜百首詠之、
十月廿九日、己亥晴、今日右大辨宰相詩會也、懷紙遣之、(題書齋迎小春冬分一字、)晝間東向
携一樽被來、
〈實隆公記〉三　四月廿一日、甲午雨降、早旦行水、晝間左少辨來向、四辻有樂、
五月一日、癸卯天晴、於殿上碁局有興、
六日、戊申晴、入夜參御所、於若宮御方碁局兩□番有興、深更退出、右兵衛督入
來、
六月二日、甲戌早旦風雨甚、晝間於若宮御方碁局有興、
七月十六日、丁巳晴、宵柏入來、碁局有興、
八月五日、丙子天晴、入夜自他參竹園、象戲有興、
〈親長卿記〉七　二月九日、晴、八々來、有將碁(基)宿番祗候、民部卿相博之故也、
十月十八日、晴、入夜詣藤宰(永繼)相許、有將棊曉天歸宅、
〈實隆公記〉三　三月廿七日、辛未陰、早旦退出、餘酣過法、(濫)以量來、(松木宗綱)兵部卿、右兵

一夜百首
柳原量光亭詩會
樂
碁
肖柏
象戲

衛督、右大(柳原量光)辨等來、南隣鞠一足興行、予勸一盞、及晚御靈殿藤花歷覽有興、
四月四日、丁丑晴、及晚於南隣有鞠、綾小路來話、入夜小浴、
〈實隆公記〉三　二月四日、戊寅雨降、中將、滋野井、周防等來、双六有興、自四辻
有使者可來之由也、則罷向、勾當內侍來臨、已令歸了、一盞可張行之由被命、滋
野井同入來、沈醉、凌深雨歸宅、
〈親長卿記〉七　二月十六日、晴、入夜八々來、有十種香、
廿四日、雨下、有十種香、右大辨宰相等來、
〈實隆公記〉三　二月十八日、壬辰、滋野井中將等入來、十度飲興行之、
廿八日、壬寅晴、及晚自舊院上臈局有狀、可參之由也、罷向、勾當內侍、源亞相、滋
野井等參會、庭前之初花遊覽、有杯酌、歸宅之處、已丑刻也、
四月一日、甲戌天顏快晴、中院、肖柏等藤花歷覽、入夜來臨、有一盞、四辻宰相中
將入來、

鞠
雙六
十種香
十度飲
花見
藤花歷覽
法花寺殿疾ム

疾病、死亡、

〈大乘院寺社雜事記〉三　六十
一法花寺殿御不例、今日參申、御見參、御腰一向不立云々、不退寺大池等次ニ　五月八日、